

Oracle® Database

インストール・ガイド

10g リリース 1 (10.1.0.2.0) for Microsoft Windows

部品番号 : B13750-02

2004 年 10 月

Oracle Database インストール・ガイド, 10g リリース 1 (10.1.0.2.0) for Microsoft Windows

部品番号 : B13750-02

原本名 : Oracle Database Installation Guide, 10g Release 1 (10.1.0.2.0) for Windows

原本部品番号 : B10130-02

原著者 : Patricia Huey

原協力者 : Punsri Abeywickrema, Eric Belden, Phil Choi, Toby Close, Jim Emmond, Craig Foch, David Friedman, Alex Keh, Mark Kennedy, Peter LaQuerre, Rich Long, Anu Natarajan, Mark MacDonald, Matt McKerley, Mohamed Nosseir, Bharat Paliwal, Sham Rao Pavan, Christian Shay, Helen Slattery, Debbie Steiner, Linus Tanaka, Ravi Thammaiah, Sujatha Tolstoy, and Alice Watson

Copyright © 1996, 2004 Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記載された制約条件に従うものとし、著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	ix
対象読者	x
このマニュアルの構成	x
関連ドキュメント	xi
表記規則	xii
Oracle Database for Windows の新機能	xvii
Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) for Microsoft Windows の新機能	xviii
Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) で推奨されていないコンポーネント	xxiii
Oracle9i リリース 2 (9.2.0.4) の新機能	xxiii
1 Oracle Database インストールの概要	
Oracle Database コンポーネントのインストールの FAQ	1-2
Oracle Database または Oracle Database Client のインストール	1-2
Oracle Database Tools のインストール	1-4
Oracle アプリケーションとともに Oracle Database をインストール	1-5
他のデータベース・コンポーネントの Oracle Database 接続ツールのインストール	1-6
インストールの計画	1-7
Oracle Database のインストール・タイプ	1-8
Oracle Database のインストール方法	1-9
インストールの考慮事項	1-10
ライセンス情報	1-10
Windows と UNIX でのインストールの相違	1-10
Oracle Cluster Synchronization Services (CSS)	1-11
Oracle Universal Installer の概要	1-12

Oracle ベース・ディレクトリ	1-13
Oracle ホーム・ディレクトリ	1-13
複数 Oracle ホームのコンポーネント	1-13
複数 Oracle ホームのサポート	1-14
その他のソフトウェアのインストール	1-14
データベース構成オプション	1-17
データベース記憶域オプション	1-18
データベース管理オプション	1-20
データベース・バックアップおよびリカバリ・オプション	1-23
電子メール通知オプション	1-24
アップグレードの考慮事項	1-24
AL24UTFSS キャラクタ・セット	1-25
アプリケーションのリンクおよび再リンクのポリシー	1-25
Oracle Real Application Clusters のアップグレード要件	1-25
データベースのダウングレード	1-26

2 Oracle Database インストール前の要件

Oracle Database のハードウェア要件	2-2
ハードウェア・コンポーネントの要件	2-2
ハード・ディスク領域の要件	2-3
ハードウェア要件の確認	2-4
Oracle Database のソフトウェア要件	2-5
Oracle Database のハードウェアおよびソフトウェア要件	2-7
Windows Telnet サービスのサポート	2-7
Windows ターミナル サービスおよびリモートデスクトップのサポート	2-8
Windows サポート	2-9
Web ブラウザのサポート	2-9
Oracle Database のネットワークのトピック	2-10
DHCP コンピュータでのインストール	2-10
マルチホーム・コンピュータでのインストール	2-11
複数の別名を持つコンピュータでのインストール	2-12
ネットワーク化されていないコンピュータでのインストール	2-12
ループバック・アダプタのインストール	2-13
ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック	2-14
Windows NT でのループバック・アダプタのインストール	2-14
Windows 2000 でのループバック・アダプタのインストール	2-18

Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール	2-22
Windows NT からのループバック・アダプタの削除	2-24
Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタの 削除	2-24
個々のコンポーネントの要件	2-25
Oracle データファイルおよびリカバリ・ファイルのディスク記憶域の構成	2-25
Oracle データファイルまたはリカバリ・ファイル用ディレクトリの作成	2-26
自動ストレージ管理 (ASM) 用ディスクの構成	2-29
自動ストレージ管理の記憶域要件の指定	2-29
既存の自動ストレージ管理ディスク・グループの使用	2-32
自動ストレージ管理 (ASM) 用ディスクの構成	2-33
RAW 論理ボリュームまたは RAW パーティションの構成	2-36
既存の Oracle サービスの停止	2-39
Oracle Advanced Security の要件	2-39
Oracle Enterprise Manager の要件	2-39
Oracle Managed Files の要件	2-40
Oracle Real Application Clusters	2-40
Microsoft 管理コンソール用 Oracle スナップインの要件	2-40
Oracle Transparent Gateway の要件	2-41

3 Oracle Database のインストール

Oracle Database をインストールする前の考慮事項	3-2
複数の Oracle Database インストールの実行	3-2
すでに Oracle コンポーネントがあるシステムへのインストール	3-2
最小のメモリー要件でのインストール	3-3
コンポーネント固有のインストール・ガイドラインの再検討	3-4
インストール・ソフトウェアへのアクセス	3-6
リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール	3-6
リモート・コンピュータでの CD-ROM または DVD ドライブの共有	3-6
ローカル・コンピュータでの CD-ROM または DVD ドライブのマッピング	3-7
リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータでのインストール	3-8
ハード・ドライブからのインストール	3-8
リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール	3-9
Oracle Technology Network Japan の Web サイトからの Oracle ソフトウェアのダウンロード	3-9
ハード・ディスクへの Oracle Database ソフトウェアのコピー	3-10
Oracle Database ソフトウェアのインストール	3-10

4 Oracle Database のインストール後の作業

無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック	4-2
Oracle コンポーネントの構成	4-3
Oracle Messaging Gateway の構成	4-4
Oracle JVM および Oracle <i>interMedia</i> にネイティブにコンパイルされた Java ライブラリの インストール	4-4
Oracle Administration Assistant for Windows の構成	4-4
別の Oracle ホームからの Oracle Cluster Synchronization Services (CSS) の実行	4-5
Oracle Counters for Windows Performance Monitor の構成	4-5
Oracle Label Security の構成	4-5
Oracle Net Services の構成	4-6
Oracle Services for Microsoft Transaction Server の構成	4-7
Oracle Text が提供するナレッジ・ベースのインストール	4-7
Oracle XML DB の構成または再インストール	4-8
PL/SQL 外部プロシージャの構成	4-8
共有サーバー・サポートの構成	4-8
ジョブ・システムの接続情報の設定	4-9
自動ストレージ管理と通信するための Oracle Database の構成	4-10
Oracle Enterprise Manager Database Control を使用するためのデータベースの構成	4-10
Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) での Oracle9i 言語および定義ファイルの使用	4-10
Companion CD からの Oracle Database コンポーネントのインストール	4-11

5 インストールされた初期データベースの内容の確認

Enterprise Manager Database Control へのアクセス	5-2
Database Control のログイン権限の理解	5-2
ユーザーのアカウントとパスワードの確認	5-3
管理アカウントの確認	5-4
パスワードのロック解除および変更	5-7
SQL*Plus を使用したパスワードのロック解除および変更	5-7
Enterprise Manager Database Control を使用したパスワードのロック解除および変更	5-8
データベースの識別	5-9
サーバー・パラメータ・ファイルの特定	5-10
表領域およびデータファイルの識別	5-11
REDO ログ・ファイルの特定	5-12
制御ファイルの特定	5-13

Windows での Oracle Database サービスについて	5-14
---	------

6 Oracle Database ソフトウェアの削除

データベースからの Oracle HTML DB の削除	6-2
Oracle Cluster Synchronization Services (CSS) の削除	6-2
すべての Oracle Database コンポーネントの削除	6-3
Oracle サービスの停止	6-4
Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除	6-4
残りの Oracle Database コンポーネントの手動削除	6-5
自動ストレージ管理インスタンスの削除	6-6
Microsoft レジストリ エディタからの Oracle キーの削除	6-7
システム変数パスの更新	6-9
「スタート」メニューからの Oracle の削除	6-10
Oracle ディレクトリの削除	6-10

A Optimal Flexible Architecture

Optimal Flexible Architecture 標準の概要	A-2
Optimal Flexible Architecture 準拠インストールの特性	A-3
Optimal Flexible Architecture に対する Oracle Database 10g 用の変更	A-4
リリースによるディレクトリ・ツリーの相違	A-4
トップレベルの Oracle ディレクトリ	A-4
データベースのファイル名	A-5
データベース・ファイル名拡張子	A-5
Optimal Flexible Architecture ディレクトリのネーミング規則	A-5
ORACLE_BASE ディレクトリ	A-6
ORACLE_HOME ディレクトリ	A-6
ADMIN ディレクトリ	A-6
ORADATA ディレクトリ	A-7
DB_NAME ディレクトリ	A-7
Optimal Flexible Architecture および複数の Oracle ホームの構成	A-7
ORACLE_HOME ディレクトリの指定	A-7
デフォルトの Optimal Flexible Architecture データベースのインストール : 例	A-8
デフォルト以外の Optimal Flexible Architecture データベースのインストール : 例 1	A-9
デフォルト以外の Optimal Flexible Architecture データベースのインストール : 例 2	A-10

信頼性およびパフォーマンスの向上	A-12
ディスクのミラー化	A-12
ディスクのストライプ化	A-12
表領域に対する RAW パーティションの使用	A-13
Windows と UNIX 上の Optimal Flexible Architecture の比較	A-14
ディレクトリ・ネーミング	A-14
ORACLE_BASE ディレクトリ	A-14
Windows でのシンボリック・リンクのサポート	A-14

B Oracle Database 拡張インストール

非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール	B-2
レスポンス・ファイルを使用した非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール	B-2
サンプル・レスポンス・ファイルのカスタマイズ	B-3
新規レスポンス・ファイルの作成	B-4
Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定	B-5
異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールおよび使用	B-6
異なる言語での Oracle Universal Installer の実行	B-6
異なる言語での Oracle コンポーネントの使用	B-7

C Oracle Database グローバリゼーション・サポート

NLS_LANG パラメータ	C-2
一般に使用される NLS_LANG の値	C-3
MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定	C-5

D Oracle Database のポート番号の管理

コンポーネントおよびポート範囲	D-2
構成済のポートおよびアクセス URL	D-2
Oracle Management Agent の HTTP ポートの変更	D-3
Oracle Enterprise Manager Database Control ポートの変更	D-3
iSQL*Plus ポートの変更	D-4
Oracle Ultra Search ポートの変更	D-5

E Oracle Database のトラブルシューティング

要件の確認	E-2
インストール・エラーが発生した場合の操作	E-2
インストール・セッションのログの確認	E-3
Configuration Assistant のトラブルシューティング	E-3
Configuration Assistant の障害	E-4
致命的エラー	E-4
非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理	E-4
インストール失敗後のクリーン・アップ	E-5

用語集

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Database for Windows のインストールおよび構成方法について説明します。このマニュアルでは、Windows NT、Windows 2000、Windows XP および Windows Server 2003 オペレーティング・システムにインストールされる Oracle Database for Windows ソフトウェアの機能についてのみ説明します。

項目は次のとおりです。

- [対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)

対象読者

『Oracle Database インストール・ガイド』は、Oracle Database を単一のコンピュータにインストールするユーザーを対象としています。Oracle Database Client、Oracle Real Application Clusters および Cluster Ready Services (CRS)、Oracle Transparent Gateway for DRDA、Oracle Procedural Gateway for APPC、Oracle Companion CD、および Oracle Enterprise Manager Grid Control のインストール・ガイドは、それぞれの該当するインストール・メディアで提供されています。

このマニュアルを使用するには、次のことが必要です。

- サポートされている Microsoft Windows オペレーティング・システムが、コンピュータにインストールされ、テスト済であること
- Oracle Database ソフトウェアをインストールするコンピュータでの管理権限
- オブジェクト・リレーショナル・データベース管理の概念に精通していること

このマニュアルの構成

このマニュアルの構成は、次のとおりです。

第1章「Oracle Database インストールの概要」

Oracle Database および Oracle Universal Installer について紹介し、インストールのプロセスとアップグレードの考慮事項について説明します。

第2章「Oracle Database インストール前の要件」

サポートされているオペレーティング・システム、Oracle Database for Windows のインストール・タイプおよび個々のコンポーネントに対する要件、アップグレード情報およびサポートされているプロトコルについて説明します。

第3章「Oracle Database のインストール」

Oracle コンポーネントのインストール方法について説明します。

第4章「Oracle Database のインストール後の作業」

インストール後の構成タスクについて説明します。

第5章「インストールされた初期データベースの内容の確認」

インストールされた初期データベースの内容について説明します。

第6章「Oracle Database ソフトウェアの削除」

コンピュータからの Oracle コンポーネントの削除方法について説明します。

付録 A 「Optimal Flexible Architecture」

Optimal Flexible Architecture (OFA) 標準について説明します。

付録 B 「Oracle Database 拡張インストール」

拡張インストールについて説明します。

付録 C 「Oracle Database グローバリゼーション・サポート」

グローバリゼーション・サポートについて説明します。

付録 D 「Oracle Database のポート番号の管理」

デフォルトのポート番号を示し、割り当てられたポートをインストール終了後に変更する方法について説明します。

付録 E 「Oracle Database のトラブルシューティング」

インストールのトラブルシューティング情報について説明します。

用語集

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Database リリース・ノート』
- 『Oracle Database Client インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Database Companion CD インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Real Application Clusters インストレーションおよび構成』
- 『Oracle Transparent Gateway for DRDA インストレーションおよびユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Procedural Gateway for APPC Installation and Configuration Guide』
- 『Oracle Enterprise Manager Grid Control 基本インストレーションおよび構成』
- 『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』
- 『Oracle Database アップグレード・ガイド』
- 『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』

Oracle エラー・メッセージについては、『Oracle Database エラー・メッセージ』を参照してください。Oracle のエラー・メッセージの説明は、HTML 形式でのみ提供されています。インターネットに接続している場合は、Oracle オンライン・ドキュメントの Oracle メッセージ検索機能を使用して、目的のエラー・メッセージを検索できます。

ドキュメント・セットの多くの例では、Oracle のインストール時にデフォルトでインストールされるシード・データベースのサンプル・スキーマを使用しています。これらのスキーマの作成方法およびその使用方法の詳細は、『Oracle Database サンプル・スキーマ』を参照してください。

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

この項では、このマニュアルの本文およびコード例で使用される表記規則について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [本文の表記規則](#)
- [コード例の表記規則](#)
- [Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則](#)

本文の表記規則

本文では、特定の項目が一目でわかるように、次の表記規則を使用します。次の表に、その規則と使用例を示します。

規則	意味	例
太字	太字は、本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。	この句を指定すると、 索引構成表 が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システム指定の要素を示します。このような要素には、パラメータ、権限、データ型、Recovery Manager キーワード、SQL キーワード、SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージおよびメソッドがあります。また、システム指定の列名、データベース・オブジェクト、データベース構造、ユーザー名およびロールも含まれます。	NUMBER 列に対してのみ、この句を指定できます。 BACKUP コマンドを使用して、データベースのバックアップを作成できます。 USER_TABLES データ・ディクショナリ・ビュー内の TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。

規則	意味	例
固定幅フォントの小文字	<p>固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが指定する要素のサンプルを示します。このような要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名および接続識別子があります。また、ユーザーが指定するデータベース・オブジェクトとデータベース構造、列名、パッケージとクラス、ユーザー名とロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値も含まれます。</p> <p>注意: プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせるものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。</p>	<p>sqlplus と入力して、SQL*Plus をオープンします。</p> <p>パスワードは、orapwd ファイルで指定します。</p> <p>/disk1/oracle/dbs ディレクトリ内のデータ・ファイルおよび制御ファイルのバックアップを作成します。</p> <p>hr.departments 表には、department_id、department_name および location_id 列があります。</p> <p>QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。</p> <p>oe ユーザーとして接続します。</p> <p>JRepUtil クラスが次のメソッドを実装します。</p>
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。	<p>parallel_clause を指定できます。</p> <p>Uold_release.SQL を実行します。ここで、old_release とはアップグレード前にインストールしたリリースを示します。</p>

コード例の表記規則

コード例は、SQL、PL/SQL、SQL*Plus または他のコマンドライン文の例です。次のように固定幅フォントで表示され、通常のテキストと区別されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例で使用される表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。大カッコは、入力しないでください。	DECIMAL (<i>digits</i> [, <i>precision</i>])
{ }	中カッコは、カッコ内の項目のうち、1つが必須であることを表します。中カッコは、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE}

規則	意味	例
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の複数の選択項目の区切りに使用します。項目のうちの1つを入力します。縦線は、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE} [COMPRESS NOCOMPRESS]
...	水平の省略記号は、次のいずれかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 例に直接関連しないコードの一部が省略されている。 ■ コードの一部を繰り返すことができる。 	CREATE TABLE ... AS subquery; SELECT col1, col2, ... , coln FROM employees;
.	垂直の省略記号は、例に直接関連しない複数の行が省略されていることを示します。	SQL> SELECT NAME FROM V\$DATAFILE; NAME ----- /fs1/dbs/tbs_01.dbf /fs1/dbs/tbs_02.dbf . . . /fs1/dbs/tbs_09.dbf 9 rows selected.
その他の記号	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、記載されているとおりに入力する必要があります。	acctbal NUMBER(11,2); acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;
イタリック体	イタリック体は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダや変数を示します。	CONNECT SYSTEM/system_password DB_NAME = database_name
大文字	大文字は、システム指定の要素を示します。これらの要素は、ユーザー定義の要素と区別するために大文字で示されます。大カッコ内にかぎり、表示されているとおりの順序および綴りで入力します。ただし、大/小文字が区別されないため、小文字でも入力できます。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER_TABLES; DROP TABLE hr.employees;
小文字	小文字は、ユーザー指定のプログラム要素を示します。たとえば、表名、列名またはファイル名などです。 注意: プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせで使用するものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; sqlplus hr/hr CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;

Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則

次の表に、Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
ファイル名およびディレクトリ名	ファイル名およびディレクトリ名は大 / 小文字が区別されません。特殊文字の左山カッコ (<)、右山カッコ (>)、コロン (:)、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、縦線 () およびハイフン (-) は使用できません。円記号 (¥) は、引用符で囲まれている場合でも、要素のセパレータとして処理されます。Windows では、ファイル名が ¥¥ で始まる場合、汎用命名規則が使用されていると解釈されます。	c:¥winnt"¥"system32 は C:¥WINNT¥SYSTEM32 と同じです。
Windows コマンド・プロンプト	Windows コマンド・プロンプトには、カレント・ディレクトリが表示されます。このマニュアルでは、コマンド・プロンプトと呼びます。コマンド・プロンプトのエスケープ文字はカレット (^) です。	C:¥oracle¥oradata>
特殊文字	Windows コマンド・プロンプトで二重引用符 (") のエスケープ文字として円記号 (¥) が必要な場合があります。丸カッコおよび一重引用符 (') にはエスケープ文字は必要ありません。エスケープ文字および特殊文字の詳細は、Windows オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	C:¥>exp scott/tiger TABLES=emp QUERY=¥"WHERE job='SALESMAN' and sal<1600¥" C:¥>imp SYSTEM/password FROMUSER=scott TABLES=(emp, dept)
HOME_NAME	Oracle ホームの名前を表します。ホーム名には、英数字で 16 文字まで使用できます。ホーム名に使用可能な特殊文字は、アンダースコアのみです。	C:¥> net start OracleHOME_NAME_TNSListener

規則	意味	例
ORACLE_HOME および ORACLE_BASE	<p>Oracle8i より前のリリースでは、Oracle コンポーネントをインストールすると、すべてのサブディレクトリが最上位の ORACLE_HOME の直下に置かれました。ORACLE_HOME ディレクトリの名前は、Windows NT の場合はデフォルトでは C:\orant です。</p> <p>このリリースは、Optimal Flexible Architecture (OFA) のガイドラインに準拠しています。ORACLE_HOME ディレクトリ下に配置されないサブディレクトリもあります。最上位のディレクトリは ORACLE_BASE と呼ばれ、デフォルトでは C:\oracle\product\10.1.0 です。他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータに最新リリースの Oracle をインストールした場合、Oracle ホーム・ディレクトリは、デフォルトで C:\oracle\product\10.1.0\db_n に設定されます。n は最新の Oracle ホーム番号です。Oracle ホーム・ディレクトリは、ORACLE_BASE の直下に配置されます。</p> <p>このマニュアルに示すディレクトリ・パスの例は、すべて OFA の表記規則に準拠しています。</p>	%ORACLE_HOME%\rdbms\admin ディレクトリへ移動します。

Oracle Database for Windows の新機能

この章では、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) for Microsoft Windows の新機能について説明し、追加情報の参照先を示します。現在のリリースに移行するユーザーに役立つように、旧リリースの新機能情報も引き続き記載されています。

次の各項では、Oracle Database の新機能について説明します。

- [Oracle Database 10g リリース 1 \(10.1\) for Microsoft Windows の新機能](#)
- [Oracle Database 10g リリース 1 \(10.1\) で推奨されていないコンポーネント](#)
- [Oracle9i リリース 2 \(9.2.0.4\) の新機能](#)

関連資料：

- Oracle Database の新機能、オプションおよび拡張機能の一覧は、『Oracle Database 新機能』を参照してください。
- Oracle Documentation Library の詳細は、ドキュメント・メディアのルート・レベルにある README ファイルを参照してください。

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) for Microsoft Windows の新機能

この項の項目は次のとおりです。

- 自動ストレージ管理
- データベース・パスワードの暗号化
- Data Pump Import および Data Pump Export
- Instant Client
- ラージ・ページ・サポート
- Oracle Data Provider for .NET
- Oracle Enterprise Manager Database Control
- Oracle Home Selector
- Oracle Objects for OLE
- Oracle Provider for OLE DB
- Oracle Scheduler
- Oracle Services for Microsoft Transaction Server
- 個別のインストールが必要なコンポーネント
- 名前変更されたコンポーネント

自動ストレージ管理

自動ストレージ管理機能により、個々のディスク・デバイスの集合から1つのディスク・グループを作成できます。

関連資料：自動ストレージ管理の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

データベース・パスワードの暗号化

ユーザーが Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) データベースにリモート・ログインを試みると、パスワードは自動的に暗号化されてから、リモート・データベースに送信されます。

関連資料：『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の「Windows でのデータベースの管理」

Data Pump Import および Data Pump Export

Data Pump Import および Data Pump Export という 2 つの新しいユーティリティが、Oracle データベース間のファイル転送の高速化を実現します。従来のファイル転送ユーティリティ、Import および Export は、旧リリースの Oracle ソフトウェアで作成された Oracle データベースで使用するために残されています。

関連資料：『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の「Windows でのデータベース・ツール」

Instant Client

Oracle Call Interface (OCI) の Instant Client 機能は、OCI のインストールを簡略化します。Instant Client モードのアクティブ化は、Instant Client データ共有ライブラリをロードする機能にのみ依存します。Instant Client では、オペレーティング・システムのダイナミック・ローダーによりロードする必要があるのは、2 つのダイナミック・リンク・ライブラリのみです。

関連資料：

- 『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』の OCI Instant Client に関する項
- 『Oracle Database Client インストレーション・ガイド』

ラージ・ページ・サポート

ラージ・ページ・サポートにより、Windows Server 2003 上で実行される、メモリーを多く使用するインスタンスのパフォーマンスが向上します。新たに導入されたオペレーティング・システム・サポートを利用することで、Oracle Database では、リソースのアドレス指定をするプロセッサ・メモリーをより効率的に使用できるようになりました。

関連資料：『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の「64-bit Windows のラージ・ページのサポート」

Oracle Data Provider for .NET

Oracle Data Provider for .NET (ODP.NET) 10g リリース 1 (10.1) には、次の新機能があります。

- Oracle グリッドのサポート
Oracle Data Provider for .NET はグリッド対応であるため、開発者はアプリケーション・コードを変更しなくても、Oracle データベース・グリッドのサポートを利用できます。
- データベースの新しいデータ型のサポート
Oracle Data Provider for .NET では、データベース固有の新しいデータ型 BINARY_FLOAT および BINARY_DOUBLE をサポートします。

- 複数の Oracle ホームのサポート

Oracle Data Provider for .NET は、複数の Oracle ホームにインストールできます。複数のホームを使用可能にするために、一部の Oracle Data Provider for .NET ファイルにバージョン番号を含め、HOMEID を使用する必要があります。

- データベースでのスキーマベースの XMLType のサポート

Oracle Data Provider for .NET では、スキーマベースの固有の XMLType をサポートします。

関連資料：『Oracle Data Provider for .NET 開発者ガイド』

Oracle Enterprise Manager Database Control

Oracle Enterprise Manager Database Control は、データベースと同じ Oracle ホームにインストールされ、スタンドアロンの Oracle Containers for Java (OC4J) インスタンスをサポートします。

関連資料：

- 5-2 ページの「[Enterprise Manager Database Control へのアクセス](#)」。
- Oracle Enterprise Manager Database Control の詳細は、『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』を参照してください。

Oracle Home Selector

Oracle Home Selector は、「スタート」メニューから使用できなくなりました。かわりに、Oracle Home Selector に似た機能を持つ Oracle Universal Installer を使用します。

Oracle Objects for OLE

Oracle Objects for OLE (OO4O) 10g リリース 1 (10.1) には、次の新機能と更新された機能があります。

- Oracle グリッドのサポート

Oracle Objects for OLE はグリッド対応であるため、開発者はアプリケーション・コードを変更しなくても、Oracle データベース・グリッドのサポートを利用できます。

- 新しいデータ型のサポート

Oracle Objects for OLE 10g リリース 1 (10.1) は、BINARY_DOUBLE データ型および BINARY_FLOAT データ型をサポートするようになりました。これらのデータ型のインスタンスは、データベースからフェッチしたり、ストアド・プロシージャやファンクションを含む SQL 文や PL/SQL ブロックに、入力変数または出力変数として渡したりすることができます。

- 複数の Oracle ホームのサポート

Oracle Objects for OLE は、10g リリース 1 (10.1) より、複数の Oracle ホームにインストールできるようになりました。ただし、COM コンポーネントであるため、コンピュータでアクティブにできるのは 1 つのインスタンスのみです。つまり、現行 (最新) のインストールは、前のインストールを非アクティブにします。

複数のホームを使用可能にするには、HOMEID を使用する必要があります。また、一部の Oracle Objects for OLE ファイルには、バージョン番号が含まれます。

関連資料: 『Oracle Objects for OLE 開発者ガイド』

Oracle Provider for OLE DB

Oracle Provider for OLE DB 10g リリース 1 (10.1) には、次の新機能があります。

- Oracle グリッドのサポート

Oracle Provider for OLE DB はグリッド対応であるため、開発者はアプリケーション・コードを変更しなくても、Oracle データベース・グリッドのサポートを利用できます。

- Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) で導入された次のデータ型のサポート

- BINARY_DOUBLE
- BINARY_FLOAT

- 複数の Oracle ホームのサポート

Oracle Provider for OLE DB は、10g リリース 1 (10.1) より、複数の Oracle ホームにインストールできるようになりました。ただし、COM コンポーネントであるため、コンピュータでアクティブにできるのは 1 つのインスタンスのみです。つまり、現行 (最新) のインストールは、前のインストールを非アクティブにします。

複数のホームを使用可能にするために、一部の Oracle Provider for OLE DB ファイルにバージョン番号を含め、HOMEID を使用する必要があります。

関連資料: 『Oracle Provider for OLE DB 開発者ガイド』

Oracle Scheduler

このリリースには、エンタープライズ・スケジュール機能を提供する新しいデータベース・スケジューラである Oracle Scheduler が含まれています。OracleJobScheduler サービスを使用して、外部ジョブを開始できます。このサービスは、デフォルトでは使用できません。この外部ジョブ機能を使用するために、管理者は、このサービスを実行する必要があるユーザー・アカウントのユーザー名およびパスワードを設定し、サービスを使用可能にする必要があります。

関連資料：

- 『Oracle Database 新機能』 のスケジューラに関する項
- 『Oracle Database 管理者ガイド』 のスケジューラの概要に関する項
- 『Oracle Database 管理者ガイド』 のスケジューラの使用に関する項
- 『Oracle Database 管理者ガイド』 のスケジューラの管理に関する項

Oracle Services for Microsoft Transaction Server

Oracle Services for Microsoft Transaction Server は、Oracle Provider for OLE DB を介した Oracle Data Provider for .NET および Oracle ODBC ドライバを介した ODBC.NET により、.NET トランザクション・アプリケーションをサポートします。

個別のインストールが必要なコンポーネント

一部のコンポーネントが、Oracle Database インストール・メディアからインストールされなくなりました。

関連項目： 1-14 ページの「[その他のソフトウェアのインストール](#)」

名前変更されたコンポーネント

次のコンポーネントは、このリリースで名前が変更されました。

以前の名前	新しい名前
Oracle Windows Performance Monitor	Oracle Counters for Windows Performance Monitor
Oracle Administration Assistant for Windows NT	Oracle Administration Assistant for Windows
Oracle Demos	Oracle Examples

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) で推奨されていない コンポーネント

Oracle9i リリース 2 (9.2.0) の一部であった次の Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) コンポーネントは、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) でのインストールには使用できません。

- INTYPE File Assistant (IFA)
 - 移行ユーティリティ
 - Oracle Names
 - Oracle Trace
- Oracle Trace のかわりに SQL Trace および TKPROF を使用します。
- Pro*C GUI
 - Pro*COBOL 1.8.77

Oracle9i リリース 2 (9.2.0.4) の新機能

この項の項目は次のとおりです。

- [Oracle Data Provider for .NET](#)
- [Oracle Objects for OLE](#)
- [Oracle Provider for OLE DB](#)

Oracle Data Provider for .NET

Oracle Technology Network Japan (OTN-J) で公開された Oracle Data Provider for .NET リリース 9.2.0.4 には、次の機能が加わりました。

- プール接続の検証のサポート

Oracle Data Provider for .NET には、新しい接続文字列である `validate connection` があります。接続プールからの接続を検証するには、`validate connection` を `true` に設定します。デフォルトでは、`validate connection` は `false` に設定されます。

検証を実行すると、接続プールからの接続ごとにデータベースを往復するため、パフォーマンスに大きな影響を与える場合があります。したがって、`validate connection` 属性は、絶対に必要な場合にのみ使用してください。

- Oracle Data Provider for .NET での XML サポート

XML サポートにより、Oracle Data Provider for .NET では次の処理が可能になりました。

- XML データを Oracle データベース固有のデータ型 `XMLType` としてデータベースにそのまま格納します。
 - Oracle データベース・インスタンスから、Microsoft .NET 環境内に XML データとして保存されているリレーショナル・データおよびオブジェクトリレーショナル・データにアクセスし、Microsoft .NET フレームワークを使用して XML を処理します。
 - データベースに対する変更は、XML データを使用して保存します。
- PL/SQL 連想配列バインドのサポート

ODP.NET では、PL/SQL 連想配列（以前の PL/SQL の索引付き表）バインドがサポートされています。

アプリケーションでは、`OracleParameter` プロパティを使用して、`OracleParameter` を PL/SQL 連想配列として PL/SQL スタアド・プロシージャにバインドできます。

- `OracleCommand` オブジェクトおよび `OracleDataReader` オブジェクトでの `InitialLOBFetchSize` プロパティのサポート

Oracle Objects for OLE

Oracle Objects for OLE リリース 9.2.0.4 には、次の新しいデータ型があります。

- `TIMESTAMP`
- `TIMESTAMP WITH TIME ZONE`
- `TIMESTAMP WITH LOCAL TIME ZONE`
- `INTERVAL YEAR TO MONTH`
- `INTERVAL DAY TO SECOND`

Oracle Provider for OLE DB

Oracle Technology Network Japan (OTN-J) で公開された Oracle Provider for OLE DB リリース 9.2.0.4 には、次の機能が加わりました。

- Oracle Provider for OLE DB 専用の接続文字列属性 `UseSessionFormat`
`UseSessionFormat` は、デフォルトの NLS セッション形式を使用するか、あるいはセッションの継続中に、これらの形式の一部を Oracle Provider for OLE DB によってオーバーライドするかを指定します。
- Oracle9i リリース 1 (9.0.1) で導入された次のデータ型のサポート
 - `TIMESTAMP`
 - `TIMESTAMP WITH TIME ZONE`
 - `TIMESTAMP WITH LOCAL TIME ZONE`
 - `INTERVAL YEAR TO MONTH`
 - `INTERVAL DAY TO SECOND`

Oracle Database インストールの概要

この章では、Oracle Database for Windows の様々なインストール・タイプと、Oracle Database のインストール前に考慮する必要がある問題について説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- [Oracle Database コンポーネントのインストールの FAQ](#)
- [インストールの計画](#)
- [Oracle Database のインストール・タイプ](#)
- [Oracle Database のインストール方法](#)
- [インストールの考慮事項](#)
- [その他のソフトウェアのインストール](#)
- [データベース構成オプション](#)
- [データベース記憶域オプション](#)
- [データベース管理オプション](#)
- [データベース・バックアップおよびリカバリ・オプション](#)
- [電子メール通知オプション](#)
- [アップグレードの考慮事項](#)

Oracle Database コンポーネントのインストールの FAQ

次のガイドラインに従って、Oracle Database コンポーネントのインストール方法を決定します。

- [Oracle Database または Oracle Database Client のインストール](#)
- [Oracle Database Tools のインストール](#)
- [Oracle アプリケーションとともに Oracle Database をインストール](#)
- [他のデータベース・コンポーネントの Oracle Database 接続ツールのインストール](#)

Oracle Database または Oracle Database Client のインストール

Oracle Database のインスタンスを 1 つのみインストールする必要があるか、製品に精通するためにテスト・データベースをインストールする場合。

- デフォルト・インストールを使用してクイック・インストールを実行する場合は、『Oracle Database クイック・インストール・ガイド』を使用します。
- サイトに特殊な要件がある場合は、『Oracle Database インストール・ガイド』を使用します。

サイトで、トランザクション量の多いアプリケーションまたはデータ・ウェアハウス・アプリケーション用に設計されたデータベースが必要な場合。

このようなタイプのアプリケーション用に設計された初期データベースを作成する場合は、『Oracle Database インストール・ガイド』を使用し、「拡張インストール」方法を使用します。インストール後に、データ・ウェアハウス・アプリケーションがある場合は、『Oracle データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

複数の Oracle データベースをインストールする必要がある場合。

『Oracle Database インストール・ガイド』を使用し、非対話モードでの Oracle Universal Installer の実行を検討します。この方法では、各コンピュータに固有の設定を含むレスポンス・ファイルを使用して、コマンドラインで Oracle Universal Installer を実行できます。

サイトで Oracle データベースへのクライアント接続が必要な場合。

1. 『Oracle Database インストール・ガイド』を使用して、サーバーに Oracle Database をインストールします。
2. 『Oracle Database Client インストール・ガイド』を使用して、各クライアント・ノードに Oracle Database Client をインストールします。

多数のクライアント・ノードがある場合は、ソフトウェアの集中的なステージング、ドライブのマッピング、および非対話モードでの Oracle Universal Installer の実行を検討します。

クライアント・ノードで、新規 Oracle ホーム・ディレクトリへのデフォルト・インストールのみ必要な場合は、『Oracle Database Client クイック・インストール・ガイド』の使用を検討します。

Oracle Database クライアント・ノードのディスク領域が制限されている場合。

1. 『Oracle Database インストール・ガイド』を使用して、サーバーに Oracle Database をインストールします。
2. 『Oracle Database Client インストール・ガイド』または『Oracle Database Client クイック・インストール・ガイド』を使用して、各クライアント・ノードに Oracle Database Client をインストールし、「InstantClient」インストール・タイプを選択します。

多数のクライアント・ノードがある場合は、非対話モードでの Oracle Universal Installer の実行を検討します。

Oracle Database をアップグレードする必要がある場合。

『Oracle Database アップグレード・ガイド』を参照してください。

サイトのコンピュータがクラスタとして稼働するように構成されている場合に、Oracle Database をインストールする方法。

『Oracle Real Application Clusters インストールおよび構成』を使用して Oracle Real Application Clusters をインストールします。インストール・プロセスには、Cluster Ready Services クラスタウェアと Oracle Database のインストールが含まれます。

Standard Edition を Windows にインストールし、Oracle Real Application Clusters を 2 ノード・クラスタにインストールする必要のみある場合は、『Oracle Real Application Clusters クイック・インストール・ガイド for Oracle Database Standard Edition』の使用を検討します。

Oracle Database Tools のインストール

Oracle Application Server をインストールする必要がある場合。

『Oracle Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

Application Server のインストール方法は、Oracle Database をすでにインストールしてあるかどうかによって決まります。

- Oracle Database をインストールしていない場合、または既存の Oracle Database に Oracle Application Server を使用しない場合、Oracle Universal Installer では、Oracle Application Server を独自の Oracle Database とともにインストールします。このデータベースには、Oracle Application Server を実行するために必要なメタデータが移入されます。
- Oracle Application Server で既存の Oracle Database を使用する場合は、次のようにします。
 1. Oracle Application Server インストール・メディアから、Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行して、Application Server が必要とするメタデータをデータベースに移入します。
 2. 『Oracle Application Server インストレーション・ガイド』の説明に従って、残りの Oracle Application Server コンポーネントをインストールします。

Oracle Database 製品を管理および監視する必要がある場合。

データベースの作成、構成または削除、データベース・テンプレートの管理などの通常の管理機能を実行するには、次のいずれかの方法を使用します。

インストールしている単一のデータベースとリスナーのみ管理する手順は、次のとおりです。

1. 『Oracle Database インストレーション・ガイド』を使用して Oracle Database をインストールします。
2. Oracle Database から、Database Configuration Assistant を使用してデータベースを管理します。Oracle Database とともにデフォルトでインストールされる Oracle Enterprise Manager Grid Control も使用できます。

Oracle Database の監視や、複数のホスト、アプリケーション・サーバーおよびインストールしているデータベースを含むデータベースの管理など、高度な管理タスクを実行するには、次のように Oracle Enterprise Manager をインストールします。

1. 『Oracle Database インストレーション・ガイド』を使用して Oracle Database をインストールします。

Oracle Real Application Clusters の使用を計画している場合は、『Oracle Real Application Clusters インストレーションおよび構成』を使用して Oracle Database をインストールします。

- 『Oracle Enterprise Manager Grid Control 基本インストレーションおよび構成』を使用して、Oracle Enterprise Manager をインストールおよび構成します。構成後の作業については、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を使用します。

Oracle アプリケーションとともに Oracle Database をインストール

Oracle Database とともに Oracle アプリケーションをインストールする方法。

ほとんどの場合、Oracle Database 自体をインストールしてから Oracle アプリケーションをインストールします。そのアプリケーションの Oracle Universal Installer は、接続情報の入力を要求します。アプリケーション・ドキュメントで要件を確認してください。

Oracle Real Application Clusters データベースでアプリケーションを実装する必要がある場合は、『Oracle Real Application Clusters 配置およびパフォーマンス』を参照してください。

Oracle Database と通信する Web アプリケーションを作成する必要がある場合。

Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server をインストールします。

- 『Oracle Database インストレーション・ガイド』を使用して Oracle Database をインストールします。
- 『Oracle Database Companion CD インストレーション・ガイド』を使用して、Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server をインストールします。

デフォルト設定を使用して新規 Oracle ホームに Oracle HTML DB および Oracle HTTP Server をインストールする必要がある場合は、『Oracle Database Companion CD クイック・インストレーション・ガイド』の使用を検討します。

従来のアプリケーションベースのワークフローと E-Business 統合ワークフローの両方に対してプロセスを自動化および能率化する必要がある場合。

Oracle Workflow をインストールします。

- 『Oracle Database インストレーション・ガイド』を使用して Oracle Database をインストールします。
- 『Oracle Workflow for Oracle Database インストレーション・ノート』を使用して、Oracle Workflow をインストールします。

Oracle アプリケーションで Web サーバーが必要な場合。

Oracle HTTP Server をインストールします。

- 『Oracle Database インストレーション・ガイド』を使用して Oracle Database をインストールします。
- 『Oracle Database Companion CD インストレーション・ガイド』を使用して、Oracle HTTP Server をインストールします。

他のデータベース・コンポーネントの Oracle Database 接続ツールのインストール

Oracle アプリケーションで、APPC 対応のシステム（IBM メインフレーム・データおよびサービスを含む）に接続する必要がある場合。

『Oracle Procedural Gateway for APPC Installation and Configuration Guide』を使用して、Oracle Procedural Gateway for APPC をインストールします。その後、このドライバの使用について『Oracle Procedural Gateway for APPC User's Guide』を参照してください。

分散 Oracle アプリケーションが IBM MQSeries メッセージ・キューイング・システムを使用して相互に通信する必要がある場合。

『Oracle Procedural Gateway and Tools for IBM MQ Series Installation and User's Guide』を使用して、Oracle Procedural Gateway for IBM MQ Series をインストールします。

Oracle アプリケーションが IBM DRDA（Distributed Relational Database Architecture）データベースに接続する必要がある場合。

Windows の場合は、『Oracle Transparent Gateway for DRDA インストレーションおよびユーザーズ・ガイド for Microsoft Windows』を使用して、Oracle Transparent Gateway for DRDA をインストールします。UNIX システムの場合は、『Oracle Transparent Gateway for DRDA インストレーションおよびユーザーズ・ガイド for UNIX Systems』を使用します。

Oracle アプリケーションが Sybase データベースのデータにアクセスする必要がある場合。

『Oracle Database インストレーション・ガイド』を使用して、Oracle Transparent Gateway for Sybase をインストールします。Oracle Universal Installer の実行時に、「拡張インストール」を選択した後、「カスタム」インストール・タイプを選択します。インストール後、このドライバの使用の詳細は、『Oracle Transparent Gateway for Sybase Administrator's Guide』を参照してください。

Oracle アプリケーションが Microsoft SQL Server にアクセスする必要がある場合。

『Oracle Database インストレーション・ガイド』を使用して、Oracle Transparent Gateway for Microsoft SQL Server をインストールします。Oracle Universal Installer の実行時に、「拡張インストール」を選択した後、「カスタム」インストール・タイプを選択します。インストール後、このドライバの使用の詳細は、『Oracle Transparent Gateway for Microsoft SQL Server 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle アプリケーションが Teradata データベースのデータにアクセスする必要がある場合。

『Oracle Database インストレーション・ガイド』を使用して、Oracle Transparent Gateway for Teradata をインストールします。Oracle Universal Installer の実行時に、「拡張インストール」を選択した後、「カスタム」インストール・タイプを選択します。インストール後、

このドライバの使用の詳細は、『Oracle Transparent Gateway for Teradata Administrator's Guide』を参照してください。

Oracle アプリケーションが iWay Server データベースのデータにアクセスする必要がある場合。

『Oracle Transparent Gateway for iWay Installation and User's Guide for IBM zOS (OS/390)』を使用して、Oracle Transparent Gateway for iWay をインストールします。

インストールの計画

Oracle Database のインストール・プロセスは、次の 5 段階で構成されます。

1. **インストールの計画**: この章では、インストールできる Oracle 製品と、インストール開始前に考慮が必要な問題について説明します。
2. **インストール前の作業の完了**: 第 2 章では、Oracle Database のインストール前に完了する必要があるインストール前の作業について説明します。
3. **ソフトウェアのインストール**: 次の項を使用して Oracle Database をインストールします。
 - 第 3 章では、Oracle Universal Installer (OUI) を使用して Oracle Database をインストールする方法について説明します。
 - 付録 B では、拡張インストール、すなわち Oracle Database の複数インストールを実行する必要がある場合に使用する非対話型 (サイレント) インストールについて説明します。この付録では、Oracle コンポーネントを別の言語でインストールおよび使用する方法についても説明します。
 - 付録 E では、インストールで問題が発生した場合のトラブルシューティングのアドバイスをを行います。
 - 第 6 章では、Oracle Database を削除する方法について説明します。
4. **インストール後の作業の完了**: 第 4 章では、インストール後の作業について説明します。
5. **初期データベースの確認**: 第 5 章では、Oracle データベースのアカウント、パスワードおよびファイルの位置など、デフォルトの初期データベースの内容について説明します。Optimal Flexible Architecture に関する付録 A も参照できます。Optimal Flexible Architecture は、メンテナンスをほとんど必要としない信頼性のある Oracle インストールを可能にする一連のガイドラインです。付録 C ではグローバルゼーション・サポート情報について説明し、付録 D では Oracle Database ポート番号の管理方法について説明します。

Oracle Database のインストール・タイプ

Oracle Database 10g のインストール時には、次のインストール・タイプのいずれかを選択できます。

- **Enterprise Edition: Standard Edition** を選択した場合にインストールされる全製品に加えて、ライセンスが得られる Oracle Database オプションとデータベース構成および管理ツールがインストールされます。また、データ・ウェアハウスおよびトランザクション処理で普及している製品もインストールされます。
- **Standard Edition:** 管理ツール、完全分散、レプリケーション、Web 機能およびビジネス集中型アプリケーション構築機能の統合セットがインストールされます。

注意： Standard Edition のライセンスを購入し、カスタム・インストールを実行する場合、Standard Edition のライセンスの対象となっているコンポーネントのみをインストールしてください。

- **Personal Edition: Enterprise Edition** インストール・タイプと同じソフトウェアがインストールされますが、Enterprise Edition および Standard Edition と完全な互換性を必要とする単一ユーザーの開発および配布環境のみがサポートされます。Oracle Real Application Clusters は、Personal Edition ではインストールされません。

注意： Oracle9i リリース 1 (9.0.1.1.1) が、Personal Edition on Windows 98 用の最終リリースです。

- **カスタム:** 使用可能な全コンポーネントのリストから、インストールするコンポーネントを個別に選択できます。

注意： Oracle Database Client は別にインストールされます。Oracle Database インストール時に、Oracle Database Client をインストールすることはできません。

関連資料：

- Oracle Database Client のインストール手順は、『Oracle Database Client インストール・ガイド』を参照してください。
- 各 Oracle Database エディションで使用可能な機能の詳細とライセンスに関する情報は、『Oracle Database ライセンス情報』を参照してください。

Oracle Database のインストール方法

Oracle Database のインストールに使用できる方法は 2 つあります。

- **基本**: Oracle Database を短時間でインストールする場合は、このインストール方法を選択します。このインストール方法に必要なユーザー入力は最小限です。この方法では、ソフトウェアがインストールされ、この画面で指定する情報を使用して、汎用のデータベースがオプションで作成されます。これはデフォルトのインストール方法です。
- **拡張**: 次のいずれかのタスクを実行する場合は、このインストール方法を選択します。

- コンポーネントを個別に選択するカスタム・ソフトウェア・インストールを実行するか、別のデータベース構成を選択する場合

「使用可能な製品コンポーネント」インストール画面では、Oracle Database インストールでほとんどの顧客が必要とするコンポーネントが自動的に選択されます。デフォルトで選択されないが含める必要のあるコンポーネントも、いくつかリストされます。使用可能なコンポーネントのリストを探すには、「**拡張**」を選択し、「インストール・タイプ」画面で「**カスタム**」を選択します。

関連項目: 3-4 ページの「[コンポーネント固有のインストール・ガイドラインの再検討](#)」

- Oracle Real Application Clusters をインストールする場合
- 既存のデータベースをアップグレードする場合
- データベース・キャラクタ・セットまたは異なる製品言語を選択する場合
- インストール時に EXAMPLE 表領域を作成する場合
- ソフトウェアから別のファイル・システムにデータベースを作成する場合
- 自動ストレージ管理 (ASM) を構成するか、データベース記憶域に RAW デバイスを使用する場合
- 管理スキーマに別のパスワードを指定する場合
- 自動バックアップまたは Oracle Enterprise Manager 通知を構成する場合

インストールの考慮事項

この項では、Oracle Universal Installer と、インストールの計画時に知っておく必要のあるその他の概念についての情報を提供します。

- [ライセンス情報](#)
- [Windows と UNIX でのインストールの相違](#)
- [Oracle Cluster Synchronization Services \(CSS\)](#)
- [Oracle Universal Installer の概要](#)
- [Oracle ベース・ディレクトリ](#)
- [Oracle ホーム・ディレクトリ](#)

ライセンス情報

メディア・バック内のインストール・メディアには多数の Oracle コンポーネントが含まれていますが、使用できるのはライセンスを購入したコンポーネントのみです。

オラクル社カスタマ・サポート・センターでは、ライセンスを購入していないコンポーネントに対するサポートを提供していません。

関連資料：『Oracle Database ライセンス情報』

Windows と UNIX でのインストールの相違

UNIX 環境で Oracle コンポーネントをインストールした経験のあるデータベース管理者は、UNIX で必要な多くの手動設定の作業が Windows では必要ないことに気付きます。UNIX でのインストールと Windows でのインストールにおける主な相違点は次のとおりです。

- 開始サービスと停止サービス
UNIX では、管理者が開始サービスと停止サービスの作成に責任を持ちます。Windows では、Oracle Universal Installer がインストール時にこれらのサービスを作成および設定します。
- 環境変数
UNIX オペレーティング・システムでのインストールの場合、PATH、ORACLE_BASE、ORACLE_HOME、ORACLE_SID などの環境変数は、手動で設定する必要があります。Windows オペレーティング・システムでのインストールの場合、これらの環境変数は Oracle Universal Installer によりレジストリで設定されます。
- データベース管理者の DBA アカウント
UNIX オペレーティング・システムでのインストールの場合、このアカウントは手動で作成する必要があります。Windows オペレーティング・システムでのインストールの場合、Oracle Universal Installer により ORA_DBA グループが作成されます。

- Oracle Universal Installer を実行するためのアカウント

UNIX オペレーティング・システムでのインストールの場合、このアカウントは手動で作成する必要があります。Windows オペレーティング・システムでのインストールの場合、管理者権限でログインするのみです。別のアカウントは必要ありません。

関連資料：『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の「Oracle Database の Windows と UNIX での違い」

Oracle Cluster Synchronization Services (CSS)

Oracle Database をシステムに初めてインストールする場合は、Oracle Universal Installer によって、単一ノードの Oracle Cluster Synchronization Services (CSS) のサービスが構成され、開始されます。CSS サービスは、自動ストレージ管理 (ASM) インスタンスと、データベース・ファイルの記憶域に関して ASM インスタンスに依存するデータベース・インスタンスとの同期をとるために必要です。データベース・ファイルの記憶域メカニズムとして自動ストレージ管理を選択しない場合でも、サービスは構成され、開始されます。CSS サービスは、自動ストレージ管理インスタンスまたはデータベース・インスタンスが起動される前に実行されている必要があるため、Oracle Universal Installer により、システムの起動時に自動的に開始するように構成されます。

Oracle Real Application Clusters のインストールの場合、CSS サービス、Oracle Cluster Ready Services (CRS) とともに別の Oracle ホーム・ディレクトリ (CRS ホーム・ディレクトリとも呼ばれる) にインストールされます。単一ノードのインストールの場合、CSS サービスは Oracle Database と同じ Oracle ホームにインストールされ、実行されます。このため、Oracle Database ソフトウェアをシステムから削除するときには注意が必要です。Oracle Database が格納されている Oracle ホーム・ディレクトリを削除する前に、CSS サービス構成を削除するか、または必要に応じて別の Oracle ホーム・ディレクトリから実行されるように CSS サービスを再構成する必要があります。

注意：単一システムに複数の Oracle Database をインストールし、データベース・ファイルの記憶域に自動ストレージ管理を使用する場合は、CSS サービスと自動ストレージ管理インスタンスを同じ Oracle ホーム・ディレクトリから実行し、データベース・インスタンスには別の Oracle ホーム・ディレクトリを使用することをお勧めします。

関連項目：

- 4-5 ページの「別の Oracle ホームからの Oracle Cluster Synchronization Services (CSS) の実行」
- 6-2 ページの「Oracle Cluster Synchronization Services (CSS) の削除」

Oracle Universal Installer の概要

Oracle Universal Installer は、Oracle ソフトウェアをインストールおよび削除できる Java ベースの Graphical User Interface (GUI) ツールです。Oracle Universal Installer には、次の機能があります。

- コンポーネントおよびコンポーネント・セットのインストール
- グローバリゼーション・サポート
- 分散インストールのサポート
- レスポンス・ファイルを使用した自動のサイレント・インストール
- インストール済コンポーネントの削除
- 複数の Oracle ホームのサポート

Oracle Universal Installer は、Oracle ソフトウェアの非対話型インストールを実行でき、オプションでサイレント・モードに設定できます。サイレント・モードはバックグラウンド・プロセスであるため、画面が表示されません。詳細は、B-2 ページの「[非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール](#)」を参照してください。

旧 Oracle Installer (リリース 7.x や 8.0.x とともに出荷) を使用して、コンポーネントを Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールすることはできません。同様に、10g リリース 1 (10.1) のコンポーネントは、リリース 7.x、8.0.x、8.1.5 または 9.x の Oracle ホームにインストールできません。

Oracle Universal Installer により、Java Runtime Environment (JRE) の Oracle バージョンが自動的にインストールされます。このバージョンは、Oracle Universal Installer およびいくつかの Oracle Assistant の実行に必要です。

Oracle Universal Installer を実行すると、*OraHome_n* ディレクトリが作成されます。このディレクトリでは、インストールしているコンポーネントが追跡されます。このディレクトリの内容は変更しないでください。デフォルトでは、ディレクトリは ORACLE_HOME と同じディレクトリ・レベルにあります。

関連資料:

- 付録 B 「[Oracle Database 拡張インストール](#)」
- 『Oracle Universal Installer Concepts Guide』

『Oracle Universal Installer Concepts Guide』は、Oracle Documentation Library に含まれており、インストール時に自動的にハード・ドライブにインストールされます。このマニュアルにアクセスするには、「[スタート](#)」メニューから「[プログラム](#)」→「[Oracle - ORACLE_HOME](#)」→「[Oracle Installation Products](#)」→「[Universal Installer Concepts Guide](#)」を選択します。

Oracle ベース・ディレクトリ

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) を他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータにインストールする場合、Oracle Universal Installer により Oracle ベース・ディレクトリが作成されます。Oracle ソフトウェアがすでにインストールされている場合は、1つ以上の Oracle ベース・ディレクトリがすでに存在します。後者の場合、Oracle Universal Installer で Oracle Database をインストールする Oracle ベース・ディレクトリを選択できます。

インストール前に Oracle ベース・ディレクトリを作成する必要はありませんが、必要に応じて作成することもできます。Oracle Universal Installer が認識する ORACLE_BASE 環境ディレクトリを、このディレクトリを指すように設定できます。

注意： システムに他の Oracle ベース・ディレクトリが存在する場合にも、新規 Oracle ベース・ディレクトリを作成するように選択できます。

Oracle ホーム・ディレクトリ

Oracle ホームは、Oracle コンポーネントが実行される環境を表します。この環境には、次のものが含まれています。

- インストールされたコンポーネント・ファイルの場所
- インストールされたコンポーネントのバイナリ・ファイルを指す PATH 変数
- レジストリのエントリ
- サービス名
- プログラム・グループ

また、Oracle ホームには1つの名前が関連付けられます。その名前は、インストール時に場所とともに指定します。

複数 Oracle ホームのコンポーネント

10g リリース 1 (10.1) から、すべての Oracle コンポーネントを同じコンピュータ上の複数の Oracle ホームにインストールできるようになりました。ただし、一部のコンポーネントは、一度に1つのアクティブ・インスタンスしかサポートできません。つまり、現行（最新）のインストールは、前のインストールを非アクティブにします。これらのコンポーネントは次のとおりです。

- Oracle Administration Assistant for Windows
- Oracle Counters for Windows Performance Monitor
- Oracle Objects for OLE
- Oracle Provider for OLE DB

注意： Oracle7 のコンポーネントおよび Oracle8 リリース 8.0.3 のコンポーネントは、すべて複数 Oracle ホーム製品ではありません。

複数 Oracle ホームのサポート

Oracle Database は、複数の Oracle ホームをサポートします。つまり、このリリース以下のソフトウェアを、同じシステムの異なる Oracle ホーム・ディレクトリに複数回インストールできます。

この製品は、新規の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする必要があります。Oracle Database のあるリリースから別のリリースの Oracle ホーム・ディレクトリには、製品をインストールできません。たとえば、既存の Oracle9i の Oracle ホーム・ディレクトリには 10g リリース 1 (10.1) ソフトウェアをインストールできません。このリリースを以前の Oracle リリースのソフトウェアがインストールされている Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしようとすると、失敗します。

このリリースは、別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールするかぎり、同じシステムに複数回インストールできます。

その他のソフトウェアのインストール

次のコンポーネントには、別のインストールが必要です。これらのコンポーネントは、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) のインストール・メディアからは入手できません。

- [Cluster Ready Services](#)
- [Oracle Database Client](#)
- [Oracle Database Companion CD Components](#)
- [Oracle HTTP Server](#)
- [Oracle Database Examples](#)
- [Oracle Enterprise Manager Grid Control フレームワーク](#)
- [Oracle Migration Workbench](#)
- [Oracle Internet Directory クライアント・ツール](#)

Cluster Ready Services

Oracle Cluster Ready Services (CRS) は、Oracle Real Application Clusters インストールに必要な主要サブコンポーネントです。ワークロード管理およびコンポーネントの再起動を実行します。たとえば、特定のサービスをサポートするインスタンスが失敗した場合、Cluster Ready Services により、そのサービスに設定しておいた次に使用可能なインスタンスでサービスが再開されます。

Cluster Ready Services は、Oracle Real Application Clusters より前にインストールする必要があります。CRS は、Cluster Ready Services インストール・メディアで提供されています。

関連資料：詳細は、『Oracle Real Application Clusters インストレーションおよび構成』を参照してください。

このマニュアルは、Oracle Database インストール・メディアで提供されています。

Oracle Database Client

このリリースから、Oracle Client ソフトウェアは、Oracle Client インストール・メディアで提供されています。

関連資料：詳細は、『Oracle Database Client インストレーション・ガイド』を参照してください。

このマニュアルは、Oracle Client インストール・メディアで提供されています。

Oracle Database Companion CD Components

次のコンポーネントは、Oracle Database Companion CD インストール・メディアで提供されています。

- Legato Single Server Version
- ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ
- Oracle Database Examples
- Oracle HTML DB
- Oracle HTTP Server
- Oracle Text が提供するナレッジ・ベース

関連資料：詳細は、『Oracle Database Companion CD インストレーション・ガイド』を参照してください。

このマニュアルは、Oracle Database Companion CD インストール・メディアで提供されています。

Oracle HTTP Server

Oracle HTTP Server は、Oracle Database Companion CD インストール・メディアで提供されています。

関連資料：詳細は、『Oracle Database Companion CD インストール・ガイド』を参照してください。

このマニュアルは、Oracle Database Companion CD インストール・メディアで提供されています。

Oracle Database Examples

Oracle Database Examples は、以前は Oracle Demos と呼ばれていたもので、Oracle Database Companion CD インストール・メディアで提供されています。

関連資料：詳細は、『Oracle Database Companion CD インストール・ガイド』を参照してください。

このマニュアルは、Oracle Database Companion CD インストール・メディアで提供されています。

Oracle Enterprise Manager Grid Control フレームワーク

Oracle Enterprise Manager Grid Control フレームワークには、Oracle Management Agent、Oracle Management Service および Oracle Management Repository が、ブラウザベースの中央コンソールで、管理者が企業の監視、管理および構成タスクをすべて実行できる Grid Control とともに含まれています。

関連資料：Oracle Enterprise Manager Grid Control インストール・メディアで提供されている『Oracle Enterprise Manager Grid Control 基本インストール・ガイド』を参照してください。

Oracle Migration Workbench

Oracle Migration Workbench ソフトウェアおよびドキュメントは、次の URL で入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/software/tech/migration/>

Oracle Internet Directory クライアント・ツール

Oracle Internet Directory クライアント・ツールは Oracle Database のこのリリースで使用できますが、Oracle Internet Directory サーバー・コンポーネントは使用できません。Oracle Internet Directory サーバー・コンポーネントをインストールする場合は、Oracle Application Server 10g インストールから Oracle Universal Installer を実行します。

Oracle Internet Directory クライアント・ツールとは、LDAP コマンドライン・ツール、Oracle Internet Directory SDK および Oracle Directory Manager です。Oracle Internet Directory サーバー・コンポーネントには、ディレクトリ・サーバー、ディレクトリ・レプリケーション・サーバー、ディレクトリ統合サーバーと、これらを開始および停止する各種ツールが含まれます。

データベース構成オプション

インストール時に、インストールの一環として Oracle データベースを作成するかどうかを選択できます。Oracle データベースの作成を選択すると、Oracle Universal Installer は、Database Configuration Assistant (DBCA) を使用して Oracle データベースを作成します。様々な異なるアプリケーション用に設計されている事前構成済データベース・タイプの 1 つを作成するか、事前構成済データベース・タイプの 1 つを修正するか、または自分の要件に適したカスタマイズ・データベースを作成するかを選択できます。

事前構成済データベース・タイプ

インストール時に作成やカスタマイズができる事前構成済データベースのタイプには、次のものがあります。

- 汎用目的
- トランザクション処理
- データ・ウェアハウス

これらの事前構成済データベース・タイプの説明は、Oracle Universal Installer または Database Configuration Assistant のオンライン・ヘルプを参照してください。

データベースの作成に影響するインストールの選択

Oracle Universal Installer は、インストール時の選択により、次の 2 通りのモードで Database Configuration Assistant を実行します。

- 非対話モード

Enterprise Edition、Standard Edition または Personal Edition のいずれかのインストール・タイプを選択し、事前構成済データベースのタイプを選択すると、Oracle Universal Installer により、選択したタイプのデータベースの作成に必要な最低限の情報が入力が要求されます。さらに、初期プロンプト・セッションでは扱われない情報のデフォルト設定を使用して Database Configuration Assistant をバックグラウンド・プロセスとして実行し、ソフトウェアのインストール後にデータベースを作成します。

注意： 事前にデータベースを作成していない場合、この方法を使用してデータベースを作成することをお勧めします。

- 対話モード

「カスタム」インストール・タイプまたは「拡張」データベース構成オプションを選択すると、Oracle Universal Installer からデータベース情報の入力には要求されません。かわりに、Oracle Universal Installer によってソフトウェアがインストールされ、その後に対話モードで Database Configuration Assistant が実行されます。Database Configuration Assistant の画面を使用すると、事前構成済データベース・タイプの 1 つ

を変更することも、カスタム・データベースを作成して、そのデータベースの構成方法を正確に指定することもできます。

注意：この方法を選択してデータベースを作成する場合、Database Configuration Assistant の任意の画面で「ヘルプ」をクリックすれば、指定する必要のある情報の説明を表示できます。

インストール後のデータベースの作成

インストール時にデータベースを作成しない場合は、Database Configuration Assistant を使用してソフトウェアのインストール後にデータベースを1つ作成できます。

関連資料：インストール後に Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成する方法の詳細は、『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』を参照してください。

データベース記憶域オプション

インストール時にデータベースを作成するように選択した場合は、データベース・ファイルについて次の3つの記憶域オプションから1つを指定できます。

- [ファイル・システム](#)
- [自動ストレージ管理 \(ASM\)](#)
- [RAW デバイス](#)

ファイル・システム

ファイル・システム・オプションを選択すると、Database Configuration Assistant により、コンピュータのファイル・システムのディレクトリにデータベース・ファイルが作成されます。オペレーティング・システムまたは Oracle ソフトウェアで 사용되는ファイル・システムとは異なるファイル・システムを選択することをお勧めします。次のいずれかのファイル・システムを選択できます。

- システムに物理的に接続されているディスク上のファイル・システム
論理ボリュームまたは RAID デバイス以外の基本ディスクにデータベースを作成する場合は、[付録 A](#) で説明する Optimal Flexible Architecture (OFA) 推奨事項に従い、データベース・ファイルを複数のディスクに分散させることをお勧めします。
- 論理ボリューム・マネージャ (LVM) または RAID デバイス上のファイル・システム
LVM または RAID 構成で複数のディスクを使用している場合は、Stripe-And-Mirror-Everything (SAME) 方法論を使用してパフォーマンスと信頼性を高めることをお勧めします。この方法論を使用すると、データベース記憶域用に複数のファイル・システムのマウント・ポイントを指定する必要がなくなります。

「カスタム」インストール・タイプまたは「拡張」データベース作成オプションを選択すると、新規データベースで Oracle Managed Files の機能を使用するように選択することもできます。この機能を使用すると、データベース・ファイルを作成または削除するときに、ファイル名ではなく、データベース・オブジェクト名を指定すれば実行できます。

関連資料： Oracle Managed Files の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

自動ストレージ管理 (ASM)

自動ストレージ管理 (ASM) は、サポートされているプラットフォームすべてで一貫性のある、Oracle データベース・ファイル向けの高パフォーマンスの記憶域管理ソリューションです。自動ストレージ管理は特にデータベース管理者 (DBA) のジョブを簡素化するように設計されており、動的なデータベース環境の管理を簡素化する柔軟な記憶域ソリューションを提供します。自動ストレージ管理により、手動による I/O パフォーマンスのチューニング・タスクはほとんど必要ありません。

自動ストレージ管理 (ASM) は、Windows 2000、Windows XP および Windows Server 2003 でサポートされています。自動ストレージ管理は Windows NT ではサポートされていません。

データベース記憶域に自動ストレージ管理を使用するには、1つ以上の ASM ディスク・グループを作成する必要があります。ディスク・グループとは、自動ストレージ管理により1つのユニットとして管理されるディスク・デバイスの集合です。自動ストレージ管理はディスク・グループのデバイスすべてにデータを均等に分散させて、パフォーマンスと使用率を最適化します。ディスク・グループの作成時には、ディスク障害から保護するために、3つの冗長性レベルの1つを選択できます。冗長性レベルにより、ディスク・グループ内のファイルをミラー化する方法が次のように定義されます。

冗長性レベル	ミラー化
標準	2方向ミラー化
高	3方向ミラー化
外部	自動ストレージ管理によるミラー化なし

自動ストレージ管理を使用すると、管理性、パフォーマンスおよび信頼性が向上するのみでなく、データベースの可用性も向上します。データベースを停止せずに、ディスク・グループに対してディスク・デバイスの追加または削除ができます。ディスクを追加または削除すると、ディスク・グループ間のファイルのバランスが自動ストレージ管理により自動的に再調整されます。

ディスク・グループは、自動ストレージ管理インスタンスと呼ばれる特殊な Oracle インスタンスにより管理されます。このインスタンスは、記憶域管理に自動ストレージ管理を使用するデータベース・インスタンスを起動する前に、実行する必要があります。データベース

用の記憶域メカニズムとして自動ストレージ管理を選択すると、Database Configuration Assistant により必要に応じてこのインスタンスが作成され、起動されます。

関連資料：

- 自動ストレージ管理の管理については、『Oracle Database 概要』を参照してください。
- 自動ストレージ管理の詳細な説明は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

RAW デバイス

RAW デバイスは、ファイル・システムでフォーマットされていないディスク・パーティションまたは論理ボリュームです。データベース・ファイル記憶域に RAW デバイスを使用すると、Oracle はオペレーティング・システムのファイル・システム・レイヤーを迂回して、データをパーティションまたはボリュームに直接書き込みます。このため、RAW デバイスを使用するとパフォーマンスが高まる場合があります。ただし、RAW デバイスの作成と管理は困難な場合があり、最新のファイル・システムに使用してもパフォーマンスはわずかに向上しないため、RAW デバイスよりも自動ストレージ管理またはファイル・システム記憶域を選択することをお勧めします。

データベース管理オプション

データベース管理を容易にするために、Oracle では Oracle Enterprise Manager と呼ばれる Web ベースの管理ツールが提供されています。Oracle Enterprise Manager は、次の 2 通りの方法により配置できます。

- Oracle Enterprise Manager を環境の中心に配置

Oracle Enterprise Manager を中心に配置するには、1 つ以上の Oracle Management Repository と 1 つ以上の Oracle Management Service を自分の環境にインストールした後、管理する必要があるすべてのコンピュータに Oracle Management Agent をインストールする必要があります。その後、単一の HTML インタフェースを使用して、それらの全システムのソフトウェア・ターゲットおよびハードウェア・ターゲットを管理および監視できます。ターゲットには、Oracle データベース、アプリケーション・サーバー、Net リスナーおよびサード・パーティのソフトウェアを含めることができます。この単一のインタフェースは、Oracle Enterprise Manager Grid Control（または簡単に Grid Control）と呼ばれています。

注意： Oracle Enterprise Manager 10g は、Oracle Enterprise Manager Grid Control インストール・メディアで別に提供されています。

- Oracle Enterprise Manager Database Control をデータベース・システム上にローカルに配置

Oracle Enterprise Manager Database Control のソフトウェアは、カスタムを除く Oracle Database のインストール時にデフォルトでインストールされます。カスタム・インストール時には、Oracle Enterprise Manager Database Control をインストールしないことを選択できます。しかし、インストールすることをお勧めします。このローカルでのインストールにより、Oracle Enterprise Manager Database Control と呼ばれる Web ベース・インタフェースが提供されます。Database Control の機能は、Grid Control の機能と類似していますが、Database Control の場合は単一のデータベースのみを管理できません。このシステム上で複数のデータベースを管理する場合は、データベースごとに別の Database Control を構成するか、または Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control をインストールする必要があります。

関連資料： Oracle Enterprise Manager 10g の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 概要』および『Oracle Enterprise Manager 基本インストールレーションおよび構成』を参照してください。

事前構成済データベースの管理オプション

インストール時に事前構成済データベースの作成を選択する場合、データベースの管理に使用する Oracle Enterprise Manager インタフェースを選択する必要があります。次のオプションを使用できます。

- 中央データベース管理に Grid Control を使用する。

このオプションは、Oracle Management Agent がシステム上にインストールされている場合にのみ使用できます。Oracle Universal Installer によりシステム上で Oracle Management Agent が検出された場合は、このオプションを選択して、データベースの管理に使用する Oracle Management Service を指定できます。

Oracle Management Agent がインストールされていない場合、データベースの管理に Database Control を使用するよう選択する必要があります。しかし、Oracle Database のインストール後に Oracle Management Agent をインストールする場合には、このデータベースの管理に Grid Control を使用できます。

- ローカル・データベース管理に Database Control を使用する。

このオプションは、Oracle Management Agent がシステム上にインストールされていない場合に、デフォルトで選択されます。ただし、Management Agent がインストールされている場合でも、データベースの管理に Database Control を構成するように選択できます。

カスタム・データベースの管理オプション

「拡張」データベース構成オプションを選択した場合、または「カスタム」インストール中にデータベースの作成を選択した場合、Oracle Universal Installer は Database Configuration Assistant (DBCA) を対話モードで実行します。Database Configuration Assistant を使用して、データベースの管理に使用する Oracle Enterprise Manager インタフェースを指定できます。または、Enterprise Manager を使用してデータベースを構成しないことも選択できます。

インストール時に Enterprise Manager を使用するようデータベースを構成することをお勧めします。ただし、インストール時に Enterprise Manager を使用するようデータベースを構成しないことを選択した場合は、インストール後に Database Configuration Assistant を使用して、Enterprise Manager を使用するようデータベースを構成できます。

Oracle Enterprise Manager Database Control の機能

Oracle Enterprise Manager Database Control では、Oracle データベースの監視、管理および保守に使用できる Web ベースのユーザー・インタフェースが提供されます。これを使用して、すべてのデータベース管理タスクを実行できます。また、データベースに関する次のような情報の確定にも使用できます。

- インスタンス名、データベースのバージョン、Oracle ホームの位置、メディア・リカバリ・オプションおよびその他のインスタンス・データ
- 現行インスタンスの可用性
- データベース・アラート情報
- セキュリティ・アラートの自動通知
- パッチを適用する機能
- セッションおよび SQL 関連のパフォーマンス情報
- 領域使用メトリック

データベース・バックアップおよびリカバリ・オプション

インストール時に Oracle Enterprise Manager Database Control を使用するように選択した場合は、オプションでオラクル社推奨のデフォルト・バックアップ方法を使用する自動データベース・バックアップを有効にできます。

ただし、インストール時に自動バックアップを有効にする必要はありません。Oracle Enterprise Manager Database Control または Grid Control を使用して、ソフトウェアをインストールしてデータベースを作成した後に自動バックアップを構成できます。

自動バックアップの有効化

自動バックアップを有効にすると、Oracle Enterprise Manager では、フラッシュ・リカバリ領域と呼ばれるディスク上の記憶域にすべてのデータベース・ファイルをバックアップする Oracle Recovery Manager (RMAN) を使用して、日常的なバックアップ・ジョブがスケジュールされます。バックアップ・ジョブの初回実行時には、データベースの全体バックアップが作成されます。その後のバックアップ・ジョブでは、増分バックアップが実行され、先行する 24 時間におけるどの時点の状態にもデータベースをリカバリできます。

自動バックアップ・ジョブをインストール時に有効にするには、次の情報を指定する必要があります。

- フラッシュ・リカバリ領域の位置

フラッシュ・リカバリ領域には、ファイル・システム・ディレクトリまたは自動ストレージ管理ディスク・グループのいずれかの使用を選択できます。フラッシュ・リカバリ領域に構成されるデフォルトのディスク割当て制限は、2GB です。自動ストレージ管理ディスク・グループでは、必要なディスク領域は選択するディスク・グループの冗長性レベルによって決まります。第 2 章では、フラッシュ・リカバリ領域の位置の選択方法を説明し、そのディスク領域要件を識別します。

- バックアップ・ジョブのオペレーティング・システムのユーザー名およびパスワード

Oracle Enterprise Manager では、バックアップ・ジョブの実行時に指定するオペレーティング・システムの接続情報が使用されています。指定するユーザー名は、データベース管理者を識別する Windows グループ (ORA_DB_A グループ) に属している必要があります。

バックアップ・ジョブのデフォルト設定

インストール時に事前構成済データベースの 1 つを選択した後に自動バックアップを有効にすると、自動バックアップは次のデフォルト設定で構成されます。

- バックアップ・ジョブは毎晩午前 2 時に実行されるようにスケジュールされます。
- フラッシュ・リカバリ領域のディスク割当て制限は、2GB です。

インストール時またはインストール後のいずれかの時点で、Database Configuration Assistant を使用して自動バックアップを有効にすると、様々なバックアップ・ジョブの開始時間および様々なフラッシュ・リカバリ領域のディスク割当て制限を指定できます。

関連資料：

- Oracle Enterprise Manager Database Control を使用した自動バックアップの構成やカスタマイズ、またはバックアップしたデータベースのリカバリの詳細は、『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』を参照してください。
- バックアップ方法の定義および Oracle データベースのバックアップやリカバリの詳細は、『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』または『Oracle Database バックアップおよびリカバリ・アドバンスト・ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

電子メール通知オプション

Oracle Enterprise Manager Database Control を使用するようにインストール時に選択した場合は、特定のイベントが発生した場合に電子メールを送信するように Enterprise Manager を構成できます。これらのイベントには、ディスク領域のクリティカル制限（しきい値）に達した場合、あるいはデータベースが予期せず停止した場合などを含めることができます。

電子メール通知を使用可能にするように選択した場合は、次の情報を指定する必要があります。

- Simple Mail Transport Protocol (SMTP) サーバーのホスト名
- アラートを受信する電子メール・アドレス

電子メール・アドレスには、個人のアドレス、共有電子メール・アカウントまたは配布リストを指定できます。

Enterprise Manager Database Control を使用すると、データベースの作成後に電子メール通知を設定、変更またはカスタマイズできます。

アップグレードの考慮事項

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) は、新規の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールすることをお勧めします。Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) を、以前にインストールされた Oracle8i または Oracle9i のコンポーネントが含まれている Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする必要がある場合は、Oracle Universal Installer を使用して、これらのコンポーネントを新規のインストール開始前に削除します。

既存のデータベースのアップグレードを決定する前に、『Oracle Database アップグレード・ガイド』を参照してください。Windows でのアップグレードの手順は、『Oracle Database アップグレード・ガイド』で説明されています。ただし、この項では『Oracle Database アップグレード・ガイド』の手順に従う前に理解する必要のある、いくつかの Windows 固有の問題を説明します。

関連項目： [第 6 章「Oracle Database ソフトウェアの削除」](#)

この項の項目は次のとおりです。

- [AL24UTF8SS キャラクタ・セット](#)
- [アプリケーションのリンクおよび再リンクのポリシー](#)
- [Oracle Real Application Clusters のアップグレード要件](#)
- [データベースのダウングレード](#)

AL24UTF8SS キャラクタ・セット

AL24UTF8SS キャラクタ・セットを使用する既存のデータベースをアップグレードする場合、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードする前にデータベース・キャラクタ・セットを UTF8 にアップグレードします。既存のデータベース・キャラクタ・セットをアップグレードする前に、Character Set Scanner (cssscan) ユーティリティを使用してデータを分析することをお勧めします。Character Set Scanner ユーティリティでは、データベース内のすべての文字データがチェックされ、キャラクタ・セットのエンコーディングを変更した場合の効果と問題点がテストされます。

アプリケーションのリンクおよび再リンクのポリシー

Oracle データベースを 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードする場合には、クライアント・ソフトウェアも 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードすることをお勧めします。同じリリースのサーバーおよびクライアントのソフトウェアを使用することにより、アプリケーションに最大限の安定性が保証されます。また、最新の Oracle クライアント・ソフトウェアでは、旧リリースにはなかった追加機能やパフォーマンス強化が提供される場合があります。

関連資料： クライアント・ソフトウェアの機能のリリースをアップグレードする際の、アプリケーションのリンクおよび再リンクの詳細は、『Oracle Database アップグレード・ガイド』を参照してください。

Oracle Real Application Clusters のアップグレード要件

Oracle Real Application Clusters を 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードすることをお勧めします。

関連資料： Oracle Real Application Clusters のアップグレード要件に関する情報は、『Oracle Real Application Clusters インストールおよび構成』を参照してください。

データベースのダウングレード

ワード・サイズを変更する手順など、データベースのダウングレードの手順は、『Oracle Database アップグレード・ガイド』で説明されています。

Oracle Database インストール前の要件

この章では、Oracle Database の 32 ビット Windows インストールの要件を説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- [Oracle Database のハードウェア要件](#)
- [Oracle Database のソフトウェア要件](#)
- [Oracle Database のハードウェアおよびソフトウェア要件](#)
- [Oracle Database のネットワークのトピック](#)
- [個々のコンポーネントの要件](#)

Oracle Database のハードウェア要件

この項では、ハードウェア・コンポーネントとハード・ディスク領域の要件について説明します。

- [ハードウェア・コンポーネントの要件](#)
- [ハード・ディスク領域の要件](#)
- [ハードウェア要件の確認](#)

ハードウェア・コンポーネントの要件

Oracle Database には、次のハードウェア・コンポーネントが必須です。

- RAM: 256MB (最小)、512MB (推奨)
- 仮想メモリー: RAM 容量の 2 倍
- ハード・ディスク領域: [表 2-1](#) を参照
- 一時ディスク領域: 100MB
- ビデオ・アダプタ: 256 色
- プロセッサ: 200MHz (最小)

関連項目:

- その他の要件については、[2-41 ページ](#)の「[Oracle Transparent Gateway の要件](#)」を参照してください。
- [2-25 ページ](#)の「[Oracle データファイルおよびリカバリ・ファイルのディスク記憶域の構成](#)」。
- その他の要件については、[2-26 ページ](#)の「[Oracle データファイルまたはリカバリ・ファイル用ディレクトリの作成](#)」を参照してください。
- その他の要件については、[2-29 ページ](#)の「[自動ストレージ管理 \(ASM\) 用ディスクの構成](#)」を参照してください。
- その他の要件については、[2-36 ページ](#)の「[RAW 論理ボリュームまたは RAW パーティションの構成](#)」を参照してください。
- [3-3 ページ](#)の「[最小のメモリー要件でのインストール](#)」。

ハード・ディスク領域の要件

この項では、NT File System (NTFS) のファイル・システムに対するシステム要件を示します。Oracle コンポーネントは、NTFS にインストールすることをお勧めします。

この項で示す NTFS のシステム要件は、Oracle Universal Installer の「サマリー」画面に表示されるハード・ディスクの値より正確です。「サマリー」画面には、ディスク領域、データベースの作成に必要な領域、またはハード・ドライブで展開される圧縮ファイルのサイズの正確な値は表示されません。

Oracle Database コンポーネントのハード・ディスク要件には、オペレーティング・システムがインストールされているパーティションに Java Runtime Environment (JRE) および Oracle Universal Installer をインストールするために必要な 32MB が含まれます。十分な領域が検出されないと、インストールは失敗し、エラー・メッセージが表示されます。

表 2-1 は、NTFS の領域要件の一覧です。初期データベースには、720MB のディスク領域が必要です。この表の数字には、初期データベースが含まれています。FAT32 の場合、必要な領域は若干大きくなります。

表 2-1 NTFS のハード・ディスク領域要件

インストール・タイプ	システム・ドライブ	Oracle ホーム・ドライブ
基本インストール	100MB	1.5GB
拡張インストール: Enterprise Edition	100MB	1.5GB
拡張インストール: Standard Edition	100MB	1.4GB
拡張インストール: Personal Edition	100MB	1.5GB

関連資料: 『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の「NTFS ファイル・システムと Windows レジストリの権限」

ハードウェア要件の確認

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. 物理 RAM サイズを確認します。たとえば、Windows 2000 を使用するコンピュータの場合、コントロールパネルの「システム」を開き、「全般」タブを選択します。システムにインストールされている物理 RAM のサイズが必要サイズより小さい場合は、先に進む前にメモリーを増設する必要があります。
2. 構成済のスワップ領域のサイズ（ページング・ファイル・サイズ）を確認します。たとえば、Windows 2000 を使用するコンピュータの場合、コントロールパネルの「システム」を開き、「詳細」タブを選択し、「パフォーマンス オプション」をクリックします。
追加のスワップ領域を構成する方法は、必要に応じてオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。
3. システムの空きディスク領域のサイズを確認します。たとえば、Windows 2000 を使用するコンピュータの場合、「マイ コンピュータ」を開き、Oracle ソフトウェアをインストールするドライブを右クリックし、「プロパティ」を選択します。
4. temp ディレクトリ内の使用可能なディスク領域の量を確認します。これは、空きディスク領域の合計量から、インストールする Oracle ソフトウェアに必要な領域量を引いた量に相当します。

temp ディレクトリで使用可能なディスク領域が 100MB 未満の場合は、まず不要なファイルをすべて削除します。それでも temp ディスク領域が 100MB 未満である場合は、TEMP または TMP 環境変数が別のハード・ドライブを指すように設定します。たとえば、Windows 2000 を使用するコンピュータの場合、コントロールパネルの「システム」を開き、「詳細」タブを選択し、「環境変数」をクリックします。

Oracle Database のソフトウェア要件

表 2-2 に、Oracle Database のソフトウェア要件を示します。

表 2-2 ソフトウェア要件

要件	説明
システム・アーキテクチャ	<p>32 ビット。</p> <p>注意： Oracle Database for Windows には、32 ビットと 64 ビットの両バージョンが用意されています。現在、32 ビット・バージョンのデータベースは、32 ビット・バージョンのオペレーティング・システムで実行する必要があります。64 ビット・バージョンのデータベースは、64 ビット・バージョンのオペレーティング・システムで実行する必要があります。</p>
オペレーティング・システム	<p>Oracle Database for Windows は、次のオペレーティング・システムでサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows NT Server 4.0、Windows NT Server 4.0 Enterprise Edition、および Windows NT Server 4.0 Terminal Server Edition Service Pack 6a 以上。Windows NT Workstation ではサポートされていません。 ■ Windows 2000 Service Pack 1 以上。Windows 2000 ターミナル サービスおよび Windows 2000 MultiLanguage Edition (MLE) を含む全エディションでサポートされています。 ■ Windows Server 2003。 ■ Windows XP Professional。 <p>Windows Multilingual User Interface Pack は、Windows XP Professional および Windows Server 2003 でサポートされています。</p>

表 2-2 ソフトウェア要件 (続き)

要件	説明
コンパイラ	<p>ACUCOBOL-GT for Pro*COBOL コンパイラ・バージョン 6.0.0 がサポートされています。</p> <p>Pro*COBOL では、Micro Focus Net Express コンパイラをサポートしています。Object Oriented COBOL (OOCOBOL) の仕様はサポートされていません。</p> <p>次のコンポーネントは、Microsoft Visual C++ 6.0、Microsoft Visual C++ .NET 2002 および Microsoft Visual C++ .NET 2003 の各コンパイラではサポートされていません。</p> <ul style="list-style-type: none">■ Oracle C++ Call Interface■ Oracle Call Interface■ 外部コールアウト■ PL/SQL のネイティブ・コンパイル■ XDK
ネットワーク・プロトコル	<p>Oracle Net Foundation レイヤーでは、Oracle protocol support を使用して、業界標準の次のネットワーク・プロトコルと通信します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ TCP/IP■ SSL 付き TCP/IP■ Named Pipes

関連資料：

- 2-9 ページの「[Windows サポート](#)」
- 2-7 ページの「[Windows Telnet サービスのサポート](#)」
- 2-8 ページの「[Windows ターミナル サービスおよびリモートデスクトップのサポート](#)」
- OTN-J で公開されている 64 ビット・ソフトウェアおよびドキュメント
<http://otn.oracle.co.jp/document/>

Oracle Database のハードウェアおよびソフトウェア要件

このマニュアルに記載されているプラットフォーム固有のハードウェア要件とソフトウェア要件は、このマニュアルの発行時点での最新情報です。ただし、このマニュアルの発行後にプラットフォームおよびオペレーティング・システム・ソフトウェアの新バージョンが認定されている場合があるため、日本オラクルのホームページを確認してください。次の URL で参照できます。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

次の各項では、次の要件を示します。

- [Windows Telnet サービスのサポート](#)
- [Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート](#)
- [Windows サポート](#)
- [Web ブラウザのサポート](#)

Windows Telnet サービスのサポート

Windows XP、Windows 2000 および Windows Server 2003 には Telnet サービスが含まれており、これによってリモート・ユーザーは、オペレーティング・システムにログインし、コマンドラインを使用してコンソール・プログラムを実行できます。Oracle では、この機能を使用して、sqlplus、sqlldr、import、export などのデータベース・コマンドライン・ユーティリティがサポートされていますが、Oracle Universal Installer、Database Configuration Assistant、Oracle Net Configuration Assistant などのデータベース GUI ツールはサポートされていません。

注意： コントロールパネルの「サービス」で Telnet サービスが開始されていることを確認します。

Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート

Oracle では、Windows 2000 Server、Windows XP Professional および Windows Server 2003 上のターミナル サービスを介した Oracle Database のインストール、構成および実行がサポートされています。Terminal Server を介したインストールで問題が発生した場合は、(mstsc/console を使用して) サーバーのターミナル サービス コンソール セッションへの接続を試みることをお勧めします。

プラットフォーム固有のサポート情報は、次のとおりです。

- **Windows 2000:** Oracle では、リモート ターミナル サービス クライアントからの Oracle Database のインストール、構成および実行がサポートされます。
- **Windows XP:** リモート デスクトップは、単一ユーザー・モードでのみ使用できます。
- **Windows Server 2003:** 管理モードまたは Terminal Server モードでリモート デスクトップのターミナル サービスを使用するように Windows Server 2003 を構成できます。

次の製品および機能は、Windows ターミナル サービスでサポートされていません。

- Oracle Connection Manager
- Oracle Object Link Manager
- Oracle Services for Microsoft Transaction Server
- Server Management (SRVM)

関連資料:

- Terminal Server の詳細は、次の URL の Microsoft のホームページを参照してください。

<http://www.microsoft.com/>

- 最新の Terminal Server に関連したシステム要件は、日本オラクルのホームページを参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

Windows サポート

次のコンポーネントは、Windows XP ではサポートされていません。

- DCE Adapter Support
- Entrust PKI Support
- Generic Connectivity
- 次の Oracle Enterprise Integration Gateway
 - Procedural Gateway for APPC
 - Transparent Gateway for IBM DRDA
- Oracle Messaging Gateway
- 次の Oracle Open System Gateway
 - Transparent Gateway for Sybase
 - Transparent Gateway for Teradata
 - Transparent Gateway for Microsoft SQL Server
- Cluster File System と Server Management を含む Oracle Real Application Clusters
- nCipher Accelerator Support

Web ブラウザのサポート

次の Web ブラウザが、iSQL*Plus および Oracle Enterprise Manager Database Control に対してサポートされています。

- Netscape Navigator 7.0 以上
- Service Pack 1 を搭載した Microsoft Internet Explorer 5.5、6.0、およびそれ以上
- Mozilla バージョン 1.3.1 以上

Oracle Database のネットワークのトピック

通常、Oracle Database をインストールするコンピュータは、ネットワークに接続され、Oracle Database がインストールされるローカル記憶域、ディスプレイ・モニター、および CD-ROM または DVD-ROM ドライブを備えています。

この項では、通常のシナリオを満たさないコンピュータに Oracle Database をインストールする方法について説明します。次のケースについて説明します。

この項の項目は次のとおりです。

- [DHCP コンピュータでのインストール](#)
- [マルチホーム・コンピュータでのインストール](#)
- [複数の別名を持つコンピュータでのインストール](#)
- [ネットワーク化されていないコンピュータでのインストール](#)
- [ループバック・アダプタのインストール](#)

DHCP コンピュータでのインストール

Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP) は、ネットワーク上の動的 IP アドレスを割り当てます。動的アドレッシングにより、コンピュータはネットワークに接続するたびに異なる IP アドレスを持つことができます。場合によっては、コンピュータが接続している間に IP アドレスが変わることもあります。DHCP システムでは、静的 IP アドレッシングと動的 IP アドレッシングを混在させることができます。

DHCP セットアップでは、ソフトウェアが IP アドレスを追跡するため、ネットワーク管理が簡略化されます。これにより、コンピュータに固有の IP アドレスを手動で割り当てなくても、新しいコンピュータをネットワークに追加できます。ただし、DHCP プロトコルを使用するコンピュータに Oracle Database をインストールする前に、ループバック・アダプタをインストールして、そのコンピュータにローカル IP アドレスを割り当てる必要があります。

関連項目：

- [2-14 ページの「ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック」](#)
- [2-22 ページの「Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール」](#)

マルチホーム・コンピュータでのインストール

複数のネットワーク・カードがあるコンピュータに Oracle Database をインストールする場合、Oracle Universal Installer は `%etc%hosts` ファイル内の最初の名前を使用します。目的のホスト名が最初に出現するようにこのファイルの行を並べ替えることが必要な場合があります。インストール後に、ファイルを元の状態に戻すことができます。

マルチホーム・コンピュータには、複数の IP アドレスが関連付けられています。これは一般に、コンピュータに複数のネットワーク・カードを持つことで実現されます。各 IP アドレスにはホスト名が関連付けられ、ホスト名の別名を設定することもできます。

マルチホーム・コンピュータに Oracle Database をインストールする場合、Oracle Universal Installer は、プライマリ・ネットワーク・アダプタのホスト名と IP アドレスを使用するように Oracle Database を構成します。

クライアントは、ホスト名を使用して（またはこのホスト名の別名を使用して）コンピュータにアクセスできる必要があります。確認するには、短縮名（ホスト名のみ）および完全な名前（ホスト名とドメイン名）を使用してクライアント・コンピュータからホスト名を ping します。どちらも動作する必要があります。

`hostname` および `ipconfig` コマンドを実行して、プライマリ・ホスト名と IP アドレスを判断できます。次に例を示します。

```
prompt> hostname
test-pc2
```

```
prompt> ipconfig
Windows IP Configuration

Ethernet adapter ローカル エリア接続:

    Connection-specific DNS Suffix  . : us.mycompany.com
    IP Address. . . . . : 139.185.140.166
    Subnet Mask . . . . . : 255.255.255.0
    Default Gateway . . . . . : 139.185.140.1

Ethernet adapter ワイヤレス ネットワーク接続:

    Media State . . . . . : Media disconnected
```

プライマリ・アダプタが、Oracle Database で使用するアダプタでない場合は、Oracle Database で使用するネットワーク・アダプタをプライマリ・ネットワーク・アダプタにする必要があります。

関連項目： Windows がプライマリ・アダプタを判断する方法については、2-13 ページの「[ループバック・アダプタのインストール](#)」を参照してください。

複数の別名を持つコンピュータでのインストール

複数の別名を持つコンピュータは、単一の IP と複数の別名でネーミング・サービスに登録されています。ネーミング・サービスは、これらすべての別名を同じコンピュータに解決します。

このようなコンピュータに Oracle Database をインストールする前に、次の処理を行う必要があります。

- ループバック・アダプタをコンピュータにインストールします。
- ループバック・アダプタがプライマリ・ネットワーク・アダプタであることを確認します。

ループバック・アダプタを使用すると、問合せはローカルに実行されるため、Oracle Database がホスト名を問い合わせたときに常に同じ名前が取得されることが保証されます。ループバック・アダプタがないと、問合せはネーミング・サービスから応答を取得するため、問合せはコンピュータの任意の別名を返すことがあります。

関連項目： Windows がプライマリ・アダプタを判断する方法およびループバック・アダプタのインストール方法については、2-13 ページの「[ループバック・アダプタのインストール](#)」を参照してください。

ネットワーク化されていないコンピュータでのインストール

Oracle Database は、ネットワーク化されていないコンピュータにインストールできます。ラップトップなどのコンピュータが DHCP 用に構成され、Oracle Database のインストール後にコンピュータをネットワークに接続することを計画している場合は、ネットワーク化されていないコンピュータに Oracle Database をインストールする前に、次の手順を実行します。

1. ループバック・アダプタをコンピュータにインストールします。

ループバック・アダプタとローカル IP アドレスは、ネットワーク化されたコンピュータをシミュレートします。コンピュータをネットワークに接続した場合も、Oracle Database はローカル IP およびホスト名を使用します。

関連項目： 2-13 ページの「[ループバック・アダプタのインストール](#)」

2. etc¥host ファイル内にあるホスト名のみ、および完全修飾名を使用して、コンピュータを自身から ping します。

たとえば、ループバック・アダプタを mydomain.com ドメインの mycomputer というコンピュータにインストールした場合は、次の項目をチェックします。

```
prompt> ping mycomputer                Ping itself using just the hostname.
Reply from 10.10.10.10                  Returns local IP.
prompt> ping mycomputer.mydomain.com    Ping using a fully qualified name.
Reply from 10.10.10.10                  Returns local IP.
```

注意: コンピュータを自身から ping すると、ping コマンドはローカル IP (ループバック・アダプタの IP) を返します。

ping に失敗する場合は、ネットワーク管理者に問い合わせてください。

インストール後にコンピュータをネットワークに接続

インストール後にコンピュータをネットワークに接続した場合は、コンピュータ上の Oracle Database インスタンスがネットワーク上の他のインスタンスと連携できます。コンピュータにループバック・アダプタがインストール済である必要があることに注意してください。コンピュータは、接続しているネットワークに応じて静的 IP または DHCP を使用できます。

ループバック・アダプタのインストール

ループバック・アダプタのインストール時に、ループバック・アダプタはコンピュータのローカル IP を割り当てます。コンピュータにループバック・アダプタをインストールした後、コンピュータには少なくとも 2 つのネットワーク・アダプタがあります。それは、独自のネットワーク・アダプタとループバック・アダプタです。Oracle Database では、Windows がループバック・アダプタをプライマリ・アダプタとして使用している必要があります。

プライマリ・アダプタは、アダプタをインストールした順序によって決定されます。

- Windows NT では、プライマリ・アダプタは最初にインストールされたアダプタです。このため、ループバック・アダプタをインストールし、ネットワーク・アダプタをインストール解除し、ネットワーク・アダプタを再インストールする必要があります。
- Windows 2000、Windows Server 2003 および Windows XP では、プライマリ・アダプタは最後にインストールされたアダプタです。ループバック・アダプタのインストール後に追加のネットワーク・アダプタをインストールした場合は、ループバック・アダプタをインストール解除し、再インストールする必要があります。

ループバック・アダプタは、次の場合に必要です。

- DHCP コンピュータにインストールする場合

関連項目: 2-10 ページの「[DHCP コンピュータでのインストール](#)」

- ネットワーク化されていないコンピュータにインストールし、インストール後にコンピュータをネットワークに接続することを計画している場合

関連項目: 2-12 ページの「[ネットワーク化されていないコンピュータでのインストール](#)」

ループバック・アダプタのインストール手順は、Oracle Database のインストールを計画している Windows のバージョンによって決まります。

- ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック
- Windows NT でのループバック・アダプタのインストール
- Windows 2000 でのループバック・アダプタのインストール
- Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール
- Windows NT からのループバック・アダプタの削除
- Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタの削除

ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック

ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかをチェックするには、`ipconfig /all` コマンドを実行します。

```
prompt> ipconfig /all
```

ループバック・アダプタがインストールされている場合は、そのループバック・アダプタの値をリストするセクションが表示されます。次に例を示します。

```
Ethernet adapter ローカル エリア接続 2:  
  Connection-specific DNS Suffix . . . :  
  Description . . . . . : Microsoft Loopback Adapter  
  Physical Address. . . . . : 02-00-4C-4F-4F-50  
  DHCP Enabled. . . . . : Yes  
  Autoconfiguration Enabled . . . . : Yes  
  Autoconfiguration IP Address. . . : 169.254.25.129  
  Subnet Mask . . . . . : 255.255.0.0
```

Windows NT でのループバック・アダプタのインストール

Windows NT は最初にインストールされたネットワーク・アダプタについてレポートするため、Windows NT でのループバック・アダプタのインストールは、他の Windows プラットフォームでのインストールよりも複雑です。DHCP コンピュータにはすでにネットワーク・アダプタがあるため、そのネットワーク・アダプタを削除して再びインストールし、ループバック・アダプタが最初にインストールされたネットワーク・アダプタとなるようにする必要があります。この項では、次のサブセクションでこの方法を説明します。

- 2-15 ページの「概要手順」
- 2-15 ページの「要件」
- 2-15 ページの「詳細な手順」

概要手順

Windows NT にループバック・アダプタをインストールする手順の概要は、次のとおりです。

1. コンピュータ上の既存のネットワーク・アダプタに関する情報を収集します。
既存のネットワーク・アダプタを削除して再インストールする必要があるため、この手順を実行する必要があります。
2. ループバック・アダプタをインストールします。
3. 既存のネットワーク・アダプタを削除します。
4. ループバック・アダプタの構成を完了します。
5. コンピュータを再起動します。
6. ネットワーク・アダプタを再インストールします。
7. コンピュータを再起動します。

要件

Windows NT にループバック・アダプタをインストールするには、次のアイテムが必要です。

- Windows NT インストール CD-ROM。これにより、ループバック・アダプタをインストールできます。
- ネットワーク・アダプタを再インストールするときのネットワーク・アダプタのドライバ。

詳細な手順

1. 既存のネットワーク・アダプタを再インストールできるように、既存のネットワーク・アダプタに関する情報を収集します。通常は、次の情報が必要です。

表 2-3 既存のネットワーク・アダプタに関する情報

項目	値の入手場所
IP アドレス	「ネットワーク」コントロールパネルの「 アダプタ 」タブ。ネットワーク・アダプタを選択し、「 プロパティ 」をクリックします。
サブネット・マスク	「ネットワーク」コントロールパネルの「 プロトコル 」タブ。「 TCP/IP 」を選択し、「 プロパティ 」をクリックします。「 プロパティ 」ダイアログで、「 IP アドレス 」タブを選択し、「 詳細設定 」をクリックします。
WINS サーバー・アドレス	「ネットワーク」コントロールパネルの「 プロトコル 」タブ。「 TCP/IP 」を選択し、「 プロパティ 」をクリックします。「 プロパティ 」ダイアログで、「 WINS アドレス 」タブを選択します。

表 2-3 既存のネットワーク・アダプタに関する情報 (続き)

項目	値の入手場所
DNS サーバー・アドレス	「ネットワーク」コントロールパネルの「プロトコル」タブ。「TCP/IP」を選択し、「プロパティ」をクリックします。「プロパティ」ダイアログで、「DNS」タブを選択します。

- Windows NT インストール CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
- デスクトップで「ネットワーク コンピュータ」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。これにより、「ネットワーク」コントロールパネルが表示されます。
- 「アダプタ」タブを選択します。
- 「追加」をクリックします。
- 「MS ループバック アダプタ」を選択し、「OK」をクリックします。
- 「MS ループバック アダプタ カードのセットアップ」ダイアログで、「OK」をクリックしてデフォルトのフレーム・タイプ (デフォルト値は 802.3) を受け入れます。
- Windows NT CD-ROM の場所 (たとえば、E:¥i386) を入力し、「続行」をクリックします。

ループバック・アダプタがインストールされると、Windows NT は、すべてのネットワーク・アダプタを示す「ネットワーク」コントロールパネルを表示します (図 2-1)。

図 2-1 ループバック・アダプタを示す「ネットワーク」コントロールパネル



9. 「ネットワーク」コントロールパネルで、ループバック・アダプタより前にインストールされたネットワーク・アダプタを削除します。ネットワーク・アダプタを選択し、「削除」をクリックします。
ループバック・アダプタを最初のネットワーク・アダプタにする必要があるため、この処理を行う必要があります。例では、Intel ネットワーク・アダプタを削除する必要があります。後でこのネットワーク・アダプタを再インストールします。
10. 「ネットワーク」コントロールパネルで「閉じる」をクリックします。これにより、「Microsoft TCP/IP のプロパティ」ダイアログが表示されます (図 2-2)。
11. 「Microsoft TCP/IP のプロパティ」ダイアログで、「MS ループバック アダプタ」を選択し、次の処理を行います。
 - a. **IP アドレス** : ループバック・アダプタのルーティング不能 IP を入力します。次のルーティング不能アドレスをお勧めします。
 - 192.168.x.x (x は 1 ~ 255 の任意の値)
 - 10.10.10.10
 - b. **サブネット マスク** : 255.255.255.0 を入力します。

- c. その他すべてのフィールドは空白のままにします。
- d. 「OK」をクリックします。

図 2-2 ループバック・アダプタの値を示す「Microsoft TCP/IP のプロパティ」ダイアログ



- 12. コンピュータを再起動します。
- 13. コンピュータが起動したら、実際のネットワーク・アダプタを再インストールします。
- 14. コンピュータをもう一度再起動します。

Windows 2000 でのループバック・アダプタのインストール

Windows 2000 は、最後にインストールされたネットワーク・アダプタについてレポートします。このため、ループバック・アダプタのインストール後に追加のネットワーク・アダプタをインストールした場合は、ループバック・アダプタを削除し、再インストールする必要があります。ループバック・アダプタは、コンピュータに最後にインストールされたネットワーク・アダプタにする必要があります。

ループバック・アダプタを Windows 2000 にインストールする手順は、次のとおりです。

- 1. 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」を選択します。
- 2. 「ハードウェアの追加と削除」をダブルクリックします。これにより、ハードウェアの追加と削除ウィザードが起動します。
- 3. 「ハードウェアの追加ウィザードの開始」ページで、「次へ」をクリックします。

4. 「ハードウェアに関する作業の選択」 ページで、「デバイスの追加 / トラブルシューティング」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「ハードウェア デバイスの選択」 ページで、「新しいデバイスの追加」を選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「新しいハードウェアの検索」 ページで、「いいえ、一覧からハードウェアを選択します」を選択し、「次へ」をクリックします。
7. 「ハードウェアの種類」 ページで、「ネットワーク アダプタ」を選択し、「次へ」をクリックします。
8. 「ネットワーク アダプタの選択」 ページで、次の操作を行います。
 - a. 製造元: 「Microsoft」を選択します。
 - b. ネットワーク アダプタ: 「Microsoft Loopback Adapter」を選択します。
 - c. 「次へ」をクリックします。
9. 「ハードウェアのインストールの開始」 ページで、「次へ」をクリックします。
10. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」 ページで、「完了」をクリックします。
11. デスクトップで「マイ ネットワーク」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。これにより、「ネットワークとダイヤルアップ接続」コントロールパネルが表示されます。
12. 作成した接続を右クリックします。これは通常、「ローカルエリア接続 2」です。「プロパティ」を選択します。
13. 「全般」タブで、「インターネット プロトコル (TCP/IP)」を選択し、「プロパティ」をクリックします。
14. 「プロパティ」ダイアログ (図 2-3) で、次の操作を行います。
 - a. IP アドレス: ループバック・アダプタのルーティング不能 IP を入力します。次のルーティング不能アドレスをお勧めします。
 - 192.168.x.x (x は 1 ~ 255 の任意の値)
 - 10.10.10.10
 - b. サブネット マスク: 255.255.255.0 を入力します。
 - c. その他すべてのフィールドは空白のままにします。
 - d. 「OK」をクリックします。

図 2-3 ループバック・アダプタの値を示す「インターネット プロトコル (TCP/IP) のプロパティ」ダイアログ



15. 「ローカル エリア接続 2 のプロパティ」ダイアログで、「OK」をクリックします。
16. コンピュータを再起動します。
17. C:\windows\system32\drivers\etc\hosts ファイルで、localhost 行の直後に次の形式の行を追加します。

```
IP_address hostname.domainname hostname
```

この例では、それぞれ次を意味します。

- IP_address は、手順 14 で入力したルーティング不能 IP アドレスです。
- hostname は、コンピュータ名です。
- domainname は、ドメイン名です。

次に例を示します。

```
10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer
```

18. ネットワーク構成をチェックします。
 - a. 「システム」コントロール パネルを開き、「ネットワーク ID」タブを選択します。「フル コンピュータ名」に、ホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します (図 2-4)。

図 2-4 「システム」コントロールパネルの「ネットワーク ID」タブ



- b. 「プロパティ」をクリックします。

「コンピュータ名」にホスト名が表示され、「フル コンピュータ名」にホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します (図 2-5)。

図 2-5 「識別の変更」ダイアログ



- c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」に、ドメイン名が表示されます (図 2-6)。

図 2-6 「DNS サフィックスと NetBIOS コンピュータ名」ダイアログ



Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール

Windows 2003 または Windows XP でループバック・アダプタをインストールする手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニューから、「コントロールパネル」を選択します。
2. 「ハードウェアの追加」をダブルクリックしてハードウェアの追加ウィザードを起動します。
3. 「ハードウェアの追加ウィザードの開始」画面で、「次へ」をクリックします。
4. 「ハードウェアは接続されていますか？」画面で、「はい、ハードウェアを接続しています」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「次のハードウェアは既にコンピュータ上にインストールされています。」画面で、「新しいハードウェア デバイスの追加」を選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます。」画面で、「一覧から選択したハードウェアをインストールする」を選択し、「次へ」をクリックします。
7. リストから、インストールしているハードウェアの種類を選択し、「ネットワーク アダプタ」を選択して、「次へ」をクリックします。
8. 「ネットワーク アダプタの選択」画面で、次の選択を行います。
 - 製造元: 「Microsoft」を選択します。
 - ネットワーク アダプタ: 「Microsoft Loopback Adapter」を選択します。
9. 「次へ」をクリックします。

10. 「ハードウェアをインストールする準備ができました。」画面で、「次へ」をクリックします。
11. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」ページで、「完了」をクリックします。
12. Windows 2003 を使用している場合は、コンピュータを再起動します。
13. デスクトップで「マイ ネットワーク」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。これにより、「ネットワーク接続」コントロールパネルが表示されます。
14. 作成した接続を右クリックします。これは通常、「ローカルエリア接続 2」という名前です。「プロパティ」を選択します。
15. 「全般」タブで、「インターネット プロトコル (TCP/IP)」を選択し、「プロパティ」をクリックします。
16. 「プロパティ」ダイアログで、次の操作を行います。
 - a. **IP アドレス** : ループバック・アダプタのルーティング不能 IP を入力します。次のルーティング不能アドレスをお勧めします。
 - 192.168.x.x (x は 1 ~ 255 の任意の値)
 - 10.10.10.10
 - b. **サブネット マスク** : 255.255.255.0 を入力します。
 - c. その他すべてのフィールドは空白のままにします。
 - d. 「OK」をクリックします。
17. 「OK」をクリックします。
18. 「ローカルエリア接続 2 のプロパティ」ダイアログで、「OK」をクリックします。
19. コンピュータを再起動します。
20. C:\windows\system32\drivers\etc\hosts ファイルで、localhost 行の後に次の形式の行を追加します。

```
IP_address hostname.domainname hostname
```

この例では、それぞれ次を意味します。

- *IP_address* は、手順 16 で入力したルーティング不能 IP アドレスです。
- *hostname* は、コンピュータ名です。
- *domainname* は、ドメイン名です。

次に例を示します。

```
10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer
```

21. ネットワーク構成をチェックします。
 - a. 「システムのプロパティ」を開き、「コンピュータ名」タブを選択します。「フルコンピュータ名」に、ホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します。
 - b. 「変更」をクリックします。「コンピュータ名」にホスト名が表示され、「フルコンピュータ名」にホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します。
 - c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」に、ドメイン名が表示されます。

Windows NT からのループバック・アダプタの削除

ループバック・アダプタを Windows NT から削除する手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」を選択します。
2. 「ネットワーク」をダブルクリックします。
3. 「アダプタ」タブを選択します。
4. 「MS ループバック アダプタ」を選択し、「削除」をクリックします。
5. コンピュータを再起動します。

Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタの削除

ループバック・アダプタを Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP から削除する手順は、次のとおりです。

1. 「システム」コントロールパネルを表示します。
 - Windows 2000: 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。
 - Windows 2003: 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。
 - Windows XP: 「スタート」メニューから、「コントロールパネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。
2. 「ハードウェア」タブで、「デバイス マネージャ」をクリックします。
3. 「デバイス マネージャ」ウィンドウで、「ネットワーク アダプタ」を展開します。「Microsoft Loopback Adapter」が表示されます。
4. 「Microsoft Loopback Adapter」を右クリックし、「アンインストール」を選択します。

個々のコンポーネントの要件

この項の項目は次のとおりです。

- Oracle データファイルおよびリカバリ・ファイルのディスク記憶域の構成
- Oracle データファイルまたはリカバリ・ファイル用ディレクトリの作成
- 自動ストレージ管理 (ASM) 用ディスクの構成
- RAW 論理ボリュームまたは RAW パーティションの構成
- 既存の Oracle サービスの停止
- Oracle Advanced Security の要件
- Oracle Enterprise Manager の要件
- Oracle Managed Files の要件
- Oracle Real Application Clusters
- Microsoft 管理コンソール用 Oracle スナップインの要件
- Oracle Transparent Gateway の要件

Oracle データファイルおよびリカバリ・ファイルのディスク記憶域の構成

この項では、Oracle データファイルおよびオプションで Oracle データベース・リカバリ・ファイルを格納するための記憶域オプションについて説明します。各ファイル・タイプに使用する格納方法を選択した後、次の各項を参照して必要な記憶域を構成します。

注意：各ファイル・タイプに、同じ記憶域オプションを使用する必要はありません。

Oracle データファイルの記憶域オプションの選択

インストール時にデータベースを作成する場合は、データファイル用に次のいずれかの記憶域オプションを選択する必要があります。

- ファイル・システム
- 自動ストレージ管理
- RAW デバイス

Oracle データベース・リカバリ・ファイルの記憶域オプションの選択

インストール時に自動バックアップを有効にする場合は、リカバリ・ファイル（フラッシュ・リカバリ領域）用に次のいずれかの記憶域オプションを選択する必要があります。

- ファイル・システム
- 自動ストレージ管理

リカバリ・ファイル用に選択する記憶域オプションは、データファイル用に選択するオプションと同じでも異なってもかまいません。

ディスク記憶域の構成

これらのオプションの詳細は、1-18 ページの「[データベース記憶域オプション](#)」を参照してください。インストールを開始する前にディスク記憶域を構成する方法については、選択するオプションに応じて次の各項を参照してください。

- データベース記憶域またはリカバリ・ファイル記憶域にファイル・システムを使用する場合は、2-26 ページの「[Oracle データファイルまたはリカバリ・ファイル用ディレクトリの作成](#)」を参照してください。
- データベース記憶域またはリカバリ・ファイル記憶域に自動ストレージ管理を使用する場合は、2-29 ページの「[自動ストレージ管理 \(ASM\) 用ディスクの構成](#)」を参照してください。
- データベース記憶域に RAW デバイスを使用する場合は、2-36 ページの「[RAW 論理ボリュームまたは RAW パーティションの構成](#)」を参照してください。

Oracle データファイルまたはリカバリ・ファイル用ディレクトリの作成

ファイル・システムに Oracle データファイルまたはリカバリ・ファイルを格納する場合は、次のガイドラインを使用してファイルの格納場所を決定します。

Oracle データファイルをファイル・システムに格納する際のガイドライン

- データファイルの格納には、単一のファイル・システムまたは複数のファイル・システムのいずれかを選択できます。
 - 単一のファイル・システムを使用する場合は、データベース専用の物理デバイス上でファイル・システムを選択してください。

最適のパフォーマンスと信頼性を得るには、複数の物理デバイス上で RAID デバイスまたは論理ボリュームを選択して、Stripe-And-Mirror-Everything (SAME) 方法論を実装します。
 - 複数のファイル・システムを使用する場合は、データベース専用の個別物理デバイス上でファイル・システムを選択します。

この方法を選択すれば、様々なデバイスに物理 I/O を分散させ、個別の制御ファイルを作成して信頼性を高めることができます。また、[付録 A 「Optimal Flexible](#)

[Architecture](#)」で説明されている **Optimal Flexible Architecture** ガイドラインの完全実装も可能になります。この方法を実装するには、インストール時に「拡張」データベース作成オプションまたは「カスタム」インストール・タイプを選択する必要があります。

- インストール時に事前構成済データベースを作成する場合は、選択するファイル・システム（複数可）に 1.2GB 以上の空きディスク領域が必要です。
本番データベースの場合は、そのデータベースの用途に応じて必要なディスク領域の量を見積もる必要があります。
- 最適なパフォーマンスを得るには、データベース専用の物理デバイス上にあるファイル・システムを選択する必要があります。
- Oracle Universal Installer により提示されるデータベース・ファイル・ディレクトリのデフォルトの位置は、Oracle ベース・ディレクトリのサブディレクトリです。ただし、このデフォルトの位置は、本番データベースにはお薦めしません。

Oracle リカバリ・ファイルをファイル・システムに格納する際のガイドライン

注意： インストール時に自動バックアップを有効にする場合のみ、リカバリ・ファイルの場所を選択する必要があります。

ファイル・システムに Oracle リカバリ・ファイルを格納する場合は、次のガイドラインを使用してファイルの格納場所を決定します。

- データファイルとリカバリ・ファイルの両方が使用できなくなるディスク障害を防ぐには、リカバリ・ファイルをデータファイルと異なる物理ディスク上にあるファイル・システムに格納します。

注意： あるいは、いずれかのファイル・タイプまたは両方のファイル・タイプに対して標準冗長性レベルまたは高冗長性レベルで、1 つの自動ストレージ管理ディスク・グループを使用してください。

- 選択するファイル・システムには、2GB 以上の空きディスク領域が必要です。
ディスク領域要件は、フラッシュ・リカバリ領域用に構成されたデフォルトのディスク割当て制限です（DB_RECOVERY_FILE_DEST_SIZE 初期化パラメータで指定されています）。
「カスタム」インストール・タイプまたは「拡張」データベース構成オプションを選択する場合、異なるディスク割当て制限値を指定できます。データベースの作成後、

Oracle Enterprise Manager Grid Control または Database Control を使用しても異なる値を指定できます。

関連資料：フラッシュ・リカバリ領域の詳細は、『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』を参照してください。

フラッシュ・リカバリ領域のサイズ指定の詳細は、『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』を参照してください。

- Oracle Universal Installer により提示されるデータベース・ファイル・ディレクトリのデフォルトの位置は、Oracle ベース・ディレクトリのサブディレクトリです。ただし、このデフォルトの位置は、本番データベースにはお薦めしません。

必要なディレクトリの作成

注意：この手順を行う必要があるのは、個別のファイル・システム上で Oracle データファイルまたはリカバリ・ファイルを Oracle ベース・ディレクトリに格納する場合のみです。

個別のファイル・システム上で Oracle データファイルまたはリカバリ・ファイルのディレクトリを Oracle ベース・ディレクトリに作成する手順は、次のとおりです。

1. Windows エクスプローラを使用して、ファイル・システム上の空きディスク領域を確認します。
2. 表示される内容から、使用するファイル・システムを指定します。

ファイル・タイプ	ファイル・システム要件
データファイル	次のいずれかを選択します。 <ul style="list-style-type: none">■ 1.2GB 以上の空きディスク領域を持つ単一のファイル・システム■ 合計で 1.2GB 以上の空きディスク領域を持つ 2 つ以上のファイル・システム
リカバリ・ファイル	2GB 以上の空きディスク領域を持つファイル・システムを選択します。

複数のファイル・タイプに対して同じファイル・システムを使用している場合は、各タイプに必要なディスク領域の量を加算して、必要なディスク領域の合計量を確認します。

3. 指定したファイル・システム用のディレクトリの名前を書き留めます。

4. 記憶域に自動ストレージ管理または RAW デバイスを使用する場合は、次のいずれかの項を参照してください。
 - [自動ストレージ管理 \(ASM\) 用ディスクの構成](#)
 - [RAW 論理ボリュームまたは RAW パーティションの構成](#)それ以外の場合は、2-39 ページの「[既存の Oracle サービスの停止](#)」を参照してください。

自動ストレージ管理 (ASM) 用ディスクの構成

この項では、自動ストレージ管理で使用できるようにディスクを構成する方法について説明します。ディスクを構成する前に、必要なディスク数および空きディスク領域の量を確認する必要があります。

次の各項では、要件の指定方法およびディスクの構成方法を説明します。

- [自動ストレージ管理の記憶域要件の指定](#)
- [既存の自動ストレージ管理ディスク・グループの使用](#)
- [自動ストレージ管理 \(ASM\) 用ディスクの構成](#)

自動ストレージ管理の記憶域要件の指定

自動ストレージ管理を使用するための記憶域要件を指定するには、必要なデバイス数および空きディスク領域量を確認する必要があります。この作業を行う手順は、次のとおりです。

1. Oracle データファイル、リカバリ・ファイル、またはその両方に自動ストレージ管理を使用するかどうかを判断します。

注意： 同じ記憶域メカニズムをデータファイルとリカバリ・ファイルに使用する必要はありません。一方がファイル・システムを使用し、もう一方が自動ストレージ管理を使用できます。

インストール時に自動バックアップを有効にする場合、フラッシュ・リカバリ領域に自動ストレージ管理ディスク・グループを指定して、記憶域メカニズムとして自動ストレージ管理をリカバリ・ファイルに選択できます。インストール時のデータベース作成方法の選択により、次のオプションがあります。

- 対話モードで Database Configuration Assistant を実行するインストール方法（たとえば、「拡張」データベース構成オプション）を選択すると、データファイルとリカバリ・ファイルに同じ自動ストレージ管理ディスク・グループを使用するかどうかを決めることができます。あるいは、各ファイル・タイプに対して異なるディスク・グループを選択できます。

Database Configuration Assistant を使用してインストール後にデータベースを作成する場合、同じ選択ができます。

- 非対話モードで Database Configuration Assistant を実行するインストール・タイプを選択する場合、データファイルとリカバリ・ファイルに同一の自動ストレージ管理ディスク・グループを使用する必要があります。
2. 自動ストレージ管理ディスク・グループに使用する自動ストレージ管理の冗長性レベルを選択します。

自動ストレージ管理ディスク・グループに選択する冗長性レベルにより、ディスク・グループにおける自動ストレージ管理によるファイルのミラー化方法や、必要なディスク数とディスク領域の量が、次のように決まります。

- 外部冗長性

外部冗長性ディスク・グループには、1つ以上のディスク・デバイスが必要です。外部冗長性ディスク・グループの有効なディスク領域は、その全デバイスにおけるディスク領域の合計です。

自動ストレージ管理では外部冗長性ディスク・グループにデータがミラー化されないため、このタイプのディスク・グループでディスク・デバイスとして独自のデータ保護メカニズムを提供する RAID または類似のデバイスのみを使用することをお勧めします。

- 標準冗長性

標準冗長性ディスク・グループでは、パフォーマンスおよび信頼性を高めるために、自動ストレージ管理により2方向ミラー化がデフォルトで使用されます。標準冗長性ディスク・グループには、2つ以上のディスク・デバイス（または2つ以上の障害グループ）が必要です。標準冗長性ディスク・グループの有効なディスク領域は、その全デバイスにおけるディスク領域の合計の1/2です。

ほとんどのインストールの場合、標準冗長性ディスク・グループの使用をお勧めします。

- 高冗長性

高冗長性ディスク・グループでは、自動ストレージ管理は3方向ミラー化を使用して、パフォーマンスを高め、最高水準の信頼性を実現します。高冗長性ディスク・グループには、3つ以上のディスク・デバイス（または3つ以上の障害グループ）が必要です。高冗長性ディスク・グループの有効なディスク領域は、その全デバイスにおけるディスク領域の合計の1/3です。

高冗長性ディスク・グループでは最高水準のデータ保護が提供されますが、この冗長性レベルの使用を決定する前に、追加するストレージ・デバイスによりコストが高くなることを考慮する必要があります。

3. データファイルおよびリカバリ・ファイルに必要なディスク領域の合計量を確認します。

次の表を使用して、インストールに必要な最小ディスク数と最小ディスク領域を確認します。

冗長性レベル	最小ディスク数	データファイル	リカバリ・ファイル	両方のファイル・タイプ
外部	1	1.15GB	2.3GB	3.45GB
標準	2	2.3GB	4.6GB	6.9GB
高	3	3.45GB	6.9GB	10.35GB

既存の自動ストレージ管理インスタンスがシステムに存在する場合、これらの領域要件を満たすために既存のディスク・グループを使用できます。必要に応じて、インストール時にディスクを既存のディスク・グループに追加できます。

次の項では、既存のディスク・グループの指定方法、およびディスク・グループに含まれる空きディスク領域の確認方法を説明します。

4. オプションで、自動ストレージ管理ディスク・グループ・デバイスに対する障害グループを指定します。

注意： この手順は、対話モードで Database Configuration Assistant を実行するインストール方法を使用する場合にのみ行う必要があります。たとえば、「カスタム」インストール・タイプまたは「拡張」データベース構成オプションを選択する場合は、他のインストール・タイプでは、障害グループは指定できません。

標準冗長性ディスク・グループまたは高冗長性ディスク・グループを使用する場合、ディスク・デバイスのセットをカスタム障害グループに関連付けることにより、ハードウェア障害に対するデータベースの保護を強化できます。デフォルトでは、デバイスごとに障害グループが構成されます。しかし、標準冗長性ディスク・グループの2つのディスク・デバイスが同じ SCSI コントローラに接続されている場合、コントローラに障害が発生するとディスク・グループは使用できなくなります。この例のコントローラは、シングル・ポイント障害です。

このような障害を回避するために、2つの SCSI コントローラ（それぞれが2つのディスクを持つ）を使用し、各コントローラに接続するディスクに対して障害グループを定義できます。この構成により、ディスク・グループでは、1つの SCSI コントローラの障害を許容できるようになります。

注意： カスタム障害グループを定義する場合、標準冗長性ディスク・グループに対して2つ以上の障害グループ、および高冗長性ディスク・グループに対して3つ以上の障害グループを指定する必要があります。

5. システムに適切なディスク・グループが存在しないことが確実な場合、適切なディスク・デバイスをインストールまたは指定して、新しいディスク・グループに追加します。適切なディスク・デバイスを指定する場合は、次のガイドラインを使用します。
 - 自動ストレージ管理ディスク・グループのすべてのデバイスは、同じサイズである必要があります。また、同じパフォーマンス特性を持つ必要があります。
 - 単一の物理ディスクに複数のパーティションをディスク・グループ・デバイスとして指定しないでください。自動ストレージ管理では、各ディスク・グループ・デバイスを個別の物理ディスクに配置するよう求められます。
 - 論理ボリュームを自動ストレージ管理ディスク・グループにデバイスとして指定できますが、それらの使用はお勧めしません。論理ボリューム・マネージャは、物理ディスク・アーキテクチャを非表示にすることで、自動ストレージ管理により物理デバイス全体のI/Oが最適化されるのを防止できます。

関連項目： このタスクの実行の詳細は、2-33 ページの「[自動ストレージ管理 \(ASM\) 用ディスクの構成](#)」を参照してください。

既存の自動ストレージ管理ディスク・グループの使用

自動ストレージ管理をデータベース・ファイルまたはリカバリ・ファイルのいずれかの記憶域オプションとして使用する際、既存の自動ストレージ管理ディスク・グループが存在する場合は、選択するインストール方法に応じて次の選択肢があります。

- 対話モードで Database Configuration Assistant を実行するインストール方法（たとえば、「拡張」データベース構成オプション）を選択すると、新しいディスク・グループを作成するか、または既存のディスク・グループを使用するか決定できます。

Database Configuration Assistant を使用してインストール後にデータベースを作成する場合は、同じ選択ができます。

- 非対話モードで Database Configuration Assistant を実行するインストール・タイプを選択する場合、既存のディスク・グループを新規データベースに選択する必要があります。新規ディスク・グループは作成できません。ただし、空き領域が要件に対して不十分な場合には、既存のディスク・グループにディスク・デバイスを追加できます。

注意： 既存のディスク・グループを管理する自動ストレージ管理インスタンスは、異なる Oracle ホーム・ディレクトリで実行できます。

既存の自動ストレージ管理ディスク・グループが存在するかどうか、またはディスク・グループ内に十分なディスク領域があるかどうかを判断するには、Oracle Enterprise Manager Grid Control または Database Control を使用できます。あるいは、次の手順を使用できます。

1. コントロールパネルの「サービス」で、OracleASMSERVICE+ASM サービスがあるか確認します。
2. 一時的に環境変数の ORACLE_SID と ORACLE_HOME を、使用する自動ストレージ管理インスタンスに適した値に設定します。
3. AS SYSDBA 権限を持つ SYS ユーザーとして自動ストレージ管理インスタンスに接続し、必要に応じてインスタンスを起動します。

```
%ORACLE_HOME%\bin\sqlplus "SYS/SYS_password as SYSDBA"  
SQL> STARTUP
```

4. 次のコマンドを入力して、既存のディスク・グループ、そのディスク・グループの冗長性レベル、および各グループの空きディスク領域の量を表示します。

```
SQL> SELECT NAME,TYPE,TOTAL_MB,FREE_MB FROM V$ASM_DISKGROUP;
```

5. この出力から、適切な冗長性レベルを持つディスク・グループを特定し、含まれる空き領域を書き留めます。
6. 前の項で記述した記憶域の要件を満たすために、必要に応じて追加のディスク・デバイスをインストールまたは指定します。

注意： 既存のディスク・グループにデバイスを追加する場合、そのディスク・グループにある既存のデバイスと同じサイズおよび同じパフォーマンス特性を持つデバイスを使用することをお勧めします。

自動ストレージ管理 (ASM) 用ディスクの構成

自動ストレージ管理を直接接続ストレージ (DAS) またはストレージ・エリア・ネットワーク (SAN) で使用するには、asmtool または asmtoolg (GUI バージョン) により、ヘッダーを使用してディスクにスタンプを付ける必要があります。

自動ストレージ管理で DAS または SAN ディスクを使用するには、ディスクにパーティション表が必要です。ディスクごとに、そのディスク全体を含むパーティションを1つ作成することをお勧めします。Windows の「コンピュータの管理」またはコマンドライン・ツール diskpart を使用して、パーティションを作成します。パーティションが作成されたら、asmtoolg または asmtool を実行します。これらのツールにより、意味のある永続的な名前をディスクに関連付け、自動ストレージ管理でこれらのディスクを使用しやすくします。自動ストレージ管理ではディスクの文字列を使用して、複数のディスク・グループでの操作を一括して簡単に行いますが、それには Windows のドライブ文字を使用するより、asmtool で作成された名前を使用する方が簡単です。

asmtoolにより作成されたディスク名は、識別のためにすべて接頭辞 ORCLDISK で始まります。これらのディスク名は、`¥¥.¥ORCLDISKn` という名前を指定することで、自動ストレージ管理インスタンスで RAW デバイスとして使用できます。

関連項目： diskpart を使用したパーティション作成方法の詳細は、2-37 ページの「[論理名やドライブ文字の割当て、またはディレクトリのマウント](#)」を参照してください。

asmtoolg の使用 (Graphical User Interface)

asmtoolg は、デバイス名作成のためのグラフィカル・インタフェースです。asmtoolg を使用して、デバイスを追加、変更、削除し、使用可能なデバイスを自動ストレージ管理で利用できるかどうかを調べます。

ディスク・スタンプの追加または変更の手順は、次のとおりです。

1. 「Oracle Database 10g Release 1 (10.1.0)」というインストール CD で、`¥ASM Tool` にナビゲートし、「asmtoolg」をダブルクリックします。

Oracle Database がすでにインストールされている場合は、`%ORACLE_HOME%¥bin` に移動し、「asmtoolg」をダブルクリックします。

2. 「Add or change label」オプションを選択し、「次へ」をクリックします。

asmtoolg により、システムで使用可能なデバイスが表示されます。認識されないディスクには「Candidate device」、RAW デバイス・ファイルには「Oracle raw device file」、スタンプ付きの自動ストレージ管理ディスクには「Stamped ASM disk」、スタンプなしの自動ストレージ管理ディスクには「Unstamped ASM disks」というラベルが付けられます。ツールでは、Windows でファイル・システム (NTFS など) として認識されるディスクも表示されます。これらはディスクとしては使用できないため、選択できません。Microsoft のダイナミックディスクも、自動ストレージ管理ディスクとしては使用できません。

3. 「Stamp Disks」画面で、スタンプを付けるディスクを選択します。

使用しやすいように、自動ストレージ管理では指定した接頭辞で選択されたすべてのデバイスに一意的なスタンプを生成できます。スタンプは、数字を指定した接頭辞に連結して生成されます。たとえば、接頭辞が DATA の場合、最初の自動ストレージ管理リンク名は ORCLDISKDATA0 となります。

個々のデバイスのスタンプを指定することもできます。

4. オプションで、個々のスタンプ (自動ストレージ管理リンク名) を編集するディスクを選択します。
5. 「次へ」をクリックします。
6. 「終了」をクリックします。

ディスク・スタンプを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「Delete labels」 オプションを選択し、「次へ」をクリックします。

削除オプションは、スタンプ付きのディスクが存在する場合にのみ使用可能です。削除画面には、すべてのスタンプ付き自動ストレージ管理ディスクが表示されます。

2. 「Delete Stamps」画面で、スタンプを削除するディスクを選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 「終了」をクリックします。

asmtool の使用 (コマンドライン)

asmtool は、ディスクにスタンプを付けるためのコマンドライン・インタフェースです。これには次のオプションがあります。

オプション	説明	例
-add	スタンプを追加または変更します。ハード・ディスク、パーティションおよび新規のスタンプ名を指定する必要があります。ディスクが RAW デバイスカ、既存の自動ストレージ管理スタンプが付いている場合は、-force オプションを指定する必要があります。	asmtool -add [-force] ¥Device¥Harddisk1¥Partition1 ORCLDISKASM0 ¥Device¥Harddisk2¥Partition1 ORCLDISKASM2...
-addprefix	スタンプを自動的に生成するために、共通の接頭辞を使用してスタンプを追加または変更します。スタンプは、数字を指定した接頭辞に連結して生成されます。ディスクが RAW デバイスカ、既存の自動ストレージ管理スタンプが付いている場合は、-force オプションを指定する必要があります。	asmtool -addprefix ORCLDISKASM [-force] ¥Device¥Harddisk1¥Partition1 ¥Device¥Harddisk2¥Partition1...
-list	使用可能なディスクの一覧を表示します。スタンプ、Windows デバイス名、MB 単位のディスク・サイズが表示されます。ディスクがファイル・システムの場合には、スタンプは付けられません。ディスクが RAW デバイスカ、既存の ASM スタンプが付いている場合は、-force オプションを指定する必要があります。	asmtool -list [-force]
-delete	ディスクから既存のスタンプを削除します。	asmtool -delete ORCLDISKASM0 ORCLDISKASM1...
-create	空のファイルを作成します。	asmtool -create path_to_file size_in_megabytes

注意： -add、-addprefix および -delete の場合、asmtool では、ローカル・マシン上の自動ストレージ管理インスタンスや、クラスタ内のその他のノード（使用可能な場合）に、使用可能なディスクを再スキャンすることを通知します。

RAW 論理ボリュームまたは RAW パーティションの構成

この項の項目は次のとおりです。

- パーティション、論理ドライブまたはボリュームの作成
- 論理名やドライブ文字の割当て、またはディレクトリのマウント
- 新規ディスク・グループでの RAW 論理ボリュームの作成

パーティション、論理ドライブまたはボリュームの作成

RAW ボリュームまたはパーティションを作成および構成するには、オペレーティング・システムまたはサード・パーティ・ベンダーが提供するディスク管理ツールを使用します。次の管理ツールは、オペレーティング・システムで提供されています。

- Windows NT のディスク アドミニストレータ
このツールにアクセスするには、コマンドプロンプトで `windisk.exe` と入力します。または、「スタート」メニューから、「プログラム」→「管理ツール」→「ディスク アドミニストレータ」を選択します。
- Windows 2000、Windows XP および Windows Server 2003 の「ディスクの管理」スナップイン
このツールにアクセスするには、コマンドプロンプトで `diskmgmt.msc` と入力します。または、「スタート」メニューから、「プログラム」→「管理ツール」→「コンピュータの管理」を選択します。次に、「記憶域」ツリーの「ディスクの管理」ノードを選択します。
- Windows XP および Windows Server 2003 のディスク管理用のコマンドライン・ツール
このツールにアクセスするには、コマンドプロンプトで `diskpart.exe` と入力します。

注意： このツールをダウンロードする必要がある場合は、次の Microsoft の Web サイトにある Microsoft ドキュメントを参照してください。

<http://www.microsoft.com/>

関連資料： 使用している管理ツールのオンライン・ヘルプまたはドキュメント

論理名やドライブ文字の割当て、またはディレクトリのマウント

ボリュームを作成した後、論理名またはドライブ文字を割り当てるか、Oracle で使用するためにそれらをディレクトリにマウントします。Windows のグラフィカル・インタフェースまたはコマンドラインを使用して、マウント済のドライブを作成するか、パーティション、論理ドライブまたはボリュームにドライブ文字を割り当てます。setlinks または Oracle Object Link Manager を使用すれば、パーティションに名前を割り当てることができます。

次の例では、diskpart ツールを使用して、ディスク 100 に 32MB のパーティションを作成し、そのパーティションにドライブ文字 B を割り当てます。この例では、diskpart.exe がディスク管理用のコマンドライン・ツールです。

```
c:\> diskpart.exe
diskpart> select disk 100
diskpart> create partition primary size=32
diskpart> assign letter=B
```

オプションで、ドライブ文字を割り当てるかわりに、パーティションを NTFS フォルダにマウントします。

```
diskpart> assign mount=C:\mnt\raw_1
```

新規ディスク・グループでの RAW 論理ボリュームの作成

新規ディスク・グループに必要な RAW 論理ボリュームを作成する手順は、次のとおりです。

1. 作成するデータベースの名前を選択します。
2. 次の表に示した論理ボリュームを作成します。Oracle データベースをインストールするには、これらのボリュームを作成する必要があります。

数	パーティション・サイズ (MB)	用途および論理ボリューム名のサンプル
1	500	SYSTEM 表領域: <i>dbname_system_raw_500m</i>
1	500	SYSAUX 表領域: <i>dbname_sysaux_raw_500m</i>
1	500	UNDOTBS1 表領域: <i>dbname_undotbs1_raw_500m</i>
1	160	EXAMPLE 表領域: <i>dbname_example_raw_160m</i>
1	120	USERS 表領域: <i>dbname_users_raw_120m</i>
2	120	2 つのオンライン REDO ログ・ファイル (<i>m</i> はログ番号 1 または 2): <i>dbname_redo1_m_raw_120m</i>
2	110	制御ファイル 1 および 2: <i>dbname_control[1 2]_raw_110m</i>

数	パーティション・サイズ (MB)	用途および論理ボリューム名のサンプル
1	250	TEMP 表領域: <i>dbname_temp_raw_250m</i>
1	5	サーバー・パラメータ・ファイル (SPFILE) : <i>dbname_spfile_raw_5m</i>
1	5	パスワード・ファイル: <i>dbname_pwdfile_raw_5m</i>

3. 必要なその他の論理ボリュームを作成するには、コマンドライン・インタフェースを使用して、次のようなコマンドを入力します。

```
c:¥> diskpart.exe
DISKPART> select disk diskn
DISKPART> create partition primary size=sizen
DISKPART> assign mount=folder
```

この例では、それぞれ次を意味します。

- *diskpart.exe* は、ディスク管理用のコマンドライン・ツールです。
- *diskn* は、パーティションが作成されるディスク番号です。
- *sizen* は、パーティションのサイズで、たとえば 500 は 500MB を表します。
- *folder* は、パーティションがマウントされる NTFS への絶対パスです。

次の例は、*test* という名前のデータベースの *SYSAUX* 表領域として、ディスク 5 に 500MB のパーティションを作成するサンプル・コマンドです。

```
c:¥> diskpart.exe
DISKPART> select disk 5
DISKPART> create partition primary size=500
DISKPART> assign mount=D:¥oracle¥product¥10.1.0¥oradata¥test¥test_sysaux_500m
```

既存の Oracle サービスの停止

注意：追加の Oracle Database コンポーネントを既存の Oracle ホームにインストールする場合、Oracle ホームで実行中のすべての処理を停止します。Oracle Universal Installer を有効にして特定の実行可能ファイルおよびライブラリを再リンクするには、この作業を完了する必要があります。

インストール時にデータベースの作成を選択すると、ほとんどのインストール・タイプでは TCP/IP ポート 1521 と IPC キー値 EXTPROC を使用して、デフォルトの Oracle Net Listener が構成および起動されます。しかし、既存の Oracle Net Listener プロセスが同じポートまたはキー値を使用している場合には、Oracle Universal Installer は新しいリスナーを構成できませんが、起動することはできません。新しいリスナー・プロセスがインストール時に確実に起動されるようにするには、Oracle Universal Installer を起動する前にすべての既存のリスナーを停止する必要があります。

関連項目： 6-4 ページの「Oracle サービスの停止」

Oracle Advanced Security の要件

Oracle コンポーネントによる認証サポートを使用するために、ハードウェアおよびソフトウェアの要件を満たします。一部の Oracle Advanced Security コンポーネントでは、Oracle Internet Directory などの Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) ディレクトリを使用できます。

関連資料：『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』

Oracle Enterprise Manager の要件

Oracle Enterprise Manager 製品は、すべて同じリリースであることが必要です。新リリースでは、旧リリースの Enterprise Manager はサポートされていません。

注意：Oracle Enterprise Manager Database Control および Enterprise Manager Java Console を除くすべての Oracle Enterprise Manager 製品は、Enterprise Manager Grid Control のインストール・メディアで提供されています。Enterprise Manager Database Control は Oracle Database インストール・メディアで、Enterprise Manager Java Console は Oracle Client インストール・メディアで提供されています。

関連資料：Oracle Enterprise Manager Grid Control インストール・メディアで提供されている『Oracle Enterprise Manager Grid Control 基本インストールセッションおよび構成』

Oracle Managed Files の要件

「カスタム」インストール・タイプまたは「拡張」データベース作成オプションを選択すると、新規データベースで Oracle Managed Files の機能を使用するように選択することもできます。この機能を使用すると、データベース・ファイルを作成または削除するときに、ファイル名ではなく、データベース・オブジェクト名を指定すれば実行できます。

Oracle Managed Files を有効にするには、構成手順を実行する必要があります。

関連資料：『Oracle Database 管理者ガイド』の Oracle Managed Files の使用に関する項

Oracle Real Application Clusters

Oracle Real Application Clusters をインストールするには、まず Oracle Cluster Ready Services (CRS) をインストールする必要があります。

関連資料：『Oracle Real Application Clusters インストールおよび構成』

Microsoft 管理コンソール用 Oracle スナップインの要件

Oracle Database には、Microsoft 管理コンソール (MMC) 用のいくつかのスナップインが付属しています。これらのスナップインには、バージョン 1.2 以上の MMC が必要です。

Oracle スナップインをインストールする前に、Internet Explorer バージョン 5.0 (IE 5.0) 以上をインストールします。IE 5.0 をインストールする前に Oracle スナップインをインストールした場合は、Oracle スナップインを再インストールします。

次のコンポーネントは、Oracle スナップイン・コンポーネントに依存します。

- Oracle Administration Assistant for Windows
- Oracle Counters for Windows Performance Monitor

注意： Oracle Administration Assistant for Windows をインストールすると、各 Oracle スナップイン・コンポーネントが自動的にインストールされます。

次の Web サイトから、MMC アドオンをダウンロードします。

<http://www.microsoft.com/>

Oracle Transparent Gateway の要件

この項の項目は次のとおりです。

- Oracle Transparent Gateway でサポートされる構成
- Oracle Transparent Gateway のシステム要件

Oracle Transparent Gateway でサポートされる構成

表 2-4 は、このマニュアルの発行時にオラクル社によってテストされたゲートウェイ構成を示しています。オラクル社では、引き続きサポートされるゲートウェイ構成を更新します。サポートされている構成の最新情報については、次の Web サイトを参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

表 2-4 Oracle Transparent Gateway コンポーネント用にサポートされているソフトウェア

Oracle Transparent Gateway	要件
Oracle Transparent Gateway for Microsoft SQL Server	Microsoft SQL Server Version 7.0 または SQL Server 2000 Microsoft SQL Server ODBC Driver
Oracle Transparent Gateway for Sybase	Sybase Server のバージョン 12.0 または 12.5 が必要です。 Sybase Server がゲートウェイと同じコンピュータにない場合は、Sybase Server に対して認証されている Sybase Open Client Library のバージョンが必要です。
Oracle Transparent Gateway for Teradata	Teradata V2R.03.00.02 または V2R.04.00.0115 NCR Teradata ODBC Driver バージョン 02.08.00.00
Oracle Transparent Gateway for IBM DRDA	詳細は、『Oracle Transparent Gateway for DRDA インストールレーションおよびユーザーズ・ガイド』を参照してください。
Oracle Procedural Gateway for APPC	詳細は、『Oracle Procedural Gateway for APPC Installation and Configuration Guide』を参照してください。

Oracle Transparent Gateway のシステム要件

表 2-5 は、Microsoft SQL Server、Sybase および Teradata に対する Oracle Transparent Gateway のシステム要件を示しています。各 Oracle Transparent Gateway のメモリー、ネットワークングおよびディスク領域の要件は同じです。

関連資料： IBM DRDA および APPC ゲートウェイに対するシステム要件については、『Oracle Transparent Gateway for DRDA インストレーションおよびユーザーズ・ガイド』および『Oracle Procedural Gateway for APPC Installation and Configuration Guide』を参照してください。

これらのマニュアルは、Oracle Database インストール・メディアで提供されています。

表 2-5 Oracle Transparent Gateway のシステム要件

要件	説明
ディスク領域	200MB の追加ディスク領域。
メモリー	<p>ゲートウェイをサポートするための推奨実メモリーは 26MB です。ゲートウェイの同時使用に対する合計実メモリーの要件も、次の要素に依存しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ユーザーが発行する SQL 文 ■ Microsoft SQL、Sybase または Teradata サーバーに対して現在開かれているカーソル数 ■ アクセス中の表にある列数
Oracle Networking	<p>Oracle Net Services と、Named Pipes または TCP/IP に対する Oracle protocol support は、Oracle データベース・コンピュータとゲートウェイ・コンピュータにインストールする必要があります。Oracle Net Services コンポーネントは、Oracle Database インストール・メディアに含まれています。</p>

Oracle Database のインストール

Oracle Database ソフトウェアはディスク（CD-ROM または DVD-ROM）で配布されますが、Oracle Technology Network Japan（OTN-J）の Web サイトからもダウンロードできます。ほとんどの場合は、Oracle Universal Installer の Graphical User Interface（GUI）を使用してソフトウェアをインストールします。ただし、この GUI を使用せずに Oracle Universal Installer を使用して非対話型のインストールを実行することもできます。

この章の項目は次のとおりです。

- [Oracle Database をインストールする前の考慮事項](#)
- [コンポーネント固有のインストール・ガイドラインの再検討](#)
- [インストール・ソフトウェアへのアクセス](#)
- [Oracle Database ソフトウェアのインストール](#)

Oracle Database をインストールする前の考慮事項

インストールを開始する前に、第2章「Oracle Database インストール前の要件」および3-4 ページの「コンポーネント固有のインストール・ガイドラインの再検討」に説明されている要件を確認し、満たします。

さらに、次の問題を検討します。

- 複数の Oracle Database インストールの実行
- すでに Oracle コンポーネントがあるシステムへのインストール
- 最小のメモリー要件でのインストール

複数の Oracle Database インストールの実行

Oracle Database の複数インストールを実行する必要がある場合は、非対話モードを使用できます。非対話モードでは、各ノードで、レスポンス・ファイルを使用してコマンドラインから Oracle Universal Installer を実行します。レスポンス・ファイルは、通常 Oracle Universal Installer の GUI ダイアログ・ボックスに入力する設定が含まれるテキスト・ファイルです。

関連項目： 非対話型インストールの実行手順は、B-2 ページの「非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール」を参照してください。

すでに Oracle コンポーネントがあるシステムへのインストール

関連資料：

- Oracle Universal Installer の実行前に、1-24 ページの「アップグレードの考慮事項」を参照してください。
- Oracle Universal Installer の実行前に、『Oracle Real Application Clusters インストレーションおよび構成』で、Windows ベースのシステムで Oracle Real Applications Clusters をインストールする前の作業に関する項を参照してください。

次の手順に従います。

1. Administrators グループのメンバーとして、Oracle コンポーネントをインストールするコンピュータにログインします。
プライマリ ドメイン コントローラ (PDC) またはバックアップ ドメイン コントローラ (BDC) にインストールする場合は、Domain Administrators グループのメンバーとしてログオンします。
2. ORACLE_HOME 環境変数が存在する場合は、削除します。環境変数の削除の詳細は、Microsoft のオンライン・ヘルプを参照してください。

注意：ORACLE_HOME 環境変数は、レジストリで自動的に設定されます。この変数を手動で設定すると、インストールできません。

3. アップグレードする必要があるすべてのデータベースをバックアップします。1-24 ページの「[アップグレードの考慮事項](#)」を確認します。
4. 既存の Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) のホームにインストールする場合は、Oracle の全サービスを停止します。

Oracle サービス (Ora で始まる名前) が存在し、状態が「開始」の場合は、それらを停止します。特に、すべての Oracle リスナー・サービスが停止していることを確認します。

関連資料：サービス停止の詳細は、Microsoft のオンライン・ヘルプを参照してください。

最小のメモリー要件でのインストール

256MB の RAM と 500MB の仮想メモリーを持つコンピュータに Oracle Database をインストールする場合、次の制限があります。

- メモリーが 256MB のコンピュータでは、Oracle Universal Installer のインストール・セッション中に、Oracle Database Upgrade Assistant、Database Configuration Assistant または Oracle Net Services Configuration Assistant を実行できません。
- 仮想メモリーがなくなった場合に、コンピュータで実行中のアプリケーションの数に応じて、ページング・ファイルのサイズをさらに増やすか、システム・グローバル領域 (SGA) のサイズを減らす必要が生じます。一時ファイルとページング・ファイルがどちらも同じ物理ドライブに格納されている場合、一方の領域要件が他方のサイズを制限する可能性があります。システムの空き領域がかぎられている場合は、まず Oracle Database ソフトウェアをインストールします。インストールの終了後に、Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成します。

メモリーと仮想メモリーの最小限の要件 (256MB と 500MB) のみを満たすコンピュータでは、データベースをインストールしないでください。次のガイドラインに従ってください。

- 「基本インストール」を選択し、「初期データベースを作成する」の選択を解除します。
- 「拡張インストール」を選択し、「データベース構成の選択」画面から「初期データベースを作成しない」を選択します。
- 「拡張インストール」を選択し、「インストール・タイプの選択」画面から「カスタム」インストール・タイプを選択して、データベースの作成を要求されたら、「データベースの作成」画面で「いいえ」を選択します。
- 「Configuration Assistant」画面から「Database Configuration Assistant」を取り消します。

インストール後、必要に応じて Configuration Assistant を実行します。

- 新規データベースを作成するには、Database Configuration Assistant を実行します。「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Database Configuration Assistant」を選択します。
- 既存のデータベースをアップグレードするには、Oracle Database Upgrade Assistant を実行します。「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Database Upgrade Assistant」を選択します。

コンポーネント固有のインストール・ガイドラインの再検討

Oracle Universal Installer を起動する前に、次のガイドラインを再検討します。

- Oracle Universal Installer
このリリースのコンポーネントをインストールする際に、旧リリースの Oracle から Oracle Universal Installer を使用しないでください。
- クラスタでのインストール

関連資料： Oracle Real Application Clusters のインストールの詳細は、『Oracle Real Application Clusters インストレーションおよび構成』を参照してください。

Oracle Cluster Ready Services (CRS) および Oracle Real Application Clusters がシステムにインストールされている場合は、Oracle Universal Installer の「ハードウェアのクラスタ・インストール・モードの指定」画面が表示されます。Oracle Real Application Clusters をインストールしない場合は、この画面で「ローカル・インストール」を選択する必要があります。

- Oracle Connection Manager
Oracle Connection Manager をインストールするには、「拡張インストール」を選択した後、「カスタム」インストール・タイプを選択します。
- Oracle Counters for Windows Performance Monitor
Oracle Counters for Windows Performance Monitor をインストールするには、「拡張インストール」を選択した後、「カスタム」インストール・タイプを選択します。

- Oracle Label Security

Oracle Label Security オプションをインストールするには、「拡張インストール」を選択した後、「カスタム」インストール・タイプを選択します。

Oracle Internet Directory を使用するために Oracle Label Security を構成するには、Database Configuration Assistant の実行時に「Oracle Internet Directory」オプションを選択します。

注意：既存の Oracle ホームで Oracle Label Security をインストールする場合は、Oracle ホーム内の各データベースを停止します。

- Oracle Procedural Gateway

Oracle Procedural Gateway をインストールするには、「拡張インストール」を選択した後、「カスタム」インストール・タイプを選択します。

- Oracle Transparent Gateway

Oracle Transparent Gateway をインストールするには、「拡張インストール」を選択した後、「カスタム」インストール・タイプを選択します。

- Oracle ソフトウェアの再インストール

Oracle Database がすでにインストールされている Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle ソフトウェアを再インストールする場合は、開始する前に、インストール済の Oracle Partitioning などのコンポーネントもすべて再インストールする必要があります。

インストール・ソフトウェアへのアクセス

Oracle Database ソフトウェアはコンパクト・ディスク（CD-ROM または DVD-ROM）で配布されますが、Oracle Technology Network Japan（OTN-J）の Web サイトからもダウンロードできます。Oracle Database は、次のシナリオを使用してアクセスおよびインストールできます。

- リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール
- リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータでのインストール
- Oracle Technology Network Japan の Web サイトからの Oracle ソフトウェアのダウンロード
- ハード・ディスクへの Oracle Database ソフトウェアのコピー

リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール

Oracle Database をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD ドライブがない場合は、リモート CD-ROM または DVD ドライブからインストールを実行できます。次の手順を実行します。

- リモート・コンピュータでの CD-ROM または DVD ドライブの共有
- ローカル・コンピュータでの CD-ROM または DVD ドライブのマッピング

リモート・コンピュータでの CD-ROM または DVD ドライブの共有

使用するリモート CD-ROM または DVD ドライブで、共有アクセスを可能にする必要があります。これを設定するには、CD-ROM または DVD ドライブがあるリモート・コンピュータで次の手順を実行します。

1. Administrator ユーザーとしてリモート・コンピュータにログインします。
2. エクスプローラを起動します。
3. CD-ROM または DVD ドライブ文字を右クリックし、「共有」（Windows 2000、Windows NT）または「共有とセキュリティ」（Windows 2003、Windows XP）を選択します。
4. 「共有」タブをクリックし、次のようにします。
 - a. 「このフォルダを共有する」を選択します。
 - b. 「共有名」で、cdrom や dvd などの共有名を指定します。この名前は、ローカル・コンピュータで CD-ROM または DVD ドライブをマッピングする際に使用します。次の手順の、手順 1 の d を参照してください。
 - c. 「アクセス許可」をクリックします。Oracle Database をインストールするためにドライブにアクセスするユーザーには、少なくとも「読み取り」アクセス許可が必要です。

- d. 終了したら「OK」をクリックします。
5. CD-ROM の場合は、「Oracle Database 10g Release 1 (10.1.0)」という CD を CD-ROM ドライブに挿入します。

DVD の場合は、Oracle Database DVD を DVD ドライブに挿入します。

ローカル・コンピュータでの CD-ROM または DVD ドライブのマッピング

ローカル・コンピュータで次の手順を実行して、リモート CD-ROM または DVD ドライブをマッピングし、マッピングされたドライブから Oracle Universal Installer を実行します。

1. リモート CD-ROM または DVD ドライブをマッピングします。
 - a. ローカル・コンピュータでエクスプローラを起動します。
 - b. 「ツール」メニューから、「ネットワーク ドライブの割り当て」を選択して、「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログを表示します。
 - c. リモート CD-ROM または DVD ドライブに使用するドライブ文字を選択します。
 - d. 「フォルダ」で、次の形式を使用して、リモート CD-ROM または DVD ドライブの場所を入力します。

¥¥remote_hostname¥share_name

この例では、それぞれ次を意味します。

- remote_hostname は、CD-ROM または DVD ドライブのあるリモート・コンピュータの名前です。
- share_name は、前述の手順の、手順 4 で入力した共有名です。次に例を示します。

¥¥computer2¥cdrom

- e. リモート・コンピュータに別のユーザーとして接続する必要がある場合は、次のようにします。
 - **Windows NT:** 「ユーザー名」にユーザー名を入力します。
 - **Windows 2000:** 「異なるユーザー名」をクリックし、ユーザー名を入力します。
 - **Windows 2003 または Windows XP:** 「異なるユーザー名」をクリックし、ユーザー名を入力します。
 - f. 「OK」(Windows NT) または 「完了」(Windows 2000、Windows 2003、Windows XP) をクリックします。
2. マッピングされた CD-ROM または DVD ドライブから Oracle Universal Installer を実行します。
 3. 3-10 ページの「Oracle Database ソフトウェアのインストール」に進んでください。

リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータでのインストール

Oracle Database をリモート・コンピュータでインストールおよび実行（リモート・コンピュータにハード・ドライブがあり、Oracle Database コンポーネントを実行）する場合、コンピュータへの物理アクセスがなくても、リモート・コンピュータで VNC や Symantec pcAnywhere などのリモート・アクセス・ソフトウェアを実行していれば、リモート・コンピュータでインストールを実行できます。ローカル・コンピュータでもリモート・アクセス・ソフトウェアを実行する必要があります。

次の 2 つの方法のいずれかで、リモート・コンピュータに Oracle Database をインストールできます。

- Oracle Database CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーした場合は、ハード・ドライブからインストールできます。
- CD-ROM または DVD をローカル・コンピュータ上のドライブに挿入し、CD-ROM または DVD からインストールできます。

ハード・ドライブからのインストール

Oracle Database CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーした場合は、ハード・ドライブからインストールできます。

実行する必要がある手順は、次のとおりです。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアがインストールされ、リモート・コンピュータとローカル・コンピュータで稼働していることを確認します。
2. Oracle Database CD-ROM または DVD の内容を格納したハード・ドライブを共有します。
3. リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有ハード・ドライブにマッピングします。リモート・コンピュータでこの操作を行うには、リモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。
4. リモート・アクセス・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有ハード・ドライブから Oracle Universal Installer にアクセスします。
5. 3-10 ページの「[Oracle Database ソフトウェアのインストール](#)」に進んでください。

リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール

CD-ROM または DVD をローカル・コンピュータ上のドライブに挿入し、CD-ROM または DVD からインストールできます。

実行する必要がある手順は、次のとおりです。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアがインストールされ、リモート・コンピュータとローカル・コンピュータで稼働していることを確認します。
2. ローカル・コンピュータで、CD-ROM または DVD ドライブを共有します。

リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有 CD-ROM または DVD ドライブにマッピングします。リモート・コンピュータでこの操作を行うには、リモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。

これらの手順については、3-6 ページの「[リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール](#)」で説明しています。

3. リモート・アクセス・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有 CD-ROM または DVD ドライブから Oracle Universal Installer にアクセスします。
4. 3-10 ページの「[Oracle Database ソフトウェアのインストール](#)」に進んでください。

Oracle Technology Network Japan の Web サイトからの Oracle ソフトウェアのダウンロード

Oracle Technology Network Japan (OTN-J) からインストール・ファイルをダウンロードし、ハード・ディスクに展開できます。

インストール・ファイルをダウンロードする手順は、次のとおりです。

1. ブラウザを使用して、次の URL にある Oracle Technology Network Japan のソフトウェア・ダウンロード・ページにアクセスします。

`http://otn.oracle.co.jp/software/`

2. インストールする製品のそれぞれのダウンロード・ページにナビゲートします。
3. ダウンロード・ページで、各必須ファイルのサイズを合計して必要なディスク領域を確認します。ファイル・サイズは、ファイル名の隣に表示されます。
4. ファイルの格納および展開用に、十分な空き領域のあるファイル・システムを選択します。ほとんどの場合、使用可能なディスク領域には、全圧縮ファイルの 2 倍以上のサイズが必要です。
5. 選択したファイル・システム上で、インストール・ディレクトリを保持するために、「OraDB10g」などの親ディレクトリをインストールする製品ごとに作成します。
6. すべてのインストール・ファイルを、作成したディレクトリにダウンロードします。

7. ダウンロードしたファイルのサイズが、Oracle Technology Network Japan 上の対応するファイルと一致することを確認します。
8. 作成した各ディレクトリで、ファイルを展開します。
9. 必須インストール・ファイルをすべて展開した後に、3-10 ページの「[Oracle Database ソフトウェアのインストール](#)」に進んでください。

ハード・ディスクへの Oracle Database ソフトウェアのコピー

インストール・メディアの内容をハード・ディスクにコピーする手順は、次のとおりです。

1. ハード・ドライブにディレクトリを作成します。次に例を示します。

```
d:\install\Disk1
```
2. インストール・メディアの内容を作成したディレクトリにコピーします。
3. 必須インストール・ファイルをすべてコピーした後に、3-10 ページの「[Oracle Database ソフトウェアのインストール](#)」に進んでください。

Oracle Database ソフトウェアのインストール

ほとんどの場合は、Oracle Universal Installer の Graphical User Interface (GUI) を使用して Oracle Database をインストールします。ただし、この GUI を使用せずに Oracle Universal Installer を使用して非対話型のインストールを実行することもできます。この方法は、Oracle Client の複数インストールの実行が必要な場合に特に役立ちます。

関連項目： 非対話型インストールとその他の拡張インストールの詳細は、[付録 B「Oracle Database 拡張インストール」](#)を参照してください。

Oracle Database ソフトウェアをインストールする手順は、次のとおりです。

1. **Administrators** グループのメンバーとして、Oracle コンポーネントをインストールするコンピュータにログインします。

プライマリ ドメイン コントローラ (PDC) またはバックアップ ドメイン コントローラ (BDC) にインストールする場合は、**Domain Administrators** グループのメンバーとしてログオンします。
2. 「Oracle Database 10g Release 1 (10.1.0)」という CD を挿入するか、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリにナビゲートします。

ハード・ディスクからインストールする場合は、ダウンロードまたはコピーしたインストール・ファイル用に作成したディレクトリにある `setup.exe` をダブルクリックします。

サポートされているすべての Windows プラットフォームでは、Oracle Database のインストールに同じインストール・メディアを使用します。

インストール・メディアからインストールする場合は、Autorun 画面が自動的に表示されます。Autorun 画面が表示されない場合は、次のようにします。

- a. 「スタート」メニューから、「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 次のように入力します。

```
DRIVE_LETTER:¥autorun¥autorun.exe
```

Autorun 画面で**製品のインストール / 削除**を選択します。

3. 「ようこそ」画面で、「**基本インストール**」または「**拡張インストール**」を選択し、必要に応じて質問に回答します。

関連項目：「**基本**」および「**拡張**」インストール方法の詳細は、1-9 ページの「[Oracle Database のインストール方法](#)」を参照してください。

3-13 ページの表 3-1 にリストする後続画面は、選択したインストール方法によって決まります。

4. 次のガイドラインに従ってインストールを完了します。
 - Oracle9i 以下のソフトウェアが入っている既存の Oracle ホームには、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) ソフトウェアをインストールしないでください。
 - すでに Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) クライアント・ソフトウェアが入っている Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) をインストールすると、リスナーが作成されません。リスナーを作成するには、インストール後に Oracle Net Configuration Assistant をインストールして実行します。Oracle Database より前に管理者クライアントがインストールされている場合は、Oracle Net Configuration Assistant がすでにインストールされています。
 - Oracle Universal Installer の各画面に表示される指示に従います。追加情報が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
 - SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP のパスワードの入力を求められた場合には、次のようなパスワードを指定することをお勧めします。
 - 長さ 4 文字以上であること
 - ユーザー名とは異なること
 - 英字、数字および区切り記号をそれぞれ 1 文字以上含んでいること
 - welcome、account、database または user など、単純あるいは見えてすぐにわかる単語ではないこと

注意： 指定したパスワードは忘れないでください。

- オラクル社カスタマ・サポート・センターで提供されているパッチを使用する場合を除き、Java Runtime Environment (JRE) を変更しないでください。Oracle Universal Installer により、オラクル社が提供するバージョンの JRE が自動的にインストールされます。このバージョンは、Oracle Universal Installer およびいくつかの Oracle Assistant の実行に必要です。
- ソフトウェアのインストール中またはリンク中にエラーが発生した場合は、[付録 E](#) のトラブルシューティング情報を参照してください。
- 対話モードで Database Configuration Assistant および Oracle Net Configuration Assistant を実行するインストール・タイプを選択した場合は、データベースとネットワークの構成に関する詳細な情報を入力する必要があります。

対話モードでの Database Configuration Assistant または Oracle Net Configuration Assistant の使用に不明な点がある場合は、任意の画面で「ヘルプ」をクリックします。

注意： デフォルトのインストールを選択した場合、Database Configuration Assistant および Oracle Net Configuration Assistant は、非対話モードで実行されます。

5. すべての構成ツールが終了した後、「終了」をクリックし、「はい」をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。
6. Oracle Enterprise Manager Database Control により Web ブラウザが開いたら、ユーザー名とパスワードを入力します。

SYS、SYSTEM または SYSMAN としてログインできます。SYS としてログインした場合、AS SYSDBA を接続する必要があります。インストール時にアカウントに指定したパスワードを入力します。
7. オプションで、インストール・プロセス中に作成された一時ファイルを削除する場合は、`¥temp¥OraInstalldate_time` ディレクトリを削除します。
`OraInstalldate_time` ディレクトリには、約 45MB のファイルが保持されます。

コンピュータを再起動しても、`OraInstalldate_time` ディレクトリが削除されます。
8. Oracle Database のインストール後に完了する必要がある作業については、[第 4 章「Oracle Database のインストール後の作業」](#)を参照してください。

表 3-1 Oracle Universal Installer 画面

画面	推奨される操作
ようこそ	<p>「基本インストール」または「拡張インストール」を選択します。</p> <p>Oracle Database を短時間でインストールする場合は、「基本インストール」を選択します。このインストール方法に必要なユーザー入力は最小限です。この方法では、ソフトウェアがインストールされ、この画面で指定する情報を使用して、汎用のデータベースがオプションで作成されます。</p> <p>「拡張インストール」では、異なるアカウントの個別パスワードの作成、特定のタイプの初期データベース（たとえば、トランザクション処理やデータ・ウェアハウス・システム用）の作成、異なる言語グループの使用、電子メール通知の指定など、より複雑なインストールを実行できます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
ファイルの場所の指定	<p>「インストール先」セクションでデフォルト値を確定するか、Oracle コンポーネントをインストールする Oracle ホームの名前とディレクトリ・パスを入力します。ディレクトリ・パスにはスペースを含めないでください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
インストール・タイプの選択	<p>「Enterprise Edition」、「Standard Edition」、「Personal Edition」または「カスタム」を選択します。「次へ」をクリックします。</p>
データベース構成の選択	<p>必要を満たすために最適なデータベース構成を選択します。これらの事前構成済データベース・タイプの説明は、Oracle Universal Installer または Database Configuration Assistant のオンライン・ヘルプを参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 3-1 Oracle Universal Installer 画面 (続き)

画面	推奨される操作
データベース構成オプションの指定	<p>次の情報を指定し、「次へ」をクリックします。</p> <p>グローバル・データベース名：</p> <p>データベース名を指定し、その後にシステムのドメイン名を続けます。</p> <p><code>sales.your_domain.com</code></p> <p>最初のピリオドの前に指定した値は、SID 値にも使用されます。データベースに対して指定した名前が 8 文字以下であることを確認します。この名前には、次の文字のみ含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アルファベット ■ 数字 ■ アンダースコア (_) ■ シャープ記号 (#) ■ ドル記号 (\$) <p>データベース・キャラクタ・セットの選択：</p> <p>システム・ロケールに基づくデフォルト値を確定するか、複数の言語をサポートする必要がある場合には、「ヘルプ」をクリックして、サポートされているキャラクタ・セットの詳細を調べます。</p> <p>サンプル・スキーマ付きデータベースを作成：</p> <p>このオプションを選択して、サンプル・スキーマを含む EXAMPLE 表領域を作成します (オプションですが、推奨します)。</p>
データベース管理オプションの選択	<p>デフォルト値を確定し、「次へ」をクリックします。</p> <p>注意： ソフトウェアをインストールした後で、電子メール通知を有効にできます。</p>
データベース・ファイル記憶域オプションの指定	<p>「ファイルシステム」オプションを選択し、データベース・ファイルの場所を指定して、「次へ」をクリックします。</p> <p>データベース・ファイルの位置の指定：</p> <p>デフォルトの場所を確定するか、新規ファイルの場所を指定します。</p>
バックアップ・オプションおよびリカバリ・オプションの指定	<p>デフォルト値を確定し、「次へ」をクリックします。</p> <p>注意： ソフトウェアをインストールした後で、自動バックアップを有効にできます。</p>
データベース・スキーマのパスワードの指定	<p>権限を持つすべてのデータベース・アカウントのパスワードを入力および確認し、「次へ」をクリックします。</p> <p>注意： 各アカウントには、異なるパスワードを指定することをお勧めします。指定したパスワードは忘れないでください。</p>
サマリー	表示された情報を確認し、「インストール」をクリックします。

表 3-1 Oracle Universal Installer 画面 (続き)

画面	推奨される操作
インストール	「インストール」画面には、製品のインストール中に状態情報が表示されます。
Configuration Assistant	<p>「Configuration Assistant」画面には、ソフトウェアを構成し、データベースを作成する Configuration Assistant の状態情報が表示されます。</p> <p>Database Configuration Assistant の終了後、画面上の情報を確認します。次の情報を書き留めます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Enterprise Manager の URL ■ データベース作成ログ・ファイルの場所 ■ グローバル・データベース名 ■ システム識別子 (SID) ■ サーバー・パラメータ・ファイル名と場所 <p>「OK」をクリックして続行するか、「パスワード管理」をクリックしてアカウントのロックを解除し、パスワードを設定します。</p>
インストールの終了	<p>Configuration Assistant により、Oracle Enterprise Manager Database Control など、Web ベースのいくつかのアプリケーションが構成されます。この画面には、これらのアプリケーションに対して構成された URL が表示されます。使用された URL を書き留めます。</p> <p>これらの URL で使用されるポート番号も、次のファイルに記録されます。</p> <pre data-bbox="458 925 853 947">%ORACLE_HOME%\install\portlist.ini</pre> <p>Oracle Universal Installer を終了するには、「終了」をクリックし、「はい」をクリックします。Oracle Enterprise Manager Database Control が、Web ブラウザに表示されます。</p>

Oracle Database のインストール後の作業

この章では、インストール後の構成作業を説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- 無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック
- Oracle コンポーネントの構成

無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック

データベースを新規作成またはアップグレードした後は、`utlrp.sql` スクリプトを実行することをお勧めします。このスクリプトは、状態が `INVALID` である可能性のある PL/SQL モジュール（パッケージ、プロシージャ、型などを含む）をすべて再コンパイルします。この手順はオプションですが、インストール後ではなく、インストール中に再コンパイルが行われるようにするためにお勧めします。

注意： スクリプトの実行中は、データベースで他のデータ定義言語（DDL）の文を実行しないでください。また、`STANDARD` および `DBMS_STANDARD` パッケージは有効にしておく必要があります。

1. `SQL*Plus` を起動します。

```
C:¥> sqlplus /nolog
```

2. データベースに `SYS` アカウントで接続します。

```
SQL> CONNECT SYS/PASSWORD@service_name AS SYSDBA
```

`PASSWORD` は、インストール時に `SYS` アカウントに割り当てたパスワードです。

3. データベースを起動します（必要な場合）。

```
SQL> STARTUP
```

4. `utlrp.sql` スクリプトを実行します。

```
SQL> @%ORACLE_HOME%\rdbms\admin\utlrp.sql
```

Oracle コンポーネントの構成

多くの Oracle コンポーネントおよびオプションは、使用する前に構成する必要があります。個々の Oracle Database コンポーネントまたはオプションを使用する前に、Oracle Documentation Library CD-ROM および Oracle Technology Network Japan の Web サイトで入手可能な該当するマニュアルを参照してください。

この項の項目は次のとおりです。

- [Oracle Messaging Gateway の構成](#)
- [Oracle JVM および Oracle interMedia にネイティブにコンパイルされた Java ライブラリのインストール](#)
- [Oracle Administration Assistant for Windows の構成](#)
- [別の Oracle ホームからの Oracle Cluster Synchronization Services \(CSS\) の実行](#)
- [Oracle Counters for Windows Performance Monitor の構成](#)
- [Oracle Label Security の構成](#)
- [Oracle Net Services の構成](#)
- [Oracle Services for Microsoft Transaction Server の構成](#)
- [Oracle Text が提供するナレッジ・ベースのインストール](#)
- [Oracle XML DB の構成または再インストール](#)
- [PL/SQL 外部プロシージャの構成](#)
- [共有サーバー・サポートの構成](#)
- [ジョブ・システムの接続情報の設定](#)
- [自動ストレージ管理と通信するための Oracle Database の構成](#)
- [Oracle Enterprise Manager Database Control を使用するためのデータベースの構成](#)
- [Oracle Database 10g リリース 1 \(10.1\) での Oracle9i 言語および定義ファイルの使用](#)
- [Companion CD からの Oracle Database コンポーネントのインストール](#)

注意： 使用する予定のコンポーネントについてのみ、インストール後の作業を実行する必要があります。

Oracle Messaging Gateway の構成

Oracle Database のアドバンスド・キューイングの使用を計画している場合、Oracle Database のアドバンスド・キューイング機能である Oracle Messaging Gateway では、Oracle Database のインストール後に追加の構成が必要です。

関連資料：『Oracle Streams アドバンスド・キューイング・ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』の Oracle Messaging Gateway のロードおよび設定に関する項

Oracle JVM および Oracle *interMedia* にネイティブにコンパイルされた Java ライブラリのインストール

Oracle Java Virtual Machine (JVM) または Oracle *interMedia* の使用を計画している場合、それらのコンポーネントで使用するネイティブにコンパイルされた Java ライブラリ (NCOMP) を、Oracle Database Companion CD からインストールすることをお勧めします。これらのライブラリは、プラットフォーム上でコンポーネントのパフォーマンスを高めるために必要です。

関連項目： Companion CD からのコンポーネントのインストールの詳細は、4-11 ページの「[Companion CD からの Oracle Database コンポーネントのインストール](#)」を参照してください。

Oracle Administration Assistant for Windows の構成

Oracle Administration Assistant for Windows を実行するには、Microsoft 管理コンソールと HTML Help 1.2 以上が必要です。Microsoft 管理コンソール (MMC) は Windows 2000 に付属していますが、Windows NT 4.0 を使用している場合は手動でインストールする必要があります。MMC バージョン 1.2 以上が必要です。入手可能な最新バージョンの MMC を使用することをお勧めします。

関連資料： Microsoft のドキュメント

<http://www.microsoft.com/>

別の Oracle ホームからの Oracle Cluster Synchronization Services (CSS) の実行

異なる Oracle ホームから実行されるように Oracle Cluster Synchronization Services (CSS) を再構成するには、コマンドプロンプトで次のように入力します。

```
localconfig reset [destination_Oracle_home]
```

現在 CSS サービスが構成されている Oracle ホームからこのコマンドを実行する場合は、`destination_Oracle_home` を指定する必要があります。

関連項目： 6-2 ページの「[Oracle Cluster Synchronization Services \(CSS\) の削除](#)」

Oracle Counters for Windows Performance Monitor の構成

Oracle Counters for Windows Performance Monitor を使用して Oracle 固有のカウンタを表示する前に、`%ORACLE_HOME%\bin` ディレクトリにある `operfcfg.exe` を使用して、SYSTEM パスワードを指定する必要があります。

システムのパスワードを設定するには、次のように入力します。

```
operfcfg.exe -U SYSTEM -P password -D TNS_Alias_for_database
```

関連資料： Oracle Counters for Windows Performance Monitor の詳細は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』を参照してください。

Oracle Label Security の構成

Oracle Label Security をインストールした場合は、使用する前にデータベース内で構成する必要があります。Oracle Label Security は、Oracle Internet Directory の統合を使用するかどうにかかわらず構成できます。Oracle Internet Directory の統合を使用せずに Oracle Label Security を構成した場合、後で Oracle Internet Directory を使用するようには構成することはできません。

注意： Oracle Internet Directory の統合を使用して Oracle Label Security を構成するには、環境に Oracle Internet Directory をインストールし、ディレクトリに Oracle データベースを登録する必要があります。

関連資料： Oracle Internet Directory により有効になる Oracle Label Security の詳細は、『Oracle Label Security 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Net Services の構成

システムに以前のリリースの Oracle ソフトウェアがインストールされている場合は、`tnsnames.ora` および `listener.ora` 構成ファイルの情報を、以前のリリースから新しいリリースの対応するファイルにコピーできます。

注意： `tnsnames.ora` ファイルと `listener.ora` ファイルのデフォルトの位置は、`%ORACLE_HOME%\network\admin\` ディレクトリです。

listener.ora ファイルの変更

以前のリリースの Oracle Database からアップグレードする場合は、以前のリリースではなく現行リリースの Oracle Net リスナーを使用することをお勧めします。

現行リリースのリスナーを使用するには、静的なサービス情報を、以前のリリースの `listener.ora` ファイルから新しいリリースで使用するバージョンのファイルにコピーする必要があります。

リリース 8.0.3 より前のデータベース・インスタンスについては、`listener.ora` ファイルに静的サービス情報を追加します。リリース 8.0.3 以上の Oracle Database は、静的サービス情報を必要としません。

tnsnames.ora ファイルの変更

中心の `tnsnames.ora` ファイルを使用していない場合は、Oracle Net のサービス名と接続記述子を、以前のリリースの `tnsnames.ora` ファイルから新しいリリースで使用するバージョンのファイルにコピーします。

必要な場合は、追加のデータベース・インスタンスの接続情報を新しいファイルに追加することもできます。

Oracle Services for Microsoft Transaction Server の構成

Windows NT インストールでは、Oracle Database をインストールする前に Microsoft 管理コンソール (MMC) をインストールしなかった場合、手動で OracleMTSRecoveryService サービスを開始し、その状態を「自動」に変更する必要があります。

Oracle Services for Microsoft Transaction Server を使用する前に、次の作業を実行します。

- Microsoft Transaction Server 管理者アカウントを作成します。
- データベースのサーバー・レベルのトランザクション・リカバリ・ジョブをスケジュールします。

関連資料：『Oracle Services for Microsoft Transaction Server 開発者ガイド』の「リカバリのシナリオ管理」

Oracle Text が提供するナレッジ・ベースのインストール

Oracle Text のナレッジ・ベースは、テーマの索引付け、ABOUT 問合せ、およびドキュメント・サービスでのテーマの導出に使用される概念の階層ツリーです。Oracle Text の機能のいずれかの使用を計画する場合、提供される 2 つのナレッジ・ベース（英語とフランス語）を Oracle Database の Companion CD からインストールできます。

関連資料：

- 要件を満たすための提供済ナレッジ・ベースの拡張や、英語とフランス語以外の言語での独自のナレッジ・ベースの作成など、ナレッジ・ベースの作成と拡張の詳細は、『Oracle Text リファレンス』を参照してください。
- Companion CD からのコンポーネントのインストールの詳細は、4-11 ページの「[Companion CD からの Oracle Database コンポーネントのインストール](#)」を参照してください。

Oracle XML DB の構成または再インストール

次の作業の詳細は、『Oracle XML DB 開発者ガイド』を参照してください。

- Oracle XML DB の再インストール
- Oracle XML DB 表領域の構成またはカスタマイズ
- FTP、HTTP/WebDAV ポート番号の構成

関連資料：『Oracle XML DB 開発者ガイド』の付録 A

PL/SQL 外部プロシージャの構成

PL/SQL の構成は、使用されるネットワーク構成ファイルによって異なります。ほとんどの場合、構成は自動です。しかし、リリース 8.0.3 より前の `tnsnames.ora` ファイルおよび `listener.ora` ファイルを 10g リリース 1 (10.1) データベースで使用する場合は、手動で構成する必要があります。

関連資料：『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の「Windows 用アプリケーションの開発」

共有サーバー・サポートの構成

共有サーバー・サポートの構成は、サポートのインストール方法によって決まります。Enterprise Edition、Standard Edition または Personal Edition インストール・タイプで Oracle Database をインストールした場合、共有サポートは構成されていません。Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成した場合は、共有サーバー・サポートか専用サーバー・サポートのいずれかを選択しています。

関連資料：『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の「Windows でのインストール後の構成タスク」

ジョブ・システムの接続情報の設定

Windows のシステムでは、ジョブ・システムが Enterprise Manager で正常に機能するように、正しい接続情報を設定する必要があります。デフォルトでは、Management Agent サービスが LocalSystem ユーザーとしてインストールされます。ジョブを発行するとき、発行するユーザーは、「バッチ ジョブとしてログオン」権限を有効にする必要があります。

Enterprise Manager のジョブを発行する必要があるユーザーは、どのオペレーティング・システムの場合でも、次の手順を実行してこの権限を確立します。

Windows 2000 および Windows XP システムの場合

1. 「ローカルセキュリティ ポリシー」ツールを起動します。「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「ローカルセキュリティ ポリシー」を選択します。
2. 「ローカル ポリシー/ユーザー権利の割り当て」の下で、ユーザーに「バッチ ジョブとしてログオン」権限を追加します。
3. Windows 2000 では、ポリシーの変更を有効にするために再起動が必要な場合があります。必要に応じて再起動します。

Windows NT 4.0 システムの場合

1. 「ユーザー マネージャ」ツールを起動します。「スタート」メニューから、「プログラム」→「管理ツール」→「ユーザー マネージャ」を選択します。
2. 「ポリシー」メニューから「ユーザーの権利」を選択します。
3. 「高度なユーザー権利の表示」チェック・ボックスを選択します。
4. 「権利」ドロップダウン・メニューから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
5. 「追加」をクリックして、Enterprise Manager ジョブを送信する Windows ユーザーを追加します。

ローカルにもドメイン・レベルにもユーザーが存在する場合、Windows ではローカル・ユーザーを優先します。ドメイン・ユーザーを使用するには、ユーザー名をドメイン名で修飾します。たとえば、ACCOUNTS ドメインでユーザー joe を使用する場合は、ACCOUNTS¥joe というユーザー名を指定します。

Management Agent サービスがその他のユーザーとしてインストールされている（つまり、LocalSystem ではない）場合、「バッチ ジョブとしてログオン」権限の付与に加えて、Windows サービスのユーザーには、次の3つの権限が付与される必要があります。

- オペレーティング・システムの一部として機能する
- プロセスのメモリ クォータの増加（これは Windows 2000 および Windows NT Server 4.0 では、「クォータを増やす」です。）
- プロセス レベル トークンを置き換える

自動ストレージ管理と通信するための Oracle Database の構成

Windows では、自動ストレージ管理を使用する Oracle Database のインストールでは、Windows システム固有の認証を使用する必要があります。デフォルトでは、Windows システム固有の認証が有効になっています。これを確認するには、デフォルトで `%ORACLE_HOME%\network\admin` にある **sqlnet.ora ファイル** をチェックし、NTS が有効になっていることを確認します。次に例を示します。

```
sqlnet.authentication_services=(NTS)
```

関連資料： Windows システム固有の認証の詳細は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager Database Control を使用するためのデータベースの構成

Database Control Assistant を使用して新規データベースを作成する際に Oracle Enterprise Manager Database Control を自動的に構成するオプションがあります。これにより、Enterprise Manager Database Control を使用してデータベース全体を管理できます。

関連資料： Database Control を使用するためのデータベースの構成の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) での Oracle9i 言語および定義ファイルの使用

Oracle9i データベース言語および地域定義ファイルは、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) で使用できます。

この機能を有効にする手順は、次のとおりです。

1. デフォルトで `%ORACLE_HOME%\nls\data\old` にある `cr9idata.pl` スクリプトを実行します。

または、Oracle Database をインストールする前に、次のように `b_cr9idata` 変数を `true` に設定した Oracle Universal Installer `setup` コマンドを実行できます。

```
setup.exe oracle.rsf.nlsrtl_rsf:b_cr9idata=true
```

2. 新規の言語および地域定義ファイルをインストールしたディレクトリを指すように `ORA_NLS10` 環境変数を設定します。このディレクトリは、デフォルトでは `%ORACLE_HOME%\nls\data` にあります。
3. Oracle Database を再起動します。

関連資料：

- `b_cr9idata` 変数で設定できるレスポンス・ファイルと、Oracle Universal Installer でのレスポンス・ファイルの実行の詳細は、付録 B 「Oracle Database 拡張インストール」を参照してください。
- このリリースの Oracle Database の影響を受けるグローバル化バージョン・サポートの詳細は、付録 C 「Oracle Database グローバリゼーション・サポート」を参照してください。
- `NLS_LANG` パラメータおよびグローバル化バージョン・サポートの初期化パラメータの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

Companion CD からの Oracle Database コンポーネントのインストール

Oracle Database Companion CD には、インストール可能な追加コンポーネントが入っています。これらのコンポーネントは、使用する Oracle Database のコンポーネントまたは機能に応じてインストールしてください。次のコンポーネントまたは機能の使用を予定している場合、Companion CD からそのコンポーネントをインストールすることをお勧めします。

- Legato Single Server Version
- ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ
- Oracle Database Examples
- Oracle Text が提供するナレッジ・ベース

関連資料： インストール情報の詳細は、Companion CD で提供されている『Oracle Database Companion CD インストレーション・ガイド』を参照してください。

インストールされた初期データベースの内容の確認

この章では、Oracle データベースのアカウント、パスワードおよびファイルの場所など、デフォルトの初期データベースの内容について説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- [Enterprise Manager Database Control](#) へのアクセス
- ユーザーのアカウントとパスワードの確認
- データベースの識別
- サーバー・パラメータ・ファイルの特定
- 表領域およびデータファイルの識別
- REDO ログ・ファイルの特定
- 制御ファイルの特定
- Windows での Oracle Database サービスについて

Enterprise Manager Database Control へのアクセス

Oracle Enterprise Manager Database Control では、Oracle データベースの監視、管理および保守に使用できる Web ベースのユーザー・インタフェースが提供されます。

Oracle Enterprise Manager Database Control を表示する手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

```
http://hostname:port/em
```

使用する正しいポート番号がわからない場合は、%ORACLE_HOME%\install\portlist.ini ファイルで次の行を探します。

```
Enterprise Manager Console HTTP Port (db_name) = port
```

たとえば、mgmt42 というホスト・コンピュータにデータベースをインストールし、portlist.ini ファイルに記載されたポート番号が 5500 である場合は、次の URL を入力します。

```
http://mgmt42:5500/em
```

Enterprise Manager により Database Control ログイン・ページが表示されます。

2. SYSMAN データベース・ユーザー・アカウントを使用してデータベースにログインします。Enterprise Manager に Oracle Database のホームページが表示されます。

Oracle Database のインストール時に SYSMAN アカウントに対して指定したパスワードを使用してください。

関連項目: 5-3 ページの「[ユーザーのアカウントとパスワードの確認](#)」

Database Control のログイン権限の理解

SYSMAN ユーザー・アカウントを使用して Oracle Enterprise Manager Database Control にログインする場合、Oracle Enterprise Manager スーパーユーザーとしてログインします。SYSMAN アカウントには、Database Control で提供されているすべての管理機能へのアクセスに必要なロールと権限が自動的に付与されます。

Database Control へのログインには、SYS および SYSTEM アカウントを使用することもできます。また、ログイン権限を他のデータベース・ユーザーに付与することもできます。他のデータベース・ユーザーに管理アクセス権限を付与する手順は、次のとおりです。

1. Database Control にログインします。

関連項目: 5-2 ページの「[Enterprise Manager Database Control へのアクセス](#)」

2. Database Control ホームページの最上部にある「設定」をクリックします。
3. 左のナビゲーション・バーの「管理者」をクリックします。

4. 「作成」をクリックして新規 Enterprise Manager ユーザーを作成します。
5. 「名前」フィールドに既存のデータベース・ユーザー名を入力するか、検索アイコンをクリックしてポップアップ・ウィンドウからユーザーを選択します。
6. このユーザー用のパスワードを入力して「終了」をクリックします。

Enterprise Manager により指定したユーザーにログイン権限が割り当てられ、このユーザーが管理者の設定ページの Enterprise Manager ユーザー・リストに組み込まれます。

ユーザーのアカウントとパスワードの確認

Database Configuration Assistant によって作成されたすべてのデータベースには、SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP データベース・アカウントが含まれています。また、他の複数の管理アカウントも用意されています。他のアカウントを使用する前に、そのロックを解除してパスワードをリセットする必要があります。5-4 ページの表 5-1 に、これらのアカウントとそのユーザー名およびパスワードを示します。

関連資料：

- Oracle Enterprise Manager Database Control を使用して自分のデータベースに定義されているユーザー・アカウントの完全なリストを表示する方法については、5-7 ページの「パスワードのロック解除および変更」を参照してください。
- Oracle Counters for Windows Performance Monitor のパスワードの変更方法は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の「Oracle Counters for Windows Performance Monitor パラメータの変更」を参照してください。
- Oracle のセキュリティの手順およびセキュリティの最良事例の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

管理アカウントの確認

表 5-1 は、管理ユーザー名を説明しています。

表 5-1 管理アカウント

ユーザー名	説明	関連資料
ANONYMOUS	HTTP による Oracle XML DB へのアクセスを許可。	なし
BI	Oracle Sample Schemas に含まれる Business Intelligence スキーマを所有。このアカウントを使用できるのは、Sample Schemas をロードした場合のみです。	『Oracle Database サンプル・スキーマ』
CTXSYS	Oracle Text アカウント。	『Oracle Text リファレンス』
DBSNMP	Oracle Enterprise Manager の管理エージェントによりデータベースの監視および管理に使用。このアカウントが作成されるのは、Database Control を使用するようにデータベースを構成している場合のみです。	『Oracle Enterprise Manager Grid Control 基本インストールおよび構成』
DIP	Directory Integration Platform (DIP) で Oracle Internet Directory での変更をデータベース内のアプリケーションと同期化するために使用。	『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
DMSYS	データ・マイニング操作を実行。	『Oracle Spatial ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
EXFSYS	Expression Filter スキーマを所有。	なし
HR	Oracle Sample Schemas に含まれる Human Resources スキーマを所有。このアカウントを使用できるのは、Sample Schemas をロードした場合のみです。	『Oracle Database サンプル・スキーマ』
IX	Oracle Sample Schemas に含まれる Information Transport スキーマを所有。このアカウントを使用できるのは、Sample Schemas をロードした場合のみです。	『Oracle Database サンプル・スキーマ』
LBACSYS	Oracle Label Security の管理者アカウント。	『Oracle Label Security 管理者ガイド』
MDDATA	Oracle Spatial で Geocoder およびルーター・データの格納に使用。	『Oracle Spatial ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
MDSYS	Oracle Spatial および Oracle Locator の管理者アカウント。	『Oracle Spatial ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
MGMT_VIEW	Oracle Enterprise Manager Database Control で使用。	なし

表 5-1 管理アカウント（続き）

ユーザー名	説明	関連資料
ODM	データ・マイニング操作を実行。	『Oracle Data Mining 管理者ガイド』 『Oracle Data Mining 概要』
ODM_MTR	データ・マイニング・サンプル・プログラム用のデータ・リポジトリに関連付け。	『Oracle Data Mining 管理者ガイド』 『Oracle Data Mining 概要』
OE	Oracle Sample Schemas に含まれる Order Entry スキーマを所有。このアカウントを使用できるのは、Sample Schemas をロードした場合のみです。	『Oracle Database サンプル・スキーマ』
OLAPSYS	OLAP カタログを所有。	『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』
ORDPLUGINS	Oracle <i>interMedia</i> の Audio および Video アカウント。オラクル社が提供するプラグインとサード・パーティのプラグインは、このスキーマにインストールされます。	『Oracle <i>interMedia</i> リファレンス』
ORDSYS	Oracle <i>interMedia</i> の Audio、Video、Locator および Image 管理者アカウント。	『Oracle <i>interMedia</i> リファレンス』
OUTLN	主として格納されたアウトラインに関連付けられたメタデータを管理。プラン・スタビリティをサポートしており、同じ SQL 文の同じ実行計画の保守を可能にします。	『Oracle Database パフォーマンス・チューニング・ガイド』
PM	Oracle Sample Schemas に含まれる Product Media スキーマを所有。このアカウントが作成されるのは、Sample Schemas をロードした場合のみです。	『Oracle Database サンプル・スキーマ』
SCOTT	Oracle サンプル・プログラムおよび例で使用されるアカウント。	『Oracle Database 管理者ガイド』
SH	Oracle Sample Schemas に含まれる Sales History スキーマを所有。このアカウントを使用できるのは、Enterprise Edition のインストール時に Sample Schemas をロードした場合のみです。	『Oracle Database サンプル・スキーマ』
SI_INFORMTN_SCHEMA	SQL/MM Still Image Standard の情報ビューを格納。	『Oracle <i>interMedia</i> リファレンス』
SYS	データベース管理タスクの実行に使用。	『Oracle Database 管理者ガイド』

表 5-1 管理アカウント (続き)

ユーザー名	説明	関連資料
SYSMAN	Oracle Enterprise Manager のデータベース管理タスクの実行に使用されるアカウント。このアカウントが作成されるのは、Database Control を使用するようにデータベースを構成する場合のみです。	『Oracle Enterprise Manager Grid Control 基本インストレーションおよび構成』
SYSTEM	データベース管理タスクの実行に使用。	『Oracle Database 管理者ガイド』
WK_TEST	Ultra Search のデフォルトのインスタンス・スキーマ。	『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』
WKPROXY	Ultra Search プロキシ・ユーザー。	『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』
WKSYS	Ultra Search システム・ディクショナリと PL/SQL パッケージの格納に使用。	『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』
WMSYS	Oracle Workspace Manager 用のメタデータ情報の格納に使用されるアカウント。	『Oracle Database アプリケーション開発者ガイド - Workspace Manager』
XDB	Oracle XML DB のデータおよびメタデータの格納に使用。	『Oracle XML DB 開発者ガイド』

関連資料：

- 『Oracle Database 概要』の権限、ロールおよびセキュリティ・ポリシーに関する項
- 『Oracle Database 管理者ガイド』の Oracle Database 管理者に関する項
- 『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の「Windows での外部ユーザーおよびロールの管理」

パスワードのロック解除および変更

SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP を除く、すべての Oracle システム管理アカウントのパスワードは、インストール後に取り消されます。ロックされているアカウントを使用する前に、ロックを解除してパスワードをリセットする必要があります。インストール時に初期データベースを作成した場合、Database Configuration Assistant には、データベース情報が示された「パスワード管理」ボタン付きの画面が表示されます。「パスワード管理」ボタンを使用して、使用するユーザー名についてのみロックを解除します。

インストール時に初期データベースを作成しても、必要なアカウントのロックを解除していない場合は、次のいずれかの方法を使用して解除する必要があります。

- [SQL*Plus を使用したパスワードのロック解除および変更](#)
- [Enterprise Manager Database Control を使用したパスワードのロック解除および変更](#)

注意： HTTP を介したデータへの無認証アクセスを許可するには、ANONYMOUS アカウントのロックを解除します。

関連資料： 次の項目の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

- インストール後のパスワードのロック解除および変更
- Oracle のセキュリティ手順
- セキュリティの最良事例

SQL*Plus を使用したパスワードのロック解除および変更

SQL*Plus を使用して、アカウントのロックを解除し、インストール後に随時パスワードを変更します。

インストール後にパスワードを変更する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動します。

```
C:¥> sqlplus /NOLOG
```

2. SYSDBA として接続します。

```
SQL> CONNECT "SYS/SYS_password AS SYSDBA"
```

3. 次のようなコマンドを入力します。account はロックを解除するユーザー・アカウント、password は新規パスワードです。

```
SQL> ALTER USER account [IDENTIFIED BY password] ACCOUNT UNLOCK;
```

この例では、それぞれ次を意味します。

- ACCOUNTUNLOCK 句は、アカウントのロックを解除します。
- IDENTIFIEDBYpassword 句は、パスワードをリセットします。

Enterprise Manager Database Control を使用したパスワードのロック解除および変更

Oracle Enterprise Manager Database Control を使用してユーザー・アカウントのパスワードのロックを解除しリセットする手順は、次のとおりです。

1. Database Control にログインします。

関連項目： 5-2 ページの [「Enterprise Manager Database Control へのアクセス」](#)

2. 「管理」をクリックします。
3. 「管理」ページの「セキュリティ」セクションで「ユーザー」をクリックします。

すべてのデータベース・アカウントを示す表が表示されます。「Account Status」列は、そのアカウントがロックされているかどうかと、パスワードが期限切れかどうかを示します。

4. 変更するユーザー・アカウントを選択して「編集」をクリックします。
5. 「ユーザー」プロパティ・シートの「一般」ページを使用して、パスワードを変更し、選択したアカウントをロックまたは、ロック解除します。追加情報は、「ヘルプ」をクリックして参照します。

データベースの識別

Oracle Database 10g ソフトウェアで、データベースをグローバル・データベース名により識別します。グローバル・データベース名は、データベース名とデータベース・ドメインで構成されます。通常、データベース・ドメインはネットワーク・ドメインと同じですが、異なる場合もあります。グローバル・データベース名により、データベースが同じネットワーク内の他のデータベースと一意に区別されます。グローバル・データベース名は、インストール時にデータベースを作成するときに指定するか、または Database Configuration Assistant を使用して指定します。次に例を示します。

`sales.us.mycompany.com`

この例では、それぞれ次を意味します。

- `sales` は、データベース名です。データベース名は 8 文字以内の文字列で、英数字、アンダースコア (`_`) およびシャープ記号 (`#`) を含めることができます。データベース名は `DB_NAME` 初期化パラメータで指定します。
- `us.mycompany.com` は、データベースが位置するネットワーク・ドメインです。データベース名とネットワーク・ドメインの組合せにより、グローバル・データベース名が一意になります。ドメイン部分は 128 文字以内の文字列で、英数字、アンダースコア (`_`) およびシャープ記号 (`#`) を含めることができます。ドメイン名は `DB_DOMAIN` 初期化パラメータで指定します。

`DB_NAME` パラメータと `DB_DOMAIN` 名パラメータを組み合わせて、初期化パラメータ・ファイルの `SERVICE_NAMES` パラメータに割り当てるグローバル・データベース名の値を作成します。

システム識別子 (SID) は、特定のデータベース・インスタンスを識別します。SID により、インスタンスが同じコンピュータ上の他のインスタンスと一意に区別されます。各データベース・インスタンスには一意の SID とデータベース名が必要です。

たとえば、Oracle データベースの SID およびデータベース名が `ORCL` の場合、各データベース・ファイルは `%ORACLE_HOME%\orcl` ディレクトリにあり、初期化パラメータ・ファイルは `%ORACLE_BASE%\admin\orcl\pfile` ディレクトリにあります。

サーバー・パラメータ・ファイルの特定

初期データベースには、1つのデータベース初期化パラメータ・ファイルが含まれています。初期化パラメータ・ファイル `init.ora.xxxxx` は、インスタンスを起動するために必要です。パラメータ・ファイルは、インスタンス構成パラメータのリストが含まれるテキスト・ファイルです。初期データベースの `init.ora` ファイルには、事前構成済パラメータがあります。初期データベースを使用するために、このファイルを編集する必要はありません。

サーバー・パラメータ・ファイル (SPFILE) は、初期化パラメータ・ファイルから作成され、初期化パラメータ・ファイルの名前が変更されます。SPFILE ファイル名は `spfileSID.ora` で、`%ORACLE_HOME%¥database` ディレクトリにあります。

Oracle Enterprise Manager Database Control を使用すると、サーバー・パラメータ・ファイルの場所とすべての初期化パラメータのリストを表示できます。この操作の手順は次のとおりです。

1. Database Control にログインします。

関連項目: 5-2 ページの「[Enterprise Manager Database Control へのアクセス](#)」

2. 「管理」をクリックします。
3. 「管理」ページの「インスタンス」セクションで「すべての初期化パラメータ」をクリックします。

各初期化パラメータの現行の値を示す表が表示されます。

4. 「SPFile」をクリックします。

サーバー・パラメータ・ファイルに指定されている各初期化パラメータの値を示す表が表示されます。この表の前に、サーバー・パラメータ・ファイルの場所が表示されません。

関連資料:

- Windows 用の Oracle Database 固有の初期化パラメータとそれらのデフォルト値のリストは、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の「Oracle Database for Windows での指定」を参照してください。
- 初期化パラメータの詳細は、『Oracle Database リファレンス』を参照してください。

表領域およびデータファイルの識別

Oracle Database は、表領域と呼ばれる小さい論理領域に分割されています。各表領域は、1 つ以上の物理データファイルに対応しています。データファイルには、表や索引など、論理データベース構造の内容が含まれています。各データファイルを関連付けられる表領域およびデータベースは 1 つのみです。

注意： SYSAUX 表領域および SYSTEM 表領域は、すべての Oracle Database 10g リリース 1 (10.1.0.2.0) データベースに存在する必要があります。

表 5-2 は、Oracle Database 内の表領域とデータファイルを示しています。デフォルトでは、データファイルは %ORACLE_BASE%\%oradata\%DB_NAME ディレクトリにあります。

表 5-2 表領域およびデータファイル

表領域	データファイル	説明
EXAMPLE	EXAMPLE01.DBF	サンプル・スキーマを組み込んだ場合は、それが格納されます。
SYSAUX	SYSAUX01.DBF	SYSTEM 表領域の補助表領域として機能します。これまで SYSTEM 表領域を使用していた一部の製品およびオプションでは、SYSAUX 表領域が使用されるようになり、SYSTEM 表領域の負荷が低減します。
SYSTEM	SYSTEM01.DBF	Oracle Database に必要な表、ビューおよびストアド・プロシージャの定義を含むデータ・ディクショナリが格納されます。この領域の情報は、自動的に保守されます。
TEMP	TEMP01.DBF	SQL 文の処理中に作成された一時表領域および索引が格納されます。構成メンバー GROUPBY、ORDERBY または DISTINCT など、多くのソートが必要な SQL 文を実行する場合は、この表領域の拡張が必要になる可能性があります。
UNDOTBS	UNDOTBS01.DBF	UNDO 情報が格納されます。 UNDO 表領域 には、データベースに対する変更をロールバック (UNDO) するために使用されるトランザクション履歴を保持する 1 つ以上の UNDO セグメントが含まれています。 すべての初期データベースは、自動 UNDO 管理モードで実行するように構成されます。
USERS	USERS01.DBF	データベース・ユーザーにより作成されたデータベース・オブジェクトが格納されます。

Oracle Enterprise Manager Database Control を使用して、データベースで現在使用可能な表領域のリストを表示する手順は、次のとおりです。

1. Database Control にログインします。

関連項目： 5-2 ページの「Enterprise Manager Database Control へのアクセス」

2. 「管理」をクリックします。
3. 「管理」ページの「記憶域」セクションで「制御ファイル」をクリックします。

このデータベース・インスタンスに現在定義されているすべての表領域が含まれている表が表示されます。表領域の表示、変更および作成に Database Control を使用する方法の詳細を参照するには、「ヘルプ」をクリックしてください。

関連資料：

- 『Oracle Database 概要』の表領域、データファイルおよび制御ファイルに関する項
- 『Oracle Database 管理者ガイド』の表領域の管理に関する項とデータファイルおよび一時ファイルの管理に関する項
- 『Oracle Database 管理者ガイド』の UNDO 表領域の管理に関する項

REDO ログ・ファイルの特定

REDO ログは、オンライン REDO ログまたはアーカイブ REDO ログのいずれかです。オンライン REDO ログは、Oracle データファイルおよび制御ファイルに対するすべての変更を記録する複数の REDO ログ・グループのセットです。アーカイブ REDO ログは、オフラインの保存先にコピーされたオンライン REDO ログのコピーです。データベースが ARCHIVELOG モードで、自動アーカイブが使用可能な場合、アーカイブ・プロセスにより、各オンライン REDO ログがいっぱいになると、1 つ以上のアーカイブ・ログの保存先にコピーされます。

初期データベースおよびカスタム・データベースにはそれぞれ、`%ORACLE_BASE%\oradata\%DB_NAME` ディレクトリに 3 つの REDO ログ・ファイルがあります。REDO ログ・ファイルには、データベース・バッファ・キャッシュ内のデータに対する変更がすべて記録されます。インスタンスに障害が発生すると、Oracle Database では REDO ログ・ファイルを使用して、メモリー内で変更のあったデータがリカバリされます。

Oracle Enterprise Manager Database Control を使用して初期データベースの REDO ログ・ファイルを表示または変更する手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動し、Database Control にログインします。

関連項目： 5-2 ページの「[Enterprise Manager Database Control へのアクセス](#)」

2. 「管理」をクリックします。
3. 「管理」ページの「記憶域」セクションで「**REDO ログ・グループ**」をクリックします。
このデータベース・インスタンスに現在定義されている制御ファイルが含まれている表が表示されます。
4. 特定のグループに関連付けられた REDO ログ・ファイルの名前と場所を表示するには、そのグループを選択して「**表示**」をクリックします。
表領域の表示、変更および作成に Database Control を使用方法の詳細を参照するには、「**ヘルプ**」をクリックしてください。

関連資料：

- 『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』
- 『Oracle Database 管理者ガイド』のアーカイブ REDO ログの管理に関する項

制御ファイルの特定

初期データベースおよびカスタム・データベースには、`%ORACLE_BASE%\oradata\%DB_NAME%` ディレクトリに3つの制御ファイルがあります。データベースごとに3つ以上の制御ファイルを個別の物理ドライブに保持し、`CONTROL_FILES` 初期化パラメータを各制御ファイルが示されるように設定します。

制御ファイルは、データベースを起動して実行するために必要な管理ファイルです。制御ファイルには、データベースの物理構造が記録されます。たとえば、制御ファイルには、データベース名と、データベースのデータファイルおよび REDO ログ・ファイルの名前と場所が記録されています。

Oracle Enterprise Manager Database Control を使用して初期データベースの制御ファイルを表示または変更する手順は、次のとおりです。

1. Database Control にログインします。

関連項目： 5-2 ページの「[Enterprise Manager Database Control へのアクセス](#)」

2. 「管理」をクリックします。
3. 「管理」ページの「記憶域」セクションで「**制御ファイル**」をクリックします。

このデータベース・インスタンスに現在定義されている制御ファイルが含まれている表が表示されます。制御ファイルの使用およびバックアップの詳細を参照するには、「ヘルプ」をクリックしてください。

関連資料： この初期化パラメータ値の設定の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』の制御ファイルの管理に関する項を参照してください。

Windows での Oracle Database サービスについて

インストール後、データベースの作成時に、2つの主な Oracle サービスが自動的に開始されます。

- OracleServiceSID (Oracle Database サービス)
- OracleHOME_NAMETNSListener (Oracle Database リスナー・サービス)

Oracle Enterprise Manager Database Control をインストールすると、OracleDBConsoleSID サービスが自動的に開始されます。ただし、ネットワーク用の他のサービスやその他の個々のコンポーネントは、自動的に起動されない場合があります。

Oracle Database ソフトウェアの削除

この章では、Oracle のデータベース、インスタンスおよびソフトウェアの削除方法について説明します。Oracle コンポーネントを最初に削除する場合は、必ず Oracle Universal Installer を使用します。新規の Oracle インストールに関するインストールおよび構成の問題を回避するには、この章で説明する手順に従ってください。

この章の項目は次のとおりです。

- データベースからの Oracle HTML DB の削除
- Oracle Cluster Synchronization Services (CSS) の削除
- すべての Oracle Database コンポーネントの削除

関連資料：

- Oracle Real Application Clusters の削除については、『Oracle Real Application Clusters インストレーションおよび構成』を参照してください。
- Oracle HTML DB の削除については、『Oracle Database Companion CD インストレーション・ガイド』を参照してください。
- 個々の要件や制限については、コンポーネント固有のドキュメントを参照してください。

データベースからの Oracle HTML DB の削除

この項では、データベースを削除せずに、Oracle HTML DB スキーマ、シノニムおよびユーザーをデータベースから削除する方法について説明します。データベースを削除する場合は、この手順を実行する必要はありません。

Oracle Universal Installer を使用して Oracle HTML DB をその Oracle ホームから削除してから、Oracle HTML DB コンポーネントをデータベースから削除できます。次の手順を実行します。

1. SQL*Plus を使用して、SYS または SYSTEM など、権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
SQL> ALTER SESSION SET CURRENT_SCHEMA = flows_010500;  
SQL> EXEC wwv_flow_upgrade.drop_public_synonyms;  
SQL> ALTER SESSION SET CURRENT_SCHEMA = SYSTEM;  
SQL> DROP USER flows_010500 CASCADE;  
SQL> DROP USER flows_files CASCADE;  
SQL> DROP USER htmldb_public_user CASCADE;
```

Oracle Cluster Synchronization Services (CSS) の削除

Oracle Database を初めてインストールする場合は、Oracle Universal Installer によって、単一ノードの Oracle Cluster Synchronization Services (CSS) のサービスが構成され、開始されます。CSS サービスは、自動ストレージ管理 (ASM) インスタンスと、データベース・ファイルの記憶域に関して ASM インスタンスに依存するデータベース・インスタンスとの同期をとれるようにします。データベース・ファイルの記憶域メカニズムとして自動ストレージ管理を選択しない場合でも、サービスは構成され、開始されます。

記憶域オプションとして自動ストレージ管理を選択しない場合は、OracleCSService を削除できます。Oracle ホームを削除することなくこのサービスを削除する手順は、次のとおりです。

1. コマンドプロンプトを開きます。
2. 一時的に ORACLE_HOME 環境変数を設定します。次に例を示します。

```
set ORACLE_HOME=c:\oracle\product\10.1.0\db_1
```

3. localconfig バッチ・ファイルを、サービスを削除するための delete オプションとともに実行します。次に例を示します。

```
c:\oracle\product\10.1.0\db_1\bin\localconfig delete
```

注意： Oracle ホームを削除する場合は、この手順を実行する必要はありません。

関連項目：別の Oracle ホームを使用するようにサービスを構成する方法については、4-5 ページの「別の Oracle ホームからの Oracle Cluster Synchronization Services (CSS) の実行」を参照してください。

すべての Oracle Database コンポーネントの削除

Oracle Universal Installer を使用して、コンピュータ上のインベントリから Oracle コンポーネントを削除します。残りのコンポーネントは、後から手動で削除する必要があります。

インストール時に Oracle Universal Installer を終了していない場合を除き、Oracle ホームのファイルまたはディレクトリを、最初に Oracle Universal Installer を使用せずに、Windows のエクスプローラやコマンドプロンプトを使用して削除しないでください。そのように削除すると、Oracle ホームのコンポーネントは Oracle Universal Installer インベントリに登録されたままになります。手動で Oracle ホームのファイルを削除し、同じ Oracle ホームでインストールを試みると、選択したコンポーネントの一部またはすべてがインストールされないか、正しく構成されない可能性があります。

Oracle Universal Installer では、インストールが突然中断されると、インストールがインベントリに登録されません。ただし、ファイルは Oracle ホームにコピーされている可能性があります。これらのファイルは手動で削除し、インストールを再開します。

注意： Database Configuration Assistant (DBCA) を使用して、インスタンスと関連サービスを削除できます。Database Configuration Assistant については、『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』の、Oracle のインストールおよびデータベースの作成に関する項を参照してください。

この項では、次の手順について説明します。

1. [Oracle サービスの停止](#)
2. [Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除](#)
3. [残りの Oracle Database コンポーネントの手動削除](#)

Oracle サービスの停止

Oracle コンポーネントを削除する前に、まず Oracle のサービスを停止する必要があります。

Oracle サービスを停止する手順は、次のとおりです。

1. コントロールパネルの「サービス」を開きます。
 - Windows NT の場合：「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「サービス」を選択します。
 - Windows 2000 の場合：「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
 - Windows XP および Windows Server 2003 の場合：「スタート」メニューから、「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
2. Oracle のサービス (Oracle または Ora で始まる名前) が存在し、状態が「開始」である場合、各サービスを選択して、「停止」をクリックします。
3. 「閉じる」をクリックして、「サービス」ウィンドウを終了します。
4. コントロールパネルを終了します。

関連資料： サービス停止の詳細は、Microsoft のオンライン・ヘルプを参照してください。

Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除

Oracle Universal Installer を使用して対話モードでコンポーネントを削除する手順は、次のとおりです。

1. まず、6-4 ページの「Oracle サービスの停止」の手順に従います。
2. Oracle Universal Installer を起動します。「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。

Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面が表示されます。

3. 「製品の削除」ボタンをクリックします。
「インベントリ」画面が表示されます。
4. 削除するコンポーネントが見つかるまで、インストール済のコンポーネントのツリーを展開します。

たとえば、Enterprise Edition オプションでデータベースをインストールし、後から「カスタム」オプションで追加コンポーネントをインストールした場合、Oracle ホーム・コンポーネントを展開して、Oracle ホームにインストールされているすべてのコンポーネントを表示します。

5. 削除するコンポーネントを選択します。

6. 「削除」をクリックします。
「確認」画面が表示されます。
7. 「はい」をクリックして削除プロセスを開始し、選択したコンポーネントを削除します。

注意：一部のコンポーネントを削除すると、他のコンポーネントが正常に機能しなくなる可能性があるというメッセージが表示される場合があります。

コンポーネントがコンピュータから削除されると、削除されたコンポーネントのない「インベントリ」画面が表示されます。

8. 「閉じる」をクリックして、「インベントリ」画面を終了します。
9. 「取消」をクリックして、Oracle Universal Installer を終了します。
10. 「はい」をクリックして、終了を確認します。
11. Oracle Universal Installer の終了後、次の項に進んで残りの Oracle Database コンポーネントを削除します。

残りの Oracle Database コンポーネントの手動削除

Oracle Universal Installer では、すべての Oracle コンポーネントは削除されません。Oracle Universal Installer を使用して Oracle コンポーネントを削除した後、残ったレジストリ・キー、環境変数、「スタート」メニューのオプションおよびディレクトリを手動で削除する必要があります。

1. [自動ストレージ管理インスタンスの削除](#)
2. [Microsoft レジストリ エディタからの Oracle キーの削除](#)
3. [システム変数パスの更新](#)
4. [「スタート」メニューからの Oracle の削除](#)
5. [Oracle ディレクトリの削除](#)

注意：まれに、最初から Oracle Universal Installer を使用せずに、手動によりコンピュータから Oracle コンポーネントを完全に削除することで、システムの深刻な問題が解決することがあります。これはあくまでも最後の手段として行い、システムからすべての Oracle コンポーネントを削除する場合にかざられます。

自動ストレージ管理インスタンスの削除

データベースが削除されてから、Oracle ホームで実行中の自動ストレージ管理 (ASM) インスタンスを削除する手順は、次のとおりです。

1. コマンドプロンプトで、ORACLE_SID 環境変数を自動ストレージ管理インスタンスの SID に設定します。次に例を示します。

```
SET ORACLE_SID=+ASM
```

2. SQL*Plus を起動し、SYS ユーザーとして自動ストレージ管理インスタンスに接続します。

```
SQLPLUS SYS/sys_password AS SYSDBA
```

3. 次のコマンドを入力して、自動ストレージ管理インスタンスを使用中の Oracle データベース・インスタンスがあるかどうかを判断します。

```
SQL> SELECT INSTANCE_NAME FROM V$ASM_CLIENT;
```

このコマンドを実行すると、この自動ストレージ管理インスタンスを使用中のデータベース・インスタンスがすべて表示されます。コマンドで表示されるのは、実行中のデータベース・インスタンスのみです。自動ストレージ管理インスタンスには、実行中でない他のインスタンスが関連付けられている可能性があります。

この Oracle ホームからデータベースを削除しても、コマンドの出力にこの自動ストレージ管理インスタンスが他の Oracle ホームにあるデータベース・インスタンスをサポートしていることが示される場合は、自動ストレージ管理インスタンスまたは Oracle ホームを削除しないでください。

4. 自動ストレージ管理インスタンスにデータベース・インスタンスが関連付けられていない場合は、このインスタンスに関連付けられているディスク・グループを削除します。

注意： 自動ストレージ管理ディスク・グループを削除すると、ディスク・デバイスが必要に応じて他の自動ストレージ管理インスタンスで使用可能になります。ただし、そのディスク・グループのデータはすべて失われます。ディスク・グループを削除する前に、そのデータを必要とするデータベース・インスタンスが他にないことを確認してください。

- a. 自動ストレージ管理インスタンスに関連付けられているディスク・グループを識別します。

```
SQL> SELECT NAME FROM V$ASM_DISKGROUP;
```

- b. 削除するディスク・グループごとに、次のようなコマンドを入力します。

```
SQL> DROP DISKGROUP disk_group_name INCLUDING CONTENTS;
```

5. 自動ストレージ管理インスタンスを停止し、SQL*Plus を終了します。

```
SQL> SHUTDOWN  
SQL> EXIT
```

6. コマンドプロンプトで次のコマンドを入力し、自動ストレージ管理サービスを削除します。

```
ORADIM -DELETE -ASMSID +ASM
```

関連項目：

- 1-19 ページの「自動ストレージ管理 (ASM)」
- 2-29 ページの「自動ストレージ管理 (ASM) 用ディスクの構成」

Microsoft レジストリ エディタからの Oracle キーの削除

Oracle Universal Installer では、インストール時に Oracle コンポーネント用の Windows サービスを作成しますが、削除時には Oracle Net Configuration Assistant および Database Configuration Assistant によって作成されたすべてのサービスを削除するわけではありません。また、Oracle Universal Installer では削除されないレジストリ エディタの他のキーがいくつかあります。次の各項のいずれかの手順に従い、存在するレジストリ・キーをすべて手動で削除する必要があります。

- Oracle Net Service レジストリ・キーのみの削除
- すべての Oracle レジストリ・キーの削除

注意： 自分の責任で Microsoft のレジストリ エディタを使用してください。レジストリ エディタを誤って使用すると、深刻な問題が発生し、オペレーティング・システムの再インストールが必要になる可能性があります。

Oracle Net Service レジストリ・キーのみの削除

Oracle Net Service レジストリ・エントリが存在する場合、そのエントリのみを削除する手順は、次のとおりです。

1. 管理者グループのメンバーとしてログインします。
2. まず、6-4 ページの「Oracle サービスの停止」の手順に従います。
3. 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択し、「名前」フィールドに次のコマンドを入力します。

```
regedt32
```

4. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services に移動し、OracleHOME_NAME¥TNSListener レジストリ・エントリを削除します。Oracle Universal Installer では、他のすべての Oracle Net サービスが自動的に削除されます。

5. レジストリ エディタを終了します。
6. コンピュータを再起動します。

すべての Oracle レジストリ・キーの削除

注意：これらの手順により、Oracle のコンポーネント、サービスおよびレジストリ・エントリがすべてコンピュータから削除されます。レジストリ・エントリを削除する際は、細心の注意を払ってください。間違ったエントリを削除すると、システムが機能しなくなる可能性があります。これらの手順を完了するまで、%ORACLE_HOME%\¥DB_NAME の下のデータベース・ファイルを削除しないでください。

Oracle レジストリ・キーをコンピュータから削除する手順は、次のとおりです。

1. 管理者グループのメンバーとしてログインします。
 2. まず、6-4 ページの「[Oracle サービスの停止](#)」の手順に従います。
 3. コマンドプロンプトでレジストリ エディタを起動します。
4. HKEY_CLASSES_ROOT に移動します。
 5. Ora、Oracle、Orcl または EnumOra で始まるキーを削除します。

このキーの集合には、次の文字列から始まるキーが含まれます。

- EnumOraHomes
- OracleConfig
- OracleDatabase
- OracleHome
- OracleInProcServer
- OracleProcess
- ORADC
- ORAMMCCFG10
- ORAMMCPMON10
- OraOLEDB
- OraPerfMon
- ORCLMMC

■ ORCLSSO

6. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE に移動します。
7. ORACLE Group キーを削除します。
8. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services に移動します。
9. このブランチの下の Oracle で始まるすべてのキーを削除します。
10. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥Eventlog¥Application に移動します。
11. このブランチの下の Oracle で始まるすべてのキーを削除します。
12. HKEY_CURRENT_USER に移動します。
13. ORACLE キーを削除します。
14. HKEY_CURRENT_USER¥Software に移動します。
15. Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Explorer¥MenuOrder¥Start Menu¥Programs の下にある Oracle-HOME_NAME エントリなど、すべての Oracle キーを削除します。
16. レジストリ エディタを終了します。
17. コンピュータを再起動します。

システム変数パスの更新

Path 環境変数を確認し、すべての Oracle エントリを削除します。

1. 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択し、「詳細」タブの「環境変数」を選択します。[Windows] キーを押しながら [Pause/Break] キーを押すと、コントロールパネルから「システム」プロパティを表示できます。
2. システム変数 Path を選択し、Path 変数を編集してすべての Oracle エントリを削除します。

たとえば、Path 変数で ORACLE_HOME を含む Oracle エントリを削除します。次のようなエントリを含む Path 変数があります。

```
C:¥oracle¥products¥10.1.0¥db_1¥bin;C:¥oracle¥products¥10.1.0¥db_1¥jre¥1.4.2¥bin¥client;C:¥oracle¥products¥10.1.0¥db_1¥jre¥1.4.2¥bin
```

3. すべての変更を保存し、コントロールパネルを終了します。

「スタート」メニューからの Oracle の削除

「スタート」メニューに Oracle エントリがないか確認し、あれば削除します。

Windows NT での手順は、次のとおりです。

1. マイ コンピュータまたはエクスプローラを使用して、`SYSTEM_DRIVE:\WINNT\Profiles\All Users\Start Menu\Programs` フォルダにナビゲートします。
2. 「Oracle - HOME_NAME」フォルダを削除します。

Windows 2000 および Windows XP コンピュータでの手順は、次のとおりです。

1. マイ コンピュータまたはエクスプローラを使用して、`SYSTEM_DRIVE:\Document and Settings\All Users\Start Menu\Programs` フォルダにナビゲートします。
2. 「Oracle - HOME_NAME」フォルダを削除します。

次の手順でも、Oracle メニューのエントリを削除できます。

1. 「スタート」ボタンを右クリックし、ポップアップ・メニューを表示します。
2. 「エクスプローラ - All Users」オプションを選択します。
3. 必要に応じて `Start Menu\Programs` フォルダを展開します。
4. 「Oracle - HOME_NAME」フォルダを削除します。

Oracle ディレクトリの削除

すべての Oracle レジストリ・キーを削除し、コンピュータを再起動した後、存在するすべての Oracle ディレクトリおよびファイルを削除します。

1. マイ コンピュータまたはエクスプローラを使用して、`SYSTEM_DRIVE:\program files\oracle` ディレクトリを削除します。
2. マイ コンピュータまたはエクスプローラを使用して、ハード・ドライブ上のすべての `ORACLE_BASE` ディレクトリを削除します。

Optimal Flexible Architecture

この付録では、Optimal Flexible Architecture (OFA) 標準について説明します。Optimal Flexible Architecture 標準は、ほとんどメンテナンスを必要としない信頼性の高い Oracle インストールを保証するために作成されたファイル・ネーミングおよび構成の一連のガイドラインです。

この付録の項目は次のとおりです。

- [Optimal Flexible Architecture 標準の概要](#)
- [Optimal Flexible Architecture に対する Oracle Database 10g 用の変更](#)
- [リリースによるディレクトリ・ツリーの相違](#)
- [Optimal Flexible Architecture ディレクトリのネーミング規則](#)
- [Optimal Flexible Architecture および複数の Oracle ホームの構成](#)
- [信頼性およびパフォーマンスの向上](#)
- [Windows と UNIX 上の Optimal Flexible Architecture の比較](#)

Optimal Flexible Architecture 標準の概要

Oracle Database のインストール時に、コンピュータでサポート可能な最大のアプリケーションの 1 つをインストールします。複数の Oracle ホームと Optimal Flexible Architecture を使用することで、大規模データベースを管理する際に多くの利点があります。Optimal Flexible Architecture 標準は、次の目的で設計されています。

- デバイスのボトルネックとパフォーマンスの低下を防止するために、ディスク上の大量の複雑なソフトウェアおよびデータを編成します。
- ソフトウェアとデータのバックアップなど、データを破損しがちな日常の管理作業を容易にします。
- 複数の Oracle データベース間での切替えを容易にします。
- データベースの規模の拡大を適切に管理します。
- データ・ディクショナリの空き領域の断片化を排除し、他の断片化部分を分離して、リソースの競合を最小限に抑えます。

Optimal Flexible Architecture は、Oracle のディレクトリおよびファイルをコンピュータに編成するときの推奨される方法と考えることもできます。インストール・メディアで配布されている Oracle コンポーネントはすべて Optimal Flexible Architecture 準拠であり、Oracle Universal Installer では、Oracle コンポーネントを Optimal Flexible Architecture のガイドラインに従ったディレクトリの場所に配置します。Optimal Flexible Architecture の使用は必要条件ではありませんが、データベースのサイズが拡大する場合、あるいは複数のデータベースを持つ計画の場合は、Optimal Flexible Architecture の使用をお勧めします。

Optimal Flexible Architecture の目的は、異なるリリースの Oracle ソフトウェアおよび規模が大きくなる複数のデータベースがコンピュータに存在する場合に発生する様々な問題を防ぐことにあります。

Oracle Universal Installer では、Oracle ソフトウェアの実行可能ファイルはデータベース・ファイルとは別にインストールされるようになっています。以前は、データベース・ファイルは、Oracle ソフトウェアが格納される Oracle ホーム・ディレクトリのサブディレクトリである `%ORACLE_HOME%\database` に配置されました。

Optimal Flexible Architecture を使用して、Oracle Universal Installer では Oracle ソフトウェアを `ORACLE_HOME` に、データベース・ファイルを `%ORACLE_BASE%\oradata` に配置します。データベースを最新リリースにアップグレードすると、新規の Oracle ソフトウェアの実行可能ファイルは別の Oracle ホーム・ディレクトリに配置されるようになりました。アップグレードが成功したと判断できたら、データベースが存在しない旧 Oracle ホーム・ディレクトリは、簡単に削除し、領域を解放することができます。

Optimal Flexible Architecture 準拠インストールの特性

Optimal Flexible Architecture 準拠のデータベースには、次の特性があります。

- 独立したサブディレクトリ
ファイルのカテゴリが、独立したサブディレクトリに分けられているため、あるカテゴリのファイルに対する操作が他のカテゴリのファイルにおよぼす影響を最小限に抑えられます。
- データベース・ファイルの一貫性のあるネーミング規則
データベース・ファイルを、他のすべてのファイルと簡単に区別できます。あるデータベースのファイルを、別のデータベースのファイルと簡単に区別できます。データファイル、**REDO ログ・ファイル**および**制御ファイル**は簡単に識別できます。データファイルは、特定の**表領域**に明確に関連付けられています。
- Oracle ホーム・ディレクトリの整合性
Oracle ホーム・ディレクトリを参照するアプリケーションを修正することなく、このディレクトリを追加、移動または削除できます。
- データベースごとの管理情報の分離
あるデータベース管理情報を別のデータベースの管理情報と区別できることで、管理データの編成および格納に適した構造が実現できます。
- 表領域の内容の分離
表領域の空き領域の断片化や I/O 要求の競合が最小限に抑えられる一方で、管理の柔軟性が最大限に活かされます。
- 全ディスクにわたる I/O 負荷の調整
すべてのディスクにわたって I/O 負荷が調整され、必要に応じて、RAW デバイスに Oracle データを格納するディスクも調整されます。

Optimal Flexible Architecture に対する Oracle Database 10g 用の変更

旧リリースの Oracle Database では、Optimal Flexible Architecture 推奨の Oracle ホームのパスは次のようなものでした。

```
c:\¥oracle¥ora92
```

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) では、Optimal Flexible Architecture 推奨の Oracle ホームのパスが変わりました。Optimal Flexible Architecture 推奨のパスは次のようになりました。

```
c:\¥oracle¥product¥10.1.0¥type_n
```

この例で、`type` は、Oracle Database (db) や Oracle Database Client (client) などの Oracle ホームのタイプです。また、`n` はオプションのカウンタです。この構文には、次の利点があります。

- たとえば、同じ Oracle ベース・ディレクトリに同じリリース番号の異なる製品をインストールできます。

```
c:\¥oracle¥product¥10.1.0¥db_1  
c:\¥oracle¥product¥10.1.0¥client_1
```

- たとえば、同じ Oracle ベース・ディレクトリに同じ製品を複数回インストールできません。

```
c:\¥oracle¥product¥10.1.0¥db_1  
c:\¥oracle¥product¥10.1.0¥db_2
```

リリースによるディレクトリ・ツリーの相違

Optimal Flexible Architecture により Oracle データベースのディレクトリ・ツリーは変更されました。この項では、以前との相違について説明します。

トップレベルの Oracle ディレクトリ

Oracle⁸ⁱ リリース 8.1.5 より前のリリースをインストールすると、すべてのサブディレクトリはトップレベルの ORACLE_HOME ディレクトリ (デフォルトでは C:\¥orant) の下に配置されます。

Oracle⁸ⁱ リリース 8.1.5 以上の Optimal Flexible Architecture 準拠のデータベースをインストールすると、すべてのサブディレクトリは、トップレベルの ORACLE_HOME ディレクトリの下には作成されません。ORACLE_BASE という新しいトップレベル・ディレクトリが、X:\¥oracle¥product¥10.1.0 (X は任意のハード・ドライブ) の形式で作成されます。

ORACLE_BASE には、¥ORACLE_HOME ディレクトリ、¥oradata ディレクトリ (データベース・ファイル用) および ¥admin ディレクトリ (データベース管理ファイル用) が含まれません。

データベースのファイル名

Oracle8i リリース 8.1.5 より前のリリースでは、データベース・ファイルのファイル名には SID が含まれます。たとえば、最初の制御ファイルには、`ct11SID.ora` という名前が付き
ます。

Oracle8i リリース 8.1.5 からは、データベース・ファイルの名前には SID は含まれません。
たとえば、最初の制御ファイルの名前は、`control01.ct1` となります。特定のデータベ
ースのデータベース・ファイルはすべて、そのデータベース用の名前の付いた `DB_NAME` と
いうディレクトリの下にある `¥oradata` に配置されるため、ファイル名に SID を入れる必要は
ありません。

データベース・ファイル名拡張子

Oracle8i リリース 8.1.5 より前のリリースでは、すべてのデータベース・ファイルに、`.ORA`
という同じ拡張子が付きます。

Optimal Flexible Architecture 準拠のリリースでは、データベース・ファイルのファイル名
拡張子として `.ora` を付けるという規則は適用されません。データベース・ファイル名に
は、より意味のある拡張子が付けられるようになりました。拡張子は次のとおりです。

- `.ct1` は制御ファイル
- `.log` はログ・ファイル
- `.dbf` はデータファイル

Optimal Flexible Architecture ディレクトリのネーミング規則

Optimal Flexible Architecture では、正確な Oracle ホームと、一連のファイルに関連付けら
れたデータベース名を簡単に識別できるようにするディレクトリ・ネーミング規則が使用さ
れます。この項では、Optimal Flexible Architecture 準拠のデータベース・ディレクトリ・
ツリーのトップレベル・ディレクトリに使用されるネーミング規則について説明します。

- `ORACLE_BASE` ディレクトリ
- `ORACLE_HOME` ディレクトリ
- `ADMIN` ディレクトリ
- `ORADATA` ディレクトリ
- `DB_NAME` ディレクトリ

ORACLE_BASE ディレクトリ

ORACLE_BASE は、Oracle ディレクトリ・ツリーのルートです。Oracle Universal Installer のデフォルト設定を使用して Optimal Flexible Architecture 準拠のデータベースをインストールした場合、ORACLE_BASE は X:¥oracle¥product¥10.1.0 (X は任意のハード・ドライブ) です。

Oracle Database for Windows を Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータにインストールする場合は、Oracle Universal Installer を実行する前に ORACLE_BASE を変更できます。ほとんどのユーザーには、この変更は必要ありません。

Oracle Universal Installer を初めて実行した後は、ORACLE_BASE の値を変更しないでください。既存の ORACLE_BASE があり、それを変更すると、Oracle のベース・ディレクトリの競合が生じます。元の ORACLE_BASE がすでに存在する場合に、別の ORACLE_BASE を作成すると、一部のツールやデータベースで、以前に作成されたファイルを見つけれなくなります。これらのツールやデータベースでは、元の ORACLE_BASE ではなく、新規の ORACLE_BASE でファイルを探します。

関連資料： 環境変数の編集の手順については、使用しているオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

ORACLE_HOME ディレクトリ

¥ORACLE_HOME ディレクトリは X:¥ORACLE_BASE (X は任意のハード・ドライブ) の下にあり、Oracle ソフトウェア実行可能ファイルやネットワーク・ファイル用のサブディレクトリが含まれます。

Oracle Database for Windows を他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータにインストールし、デフォルトの設定を使用する場合、作成する最初の Oracle ホーム・ディレクトリは ¥db_1 となります。

ADMIN ディレクトリ

データベース管理ファイルは、%ORACLE_BASE%¥admin¥DB_NAME のサブディレクトリに格納されます。これらのサブディレクトリの名前および簡単な説明の一部は、次のとおりです。

¥bdump	-- バックグラウンド・プロセスのトレース・ファイル
¥cdump	-- コア・ダンプ・ファイル
¥create	-- データベース作成ファイル
¥exp	-- データベース・エクスポート・ファイル
¥pfile	-- 初期化パラメータ・ファイル
¥udump	-- ユーザーの SQL トレース・ファイル

ORADATA ディレクトリ

データベース・ファイルは、%ORACLE_BASE%\ORADATA\%DB_NAME に格納されます。これらのファイルの名前と説明は、次のとおりです。

```
CONTROL01.CTL    -- 制御ファイル 1
CONTROL02.CTL    -- 制御ファイル 2
CONTROL03.CTL    -- 制御ファイル 3
EXAMPLE01.DBF    --EXAMPLE 表領域データファイル
SYSAUX01.DBF     --SYSAUX 表領域データファイル
SYSTEM01.DBF     --SYSTEM 表領域データファイル
TEMP01.DBF       --TEMP 表領域データファイル
USERS01.DBF      --USERS 表領域データファイル
*.dbf            -- データベース内の各表領域に対応するデータファイル
REDO01.LOG       --REDO ログ・ファイル・グループ 1、メンバー 1
REDO02.LOG       --REDO ログ・ファイル・グループ 2、メンバー 1
REDO03.LOG       --REDO ログ・ファイル・グループ 3、メンバー 1
```

注意： このディレクトリ構造では、UNIX プラットフォームにおいてのみディスクのストライプ化が可能です。A-14 ページの「[Windows でのシンボリック・リンクのサポート](#)」を参照してください。

DB_NAME ディレクトリ

DB_NAME は、特定のデータベースの一意の名前で、データベース作成時に設定されます。その値は、[初期化パラメータ・ファイル](#)内のパラメータ DB_NAME に記録されます。このファイルは変更しないでください。

Optimal Flexible Architecture および複数の Oracle ホームの構成

次の各項では、Optimal Flexible Architecture および複数の Oracle ホームの様々な構成について説明します。

ORACLE_HOME ディレクトリの指定

Optimal Flexible Architecture 準拠のデータベースをインストールするには、Oracle Universal Installer の「パス」フィールドで Oracle ホーム・ディレクトリを指定する必要があります。パスの形式は次のとおりです。

```
X:¥[PATHNAME]¥oracle¥product¥10.1.0¥ORACLE_HOME
```

この例では、それぞれ次を意味します。

- X:¥ は任意のハード・ドライブです。たとえば、C:¥ となります。
- PATHNAME は、オプションのディレクトリ・パス名です。

- %oracle は、必須のディレクトリ・パス名で、インストール前にレジストリ・キー ORACLE_BASE の値を変更しなかった場合に必要です。
- ORACLE_HOME は、Oracle ホームの名前です。

Optimal Flexible Architecture 準拠の Oracle ホーム・ディレクトリの例は、次のとおりです。

- C:%test%oracle%product%10.1.0%db_1
- D:%oracle%product%10.1.0%db_1

デフォルトの Optimal Flexible Architecture データベースのインストール: 例

この例では、1つの Oracle ベース内にすべての Oracle ホームを作成する方法を示します。

1. 他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータに、Optimal Flexible Architecture をサポートする Oracle Database (Oracle Database 8.1.6 以上) をインストールし、Oracle ホームのデフォルトの設定 (c:%oracle%ora81 など) を確定します。
2. 別の Oracle ホームに、デフォルトの設定を確定して、Oracle Database (Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) など) をインストールします。

表 A-1 は、デフォルトの Optimal Flexible Architecture データベースの設定を示しています。

表 A-1 デフォルトの Optimal Flexible Architecture データベース設定

設定	値
ORACLE_BASE	C:%oracle%product%10.1.0 (すべての Oracle ホームで同じ)
Oracle ホーム 1	C:%oracle%product%10.1.0%db_1
Oracle ホーム 2	C:%oracle%product%10.1.0%db_2

デフォルト以外の Optimal Flexible Architecture データベースのインストール : 例 1

この例では、各 Oracle ホームが固有の Oracle ベースを持つように Oracle Database をインストールします。

1. 他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータに、Optimal Flexible Architecture をサポートする Oracle Database (Oracle Database 8.1.6 以上) をインストールし、デフォルトの Oracle Universal Installer の設定を最初の Oracle ホーム用に (たとえば、C:¥oracle¥ora81 から X:¥xyz へ) 変更します。
2. 2 番目の Oracle ホームに Oracle Database (Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) など) をインストールし、デフォルトの Oracle Universal Installer の設定を 2 番目の Oracle ホーム用に (たとえば、X:¥xyz から Y:¥abc へ) 変更します。

表 A-2 は、例 1 に対するデフォルト以外の Optimal Flexible Architecture データベースの設定を示しています。

表 A-2 デフォルト以外の Optimal Flexible Architecture データベースの設定 : 例 1

ディレクトリ	値
ORACLE_BASE	最初の Oracle ホームは X:¥xyz、2 番目の Oracle ホームは Y:¥abc
Oracle ホーム 1	X:¥xyz
Oracle ホーム 2	Y:¥abc

結果としてできるディレクトリ・ツリーは、次のようになります。

```
X:¥xyz                                -- Oracle ホーム 1
  ¥admin
    ¥DB_NAME1
    ¥DB_NAME2
  ¥bin
  ¥network
  ¥oradata
    ¥DB_NAME1
      CONTROL01.CTL
      CONTROL02.CTL
      CONTROL03.CTL
      EXAMPLE01.DBF
      SYSAUX01.DBF
      SYSTEM01.DBF
      TEMP01.DBF
      USERS01.DBF
      REDO01.LOG
      REDO02.LOG
      REDO03.LOG
```

```

        ¥DB_NAME2
Y:¥abc                                     -- Oracle ホーム 2
  ¥admin
    ¥DB_NAME1
    ¥DB_NAME2
  ¥bin
  ¥network
  ¥oradata
    ¥DB_NAME1
      CONTROL01.CTL
      CONTROL02.CTL
      CONTROL03.CTL
      EXAMPLE01.DBF
      SYSAUX01.DBF
      SYSTEM01.DBF
      TEMP01.DBF
      USERS01.DBF
      REDO01.LOG
      REDO02.LOG
      REDO03.LOG
    ¥DB_NAME2

```

デフォルト以外の Optimal Flexible Architecture データベースのインストール：例 2

この例では、各 Oracle ホームを固有のディレクトリにインストールしますが、これらはすべて同じ Oracle ベースを共有します。

1. 他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータに、Optimal Flexible Architecture をサポートする Oracle Database (Oracle Database 8.1.6 以上) をインストールし、デフォルトの Oracle Universal Installer の設定を最初の Oracle ホーム用に (たとえば、C:¥oracle¥ora81 から X:¥xyz¥oracle¥abc へ) 変更します。
2. Oracle Database をインストールし、デフォルトの Oracle Universal Installer の設定を 2 番目の Oracle ホーム用に (たとえば、C:¥oracle¥ora10 から X:¥pqr へ) 変更します。

表 A-3 は、例 2 に対するデフォルト以外の Optimal Flexible Architecture データベースの設定を示しています。

表 A-3 デフォルト以外の Optimal Flexible Architecture データベースの設定：例 2

設定	値
ORACLE_BASE	X:¥xyz¥oracle (どちらの Oracle ホームも同じ)

表 A-3 デフォルト以外の Optimal Flexible Architecture データベースの設定 : 例 2 (続き)

設定	値
Oracle ホーム 1	X:¥xyz¥oracle¥abc
Oracle ホーム 2	X:¥pqr

結果としてできるディレクトリ・ツリーは、次のようになります。

```
X:¥pqr                                --Oracle ホーム 2
  ¥bin
  ¥network
X:¥xyz
  ¥oracle                               -- 両方の Oracle ホームとも ORACLE_BASE
  ¥abc                                   --Oracle ホーム 1
    ¥bin
    ¥network
  ¥admin
    ¥DB_NAME1
      ¥adhoc
      ¥bdump
      ¥cdump
      ¥create
      ¥exp
      ¥pfile
      ¥udump
    ¥DB_NAME2
    ¥...
  ¥oradata
    ¥DB_NAME1
      CONTROL01.CTL
      CONTROL02.CTL
      CONTROL03.CTL
      EXAMPLE01.DBF
      SYSAUX01.DBF
      SYSTEM01.DBF
      TEMP01.DBF
      USERS01.DBF
      REDO01.LOG
      REDO02.LOG
      REDO03.LOG
    ¥DB_NAME2
```

信頼性およびパフォーマンスの向上

Optimal Flexible Architecture の目的の 1 つは、I/O の負荷を異なる物理ドライブに分散させて、信頼性およびパフォーマンスを高めることです。それには、次の 2 つの方法があります。

- ディスクのミラー化
- ディスクのストライプ化

ディスクのミラー化

Oracle Database のログ・ファイルとデータベース・ファイルは分離して、異なるレベルのハードウェア信頼性により処理できます。Oracle Database のログ・ファイルは、重複して格納されるために、第一に非常に信頼性の高いファイルです。データベース・ファイルと同様の信頼性の高いものにするには、ディスクのミラー化を使用して、すべてのデータを複製することが必要になる場合があります。

ディスクのミラー化には通常、複数の同一ドライブと、ハードウェア・コントローラまたは Windows のディスク アドミニストレータのいずれかが必要です。1 つのディスクに障害が発生した場合にも、消失したデータを他のディスクでリカバリできます。消失したデータのリカバリにディスクの 1 つを使用するには、ミラー化が解除されることがあります。ミラー化が解除された場合には、新しいミラーを構築する必要があります。

ディスクのミラー化は、ディスク・コントローラが提供する Redundant Array of Independent Disks (RAID) 構成のレベルの一部です。RAID レベルにより、冗長性の量が決まります。一部の RAID レベルではホット・スワッピング機能を使用でき、コンピュータの停止や機能低下なしに、不良ディスクから正常なディスクへの切替えが可能になります。

ディスクのストライプ化

データベースでの使用のためにディスクをどのように設定するかは、ディスクの数と使用可能なハード・ディスク・コントローラのタイプによって異なります。ハード・ディスク・コントローラでストライプ化とミラー化の両方がサポートされている場合は、ストライプ化がサポートされるようにコントローラを構成することをお勧めします。

一部のコントローラは、コントローラ・メーカーが作成した構成プログラムを呼び出すキーボード操作により、システム起動時に構成できます。コントローラを構成することにより、できるだけ多くのドライブを一緒にストライプ化することが目的です。各ストライプが、1 つの論理デバイスとなって現れます。

ストライプ化によって、パフォーマンスが大幅に向上します。ストライプ化されたドライブの領域は、すべて単一の論理ドライブとして表示されます。さらに、領域は、ストライプにおける全ディスクの領域のストライプを組み合わせることで使用されます。つまり、大きなファイルでは、最初のディスクの領域、次に 2 番目のディスクの領域という具合に、最後のディスクまで領域の一部を使用したら、また最初のディスクから領域を使用します。各ファ

イルは、ストライプ化されたすべてのディスクに分散させることができます。複数の CPU が、このようなファイルのデータに競合しないでランダムにアクセスできます。

ストライプ化をサポートするコントローラでは、通常キャッシングも提供しています。つまり、データは、コントローラに書き込み、当面ハード・ディスク上ではなく、記憶域にキャッシュし、保存できます。読み取られたデータは、同様の方法でコントローラにキャッシュされます。Oracle Database では、すべてのデータベース読取りがすでに**システム・グローバル領域** (SGA) にキャッシュされているため、読取りのキャッシングは使用しないでください。初期化パラメータ・ファイル (init.ora) 内の DB_CACHE_SIZE パラメータの値により、SGA で使用できるバッファ・サイズが決まります。また、この値により、Oracle Database は起動時に構成されます。

注意：

- 読取りキャッシングは無効にしてください。
 - ディスク書き込みキャッシングは、Oracle のデータファイルおよび REDO ログ・ファイルが格納されているディスクでは無効にしてください。これらのディスクでは、電源障害やオペレーティング・システムの障害発生時に、書き込みキャッシュの内容がディスクにフラッシュされません。詳細は、ベンダーのドキュメントを参照してください。
-
-

表領域に対する RAW パーティションの使用

RAW パーティションとは、最低限のレベルでアクセスされる物理ディスクの一部です。RAW パーティションの I/O では、ファイル・システムを含むパーティションの I/O と比べて、パフォーマンスが約 5～10% 向上します。したがって、表領域のファイルには、**RAW パーティション**を使用することをお勧めします。

Windows と UNIX 上の Optimal Flexible Architecture の比較

Windows と UNIX での Optimal Flexible Architecture の実装方法は同じです。ただし、次の点で違いがあります。

- [ディレクトリ・ネーミング](#)
- [ORACLE_BASE ディレクトリ](#)
- [Windows でのシンボリック・リンクのサポート](#)

関連資料： UNIX での Optimal Flexible Architecture については、UNIX オペレーティング・システム固有の管理者向け資料を参照してください。

ディレクトリ・ネーミング

Optimal Flexible Architecture ディレクトリ・ツリーのトップレベルの名前は、Windows と UNIX で異なります。ただし、主要なサブディレクトリとファイル名は、どちらのオペレーティング・システムでも同じです。

ORACLE_BASE ディレクトリ

Windows では、ORACLE_BASE は、Oracle ホーム・ディレクトリに関連付けられます。ORACLE_BASE は、レジストリ (HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE¥KEY_HOME_NAME など) で定義されます。

UNIX では、ORACLE_BASE は、UNIX ユーザーの環境に関連付けられます。

Windows でのシンボリック・リンクのサポート

Optimal Flexible Architecture の目的は、すべての Oracle ソフトウェアを 1 つの ORACLE_BASE ディレクトリの下に置き、データベースのサイズが大きくなるに従い、異なる物理ドライブにファイルを分散させることにあります。

UNIX では、すべてが同じハード・ドライブの 1 つのディレクトリにあるように見えますが、シンボリック・リンクが作成されている場合や、そのディレクトリがマウント・ポイントとなっている場合には、ファイルを異なるハード・ドライブに置くことができます。

Windows では、現在のところシンボリック・リンクはサポートされていないため、データファイルが UNIX のように 1 つのディレクトリの下に表示されることはありません。かわりに、複数のドライブに oradata ディレクトリを持ち、各ディレクトリにデータファイルを格納できます。このようにして、データファイルがすべて 1 つのディレクトリに表示されなくても、Optimal Flexible Architecture を利用できます。

データベース管理ファイルの格納には 1 つの論理ドライブを使用し、必要に応じて、他のファイルを oradata¥DB_NAME ディレクトリにある他の論理ドライブに置くことをお勧めします。

次の例では、prod という名前のデータベース用に 4 つの論理ドライブがあります。

- C:¥には、Oracle ホームとデータベース管理ファイルがあります。
- F:¥には、REDO ログ・ファイルがあります。(F:¥ドライブは、パフォーマンス向上のためにストライプ化された 2 つの物理ドライブを表すこともあります。)
- G:¥には、制御ファイルの 1 つとすべての表領域ファイルがあります。(G:¥ドライブは、信頼性向上のために RAID レベル 5 構成を使用することもできます。)
- H:¥には、2 番目の制御ファイルがあります。

ディレクトリ構造は、次のようになります。

```
C:¥oracle¥product¥10.1.0 --1 番目の論理ドライブ
  ¥db_1 --Oracle ホーム
    ¥bin --Oracle バイナリ用のサブツリー
    ¥network --Oracle Net 用のサブツリー
    ¥...
  ¥admin -- データベース管理ファイル用のサブツリー
    ¥prod --prod データベース管理ファイル用のサブツリー
      ¥adhoc -- 非定型 SQL スクリプト
      ¥adump -- 監査ファイル
      ¥bdump -- バックグラウンド・プロセスのトレース・ファイル
      ¥cdump -- コア・ダンプ・ファイル
      ¥create -- データベース作成ファイル
      ¥exp -- データベース・エクスポート・ファイル
      ¥pfile -- 初期化パラメータ・ファイル
      ¥udump -- ユーザーの SQL トレース・ファイル

F:¥oracle¥product¥10.1.0 --2 番目の論理ドライブ (2 つの物理ドライブ、ストライプ化)
  ¥oradata --Oracle Database ファイル用のサブツリー
    ¥prod --prod データベース・ファイル用のサブツリー
      redo01.log --REDO ログ・ファイル・グループ 1、メンバー 1
      redo02.log --REDO ログ・ファイル・グループ 2、メンバー 1
      redo03.log --REDO ログ・ファイル・グループ 3、メンバー 1

G:¥oracle¥product¥10.1.0 --3 番目の論理ドライブ (RAID レベル 5 構成)
  ¥oradata --Oracle Database ファイル用のサブツリー
    ¥prod --prod データベース・ファイル用のサブツリー
      CONTROL01.CTL -- 制御ファイル 1
      EXAMPLE01.DBF --EXAMPLE 表領域データファイル
      SYSAUX01.DBF --SYSAUX 表領域データファイル
      SYSTEM01.DBF -- システム表領域データファイル
      TEMP01.DBF -- 一時表領域データファイル
      USERS01.DBF -- ユーザー表領域データファイル
```

```
H:¥oracle¥product¥10.1.0 --4 番目の論理ドライブ
¥oradata --Oracle Database ファイル用のサブツリー
¥prod --prod データベース・ファイル用のサブツリー
CONTROL02.CTL -- 制御ファイル 2
```

Oracle Database 拡張インストール

この付録では、拡張インストールについて説明します。

この付録の項目は次のとおりです。

- 非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール
- 異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールおよび使用

非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール

通常、Oracle Universal Installer は対話モードで実行されます。つまり、Graphical User Interface (GUI) 画面で情報の入力を要求されます。あるいは、非対話モードで Oracle Universal Installer を実行できます。非対話モードは、サイレント・モードまたはサイレント・インストールとも呼ばれます。

次のシナリオの場合、非対話モードを使用して Oracle Database をインストールします。

- Oracle Database を複数のノードに自動で配置する必要がある場合。オペレーティング・システム・スケジューラ、またはサイトで通常使用しているその他のジョブ・サブシステムから、非対話型インストール・モードをスケジュールできます。この方法は、多数の Oracle Database インストールを必要とする大規模サイトで特に役立ちます。
- ユーザーとの対話がない場合。
- 対話モードで Oracle Universal Installer を実行するグラフィカル機能が使用可能でない場合。(Oracle Universal Installer は、Windows では常に使用可能ですが、UNIX システムでは常に使用可能とはかぎりません。)

この項では、レスポンス・ファイルを使用して Oracle Universal Installer を非対話モードで実行する方法について説明します。

- [レスポンス・ファイルを使用した非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール](#)
- [サンプル・レスポンス・ファイルのカスタマイズ](#)
- [新規レスポンス・ファイルの作成](#)
- [Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定](#)

レスポンス・ファイルを使用した非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール

非対話モードを使用するには、レスポンス・ファイルを使用して Oracle Universal Installer を実行します。レスポンス・ファイルとは、インストール・プロセス中に Oracle Universal Installer で使用される変数および値が含まれているテキスト・ファイルです。Oracle には、カスタマイズできるサンプル・レスポンス・ファイルのセットが用意されています。また、インストールの選択内容を記録することにより、独自のレスポンス・ファイルを作成できます。

関連資料： レスポンス・ファイルの形式の詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』を参照してください。

サンプル・レスポンス・ファイルのカスタマイズ

表 B-1 は、「Oracle Database 10g Release 1 (10.1.0)」という CD の ¥Response ディレクトリにある使用可能なサンプル・レスポンス・ファイルを示しています。

表 B-1 レスポンス・ファイル

レスポンス・ファイル名	サイレント・モードで実行する対象
enterprise.rsp	Oracle Database の Enterprise Edition インストール・タイプ
standard.rsp	Oracle Database の Standard Edition インストール・タイプ
personal.rsp	Oracle Database の Personal Edition インストール・タイプ
custom.rsp	Oracle Database のカスタム・インストール・タイプ
dbca.rsp	Database Configuration Assistant
netca.rsp	Oracle Net Configuration Assistant

レスポンス・ファイルをコピーおよび変更する手順は、次のとおりです。

1. 「Oracle Database 10g Release 1 (10.1.0)」という CD の ¥Response ディレクトリから、適切なレスポンス・ファイルをハード・ドライブにコピーします。
2. 「スタート」メニューから、「プログラム」 → 「Oracle - HOME_NAME」 → 「Oracle Installation Products」 → 「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。
『Oracle Universal Installer Concepts Guide』が HTML 形式で表示されます。
3. レスポンス・ファイルと『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の指示に従って、テキスト・エディタを使用してレスポンス・ファイルを変更します。
4. B-5 ページの「Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定」の手順に従って、レスポンス・ファイルを実行します。

新規レスポンス・ファイルの作成

Oracle Universal Installer を対話モードで実行すると、インストールの選択内容をレスポンス・ファイルに記録できます。選択内容の記録は、Oracle Universal Installer を「記録」モードで実行することにより行います。Oracle Universal Installer は、「サマリー」ページの完了直後にレスポンス・ファイルを生成するため、レスポンス・ファイルを作成するために Oracle Database を実際にインストールする必要はありません。

非対話モードのインストール中に「記録」モードを使用する場合、Oracle Universal Installer は、元のソース・レスポンス・ファイルで指定された変数値を新規レスポンス・ファイルに記録します。

注意：「記録」モードを使用して、「基本」インストール・タイプに基づくレスポンス・ファイルを作成することはできません。

新規レスポンス・ファイルを作成する手順は、次のとおりです。

1. レスポンス・ファイルを作成しているコンピュータが、[第 2 章](#)で説明した要件を満たしていることを確認します。
2. コマンドプロンプトで、cd コマンドを使用して、Oracle Universal Installer 実行可能ファイル `setup.exe` が格納されているディレクトリに変更します。

インストール CD-ROM または DVD で、`setup.exe` は Disk 1 にあります。Oracle Universal Installer をすでにインストールされている Oracle Database から実行する場合、`setup.exe` は `%ORACLE_HOME%\oui\bin` にあります。

3. 次のコマンドを入力します。

```
setup -record -destinationFile response_file_name
```

`response_file_name` は、新規レスポンス・ファイルの完全パスに置き換えます。次に例を示します。

```
setup -record -destinationFile C:\response_files\install_oracle10g
```

4. Oracle Universal Installer が起動したら、インストールの設定を入力します。この設定はレスポンス・ファイルに記録されます。
5. 「サマリー」ページが表示されたら、次のいずれかを実行します。
 - 「インストール」をクリックしてインストールを続行します。
 - レスポンス・ファイルを作成するだけで、インストールを続行しない場合は、「取消」をクリックします。インストールは停止しますが、入力した設定はレスポンス・ファイルに記録されます。

その後、Oracle Universal Installer は、コマンドラインで指定されたパスとファイル名を使用して新規レスポンス・ファイルを保存します。

6. 必要に応じて、レスポンス・ファイルを実行するコンピュータの環境固有の変更をレスポンス・ファイルに加えます。
7. 次の「[Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定](#)」の手順に従って、レスポンス・ファイルを実行します。

Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定

レスポンス・ファイルを指定して、コマンドラインで Oracle Universal Installer を実行します。Oracle Universal Installer 実行可能ファイル `setup.exe` には、いくつかのオプションが用意されています。これらのオプションの完全なセットのヘルプ情報を表示するには、次のように `-help` オプションを指定して `setup.exe` を実行します。

```
C:¥%ORACLE_HOME%¥oui¥bin> setup.exe -help
```

Oracle Universal Installer を実行し、レスポンス・ファイルを指定する手順は、次のとおりです。

1. コマンドプロンプトを起動します。
2. Oracle Universal Installer がインストールされているディレクトリに移動します。
3. コマンドラインから、適切なレスポンス・ファイルを指定して、Oracle Universal Installer を実行します。次に例を示します。

```
C:¥%ORACLE_HOME%¥oui¥bin> setup.exe [-silent] [-nowelcome]
[-nowait] -responseFile filename
```

要素	説明
<code>filename</code>	レスポンス・ファイルのフル・パスを指定します。
<code>-silent</code>	サイレント・モードで Oracle Universal Installer を実行します。「ようこそ」画面は表示されません。 <code>-silent</code> を使用する場合、 <code>-nowelcome</code> は必要ありません。
<code>-nowelcome</code>	インストール時に表示される「ようこそ」画面が表示されません。
<code>-nowait</code>	サイレント・インストールが完了したら、コンソール・ウィンドウを閉じます。

関連資料：

- レスポンス・ファイルを使用したインストールの詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の Oracle 製品のインストールに関する項を参照してください。
- レスポンス・ファイルを使用した削除の詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の製品の削除に関する項を参照してください。

異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールおよび使用

この項では、次の機能について説明します。

- 異なる言語での [Oracle Universal Installer](#) の実行
- 異なる言語での [Oracle コンポーネントの使用](#)

異なる言語での Oracle Universal Installer の実行

Oracle Universal Installer は、デフォルトではオペレーティング・システムで選択した言語で実行されます。Oracle Universal Installer は、次の追加言語で実行できます。

- ポルトガル語（ブラジル）
- ドイツ語
- 日本語
- 中国語（簡体字）
- 中国語（繁体字）
- フランス語
- イタリア語
- 韓国語
- スペイン語

Oracle Universal Installer を異なる言語で実行する手順は、次のとおりです。

1. オペレーティング・システムの実行されている言語を変更します。たとえば、Windows 2000 の場合は次のようにします。
 - a. 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「地域のオプション」を選択します。
 - b. 「現在のユーザー設定」および「システムの言語設定」領域で、前述のリストにある言語を選択します。
 - c. 「OK」をクリックします。
2. 3-10 ページの「[Oracle Database ソフトウェアのインストール](#)」の手順に従って、Oracle Universal Installer を実行します。

注意： 選択した言語が NLS_LANG レジストリ・パラメータに割り当てられません。

異なる言語での Oracle コンポーネントの使用

Oracle コンポーネント（Oracle Net Configuration Assistant、Database Configuration Assistant など）で使用する言語として、他の言語を選択できます。これにより、Oracle Universal Installer の実行で使用される言語が変わるわけではありません。Oracle コンポーネントを選択した言語で実行するには、言語をオペレーティング・システムの言語設定と同じにする必要があります。オペレーティング・システムの言語は「コントロールパネル」の「地域の設定」ウィンドウで変更できます。

異なる言語でコンポーネントを使用する手順は、次のとおりです。

1. 3-10 ページの「[Oracle Database ソフトウェアのインストール](#)」の手順に従って、Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「インストール・タイプの選択」画面で、「**製品の言語**」ボタンを選択します。
「言語の選択」画面が表示されます。
3. 「使用可能な言語」フィールドから、Oracle コンポーネントで使用する言語を選択します。
4. 「>」を使用して言語を「選択された言語」フィールドに移動し、「**OK**」をクリックします。
5. インストールする製品を適宜選択し、「**次へ**」をクリックします。

インストールの完了後、インストールされたコンポーネントのダイアログ・ボックスの文字、メッセージおよびオンライン・ヘルプが、選択した言語で表示されます。

Oracle Database グローバリゼーション・サポート

この付録では、次のグローバリゼーション・サポートについて説明します。

- `NLS_LANG` パラメータ
- 一般に使用される `NLS_LANG` の値
- MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの `NLS_LANG` 設定

NLS_LANG パラメータ

Oracle では、グローバル化・サポートが提供されています。これによりユーザーは、NLS_LANG パラメータによって定義された各自の言語でデータベースと対話ができます。Oracle Database コンポーネントをインストールすると、Oracle Universal Installer により NLS_LANG パラメータがレジストリに設定されます。

オペレーティング・システムのロケール設定に基づいて、インストール時の NLS_LANG パラメータの値が決定されます。C-3 ページの表 C-1 に、オペレーティング・システムのロケール値と NLS_LANG 値のマッピングのリストを示します。

NLS_LANG パラメータは、HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE\HOMEID\NLS_LANG サブキーのレジストリに格納されています。ID は、Oracle ホームを識別する一意の番号です。

NLS_LANG パラメータは、次の形式です。

NLS_LANG = LANGUAGE_TERRITORY.CHARACTER_SET

この例では、それぞれ次を意味します。

パラメータ	説明
LANGUAGE	言語と、その言語でメッセージ、曜日、月を示すための規則を指定します。
TERRITORY	地域と、その地域で週数と日数を計算するための規則を指定します。
CHARACTER_SET	メッセージを表示するために使用されるキャラクタ・セットを制御します。

関連資料：

- 複数の Oracle ホームに対するサブキーの場所の詳細は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』を参照してください。
- NLS_LANG パラメータおよびグローバル化・サポートの初期化パラメータの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

一般に使用される NLS_LANG の値

表 C-1 は、様々なオペレーティング・システムのリケールに対して一般に使用される NLS_LANG 値の一覧です。

表 C-1 NLS_LANG パラメータの値

オペレーティング・システムの ロケール	NLS_LANG の値
アラビア語 (U.A.E.)	ARABIC_UNITED ARAB EMIRATES.AR8MSWIN1256
ブルガリア語	BULGARIAN_BULGARIA.CL8MSWIN1251
カタロニア語	CATALAN_CATALONIA.WE8MSWIN1252
中国語 (簡体字)	SIMPLIFIED CHINESE_CHINA.ZHS16GBK
中国語 (繁体字)	TRADITIONAL CHINESE_TAIWAN.ZHT16MSWIN950
クロアチア語	CROATIAN_CROATIA.EE8MSWIN1250
チェコ語	CZECH_CZECH REPUBLIC.EE8MSWIN1250
デンマーク語	DANISH_DENMARK.WE8MSWIN1252
オランダ語 (オランダ)	DUTCH_THE NETHERLANDS.WE8MSWIN1252
英語 (イギリス)	ENGLISH_UNITED KINGDOM.WE8MSWIN1252
英語 (アメリカ)	AMERICAN_AMERICA.WE8MSWIN1252
エストニア語	ESTONIAN_ESTONIA.BLT8MSWIN1257
フィンランド語	FINNISH_FINLAND.WE8MSWIN1252
フランス語 (カナダ)	CANADIAN FRENCH_CANADA.WE8MSWIN1252
フランス語 (フランス)	FRENCH_FRANCE.WE8MSWIN1252
ドイツ語 (ドイツ)	GERMAN_GERMANY.WE8MSWIN1252
ギリシア語	GREEK_GREECE.EL8MSWIN1253
ヘブライ語	HEBREW_ISRAEL.IW8MSWIN1255
ハンガリア語	HUNGARIAN_HUNGARY.EE8MSWIN1250
アイスランド語	ICELANDIC_ICELAND.WE8MSWIN1252
インドネシア語	INDONESIAN_INDONESIA.WE8MSWIN1252
イタリア語 (イタリア)	ITALIAN_ITALY.WE8MSWIN1252

表 C-1 NLS_LANG パラメータの値 (続き)

オペレーティング・システムの ロケール	NLS_LANG の値
日本語	JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS
韓国語	KOREAN_KOREA.KO16MSWIN949
ラトビア語	LATVIAN_LATVIA.BLT8MSWIN1257
リトアニア語	LITHUANIAN_LITHUANIA.BLT8MSWIN1257
ノルウェー語	NORWEGIAN_NORWAY.WE8MSWIN1252
ポーランド語	POLISH_POLAND.EE8MSWIN1250
ポルトガル語 (ブラジル)	BRAZILIAN_PORTUGUESE_BRAZIL.WE8MSWIN1252
ポルトガル語 (ポルトガル)	PORTUGUESE_PORTUGAL.WE8MSWIN1252
ルーマニア語	ROMANIAN_ROMANIA.EE8MSWIN1250
ロシア語	RUSSIAN_CIS.CL8MSWIN1251
スロバキア語	SLOVAK_SLOVAKIA.EE8MSWIN1250
スペイン語 (スペイン)	SPANISH_SPAIN.WE8MSWIN1252
スウェーデン語	SWEDISH_SWEDEN.WE8MSWIN1252
タイ語	THAI_THAILAND.TH8TISASCII
スペイン語 (メキシコ)	MEXICAN_SPANISH_MEXICO.WE8MSWIN1252
スペイン語 (ベネズエラ)	LATIN_AMERICAN_SPANISH_VENEZUELA.WE8MSWIN1252
トルコ語	TURKISH_TURKEY.TR8MSWIN1254
ウクライナ語	UKRAINIAN_UKRAINE.CL8MSWIN1251
ベトナム語	VIETNAMESE_VIETNAM.VN8MSWIN1258

MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定

SQL*Plus、SQL Loader、Import、Export などの Oracle Utilities を MS-DOS モードで使用する前に、そのセッションの NLS_LANG パラメータのキャラクタ・セット・フィールドを正しい値に設定していることを確認します。

いくつかの例外はありますが、MS-DOS モードでは、Windows (ANSI コードページ) とは異なるキャラクタ・セット (またはコードページ) を使用し、レジストリでは、デフォルトの Oracle ホームの NLS_LANG パラメータが常に該当する Windows コードページに設定されているため、このように正しい値の設定が必要になります。MS-DOS モード・セッションの NLS_LANG パラメータが適切に設定されていない場合、文字変換が正しく行われず、エラー・メッセージやデータが破損する可能性があります。

日本語、韓国語、中国語 (簡体字) および中国語 (繁体字) では、MS-DOS コードページは ANSI コードページと同一です。この場合、MS-DOS モードで NLS_LANG を設定する必要はありません。

同様に、バッチ・モードで、プロシージャで処理されるファイルのキャラクタ・セットに応じて、バッチ・プロシージャの開始時に、SET NLS_LANG コマンドを挿入し、NLS_LANG に正しいキャラクタ・セットの値を設定します。

表 C-2 は、様々なオペレーティング・システムのリケールに対して MS-DOS モードに対応する Oracle キャラクタ・セットの一覧です。

表 C-2 オペレーティング・システムのリケールに対する Oracle キャラクタ・セット

オペレーティング・システムのリケール	キャラクタ・セット
アラビア語	AR8ASMO8X
カタロニア語	WE8PC850
中国語 (簡体字)	ZHS16GBK
中国語 (繁体字)	ZHT16MSWIN950
チェコ語	EE8PC852
デンマーク語	WE8PC850
オランダ語	WE8PC850
英語 (イギリス)	WE8PC850
英語 (アメリカ)	US8PC437
フィンランド語	WE8PC850
フランス語	WE8PC850
ドイツ語	WE8PC850

表 C-2 オペレーティング・システムのロケールに対する Oracle キャラクタ・セット (続き)

オペレーティング・システムのロケール	キャラクタ・セット
ギリシア語	EL8PC737
ハンガリア語	EE8PC852
イタリア語	WE8PC850
日本語	JA16SJIS
韓国語	KO16MSWIN949
ノルウェー語	WE8PC850
ポーランド語	EE8PC852
ポルトガル語	WE8PC850
ルーマニア語	EE8PC852
ロシア語	RU8PC866
スロバキア語	EE8PC852
スロベニア語	EE8PC852
スペイン語	WE8PC850
スウェーデン語	WE8PC850
トルコ語	TR8PC857

関連資料： Oracle Internet Directory グローバリゼーション・サポートの問題、および Oracle Internet Directory 環境の各種コンポーネントとツールに必要な NLS_LANG 環境変数については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』のディレクトリにおけるグローバリゼーション・サポートに関する項を参照してください。

Oracle Database のポート番号の管理

Oracle Universal Installer では、インストール時に一連のデフォルト・ポート番号からコンポーネントにポート番号が割り当てられます。この付録では、デフォルトのポート番号を示し、割り当てられたポートをインストール終了後に変更する方法について説明します。この付録の項目は次のとおりです。

- [コンポーネントおよびポート範囲](#)
- [構成済のポートおよびアクセス URL](#)
- [Oracle Management Agent の HTTP ポートの変更](#)
- [Oracle Enterprise Manager Database Control ポートの変更](#)
- [iSQL*Plus ポートの変更](#)
- [Oracle Ultra Search ポートの変更](#)

コンポーネントおよびポート範囲

次の表は、インストール時に構成されるコンポーネントにより使用されるポート範囲を示しています。デフォルトでは、範囲内で使用可能な先頭のポートがコンポーネントに割り当てられます。

コンポーネント	ポート範囲
Oracle Management Agent	HTTP: 1830 ~ 1849
Oracle Enterprise Manager Database Control	HTTP: 5500 ~ 5519 RMI: 5520 ~ 5539 JMS: 5540 ~ 5559
iSQL*Plus	HTTP: 5560 ~ 5579 RMI: 5580 ~ 5599 JMS: 5600 ~ 5619
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	HTTP: 2030 ~ 2049
Oracle Ultra Search	HTTP: 5620 ~ 5639 RMI: 5640 ~ 5659 JMS: 5660 ~ 5679

構成済のポートおよびアクセス URL

Oracle Database のインストール時に、`portlist.ini` ファイルと `readme.txt` ファイルが作成されます。これらのファイルは、`%ORACLE_HOME%\install` にあります。`readme.txt` ファイルには、インストール済の J2EE Web アプリケーションのアクセス URL が、`portlist.ini` ファイルには、アプリケーションの構成済ポートが記載されています。

Oracle Management Agent の HTTP ポートの変更

Oracle Management Agent の HTTP ポートを変更するには、
`%ORACLE_HOME%\host_sid\sysman\config\emd.properties` ファイルを次のパラ
 メータで変更します。

```
EMD_URL=http://host.domain:1830/emd/main
```

Oracle Enterprise Manager Database Control ポートの変更

次の各項では、Oracle Enterprise Manager Database Control ポートの変更方法について説明
 します。

HTTP ポートの変更

HTTP ポートを変更するには、次のファイルを編集します。

- `%ORACLE_HOME%\host_sid\sysman\config\emoms.properties`

ファイル内の次のパラメータを変更します。

```
oracle.sysman.emSDK.svlt.ConsoleServerPort=5500
oracle.sysman.emSDK.svlt.ConsoleServerHTTPSPort=5500
```

- `%ORACLE_HOME%\host_sid\sysman\config\emd.properties`

ファイル内の次のパラメータを変更します。

```
REPOSITORY_URL=http://host.domain:5500/em/upload/
emdWalletSrcUrl=http://host.domain:5500/em/wallets/emd
```

- `%ORACLE_HOME%\oc4j\j2ee\OC4J_DBConsole_host_sid\config\http-web-site.xml`

Web サイト要素のポート属性を変更します。

```
<web-site port="5500" ...>
```

RMI ポートの変更

RMI ポートを変更するには、`%ORACLE_HOME%\oc4j\j2ee\OC4J_DBConsole_host_sid\config\rmi.xml` ファイルの `rmi-server` 要素のポート属性
 を変更します。

```
<rmi-server port="5520"...>
```

JMS ポートの変更

JMS ポートを変更するには、%ORACLE_HOME%\oc4j\j2ee\OC4J_DBConsole_host_sid\config\jms.xml ファイルの jms-server 要素のポート属性を変更します。

```
<jms-server port="5540"...>
```

iSQL*Plus ポートの変更

次の各項では、iSQL*Plus ポートの変更方法について説明します。

HTTP ポートの変更

HTTP ポートを変更するには、次のファイルを編集します。

- %ORACLE_HOME%\host_sid\sysman\config\emoms.properties

ファイル内の次のパラメータを変更します。

```
oracle.sysman.db.isqlplusUrl=http://host.domain:5560/isqlplus/dynamic
oracle.sysman.db.isqlplusWebDBAUrl=http://host.domain:5560/isqlplus/
dynamic
```

- %ORACLE_HOME%\oc4j\j2ee\isqlplus\config\http-web-site.xml

Web サイト要素のポート属性を変更します。

```
<web-site port="5560" ...>
```

RMI ポートの変更

RMI ポートを変更するには、%ORACLE_HOME%\oc4j\j2ee\isqlplus\config\rmi.xml ファイルの rmi-server 要素のポート属性を変更します。

```
<rmi-server port="5580"...>
```

JMS ポートの変更

JMS ポートを変更するには、%ORACLE_HOME%\oc4j\j2ee\isqlplus\config\jms.xml ファイルの jms-server 要素のポート属性を変更します。

```
<jms-server port="5600"...>
```

Oracle Ultra Search ポートの変更

次の各項では、Oracle Ultra Search ポートの変更方法について説明します。

HTTP ポートの変更

HTTP ポートを変更するには、%ORACLE_HOME%\oc4j\j2ee\OC4J_SEARCH\config\http-web-site.xml ファイルの web-site 要素のポート属性を変更します。

```
<web-site port="5620"...>
```

RMI ポートの変更

RMI ポートを変更するには、%ORACLE_HOME%\oc4j\j2ee\OC4J_SEARCH\config\rmi.xml ファイルの rmi-server 要素のポート属性を変更します。

```
<rmi-server port="5640"...>
```

JMS ポートの変更

JMS ポートを変更するには、%ORACLE_HOME%\oc4j\j2ee\OC4J_SEARCH\config\jms.xml ファイルの jms-server 要素のポート属性を変更します。

```
<jms-server port="5660"...>
```

Oracle Database のトラブルシューティング

この付録では、トラブルシューティングについて説明します。この付録の項目は次のとおりです。

- 要件の確認
- インストール・エラーが発生した場合の操作
- インストール・セッションのログの確認
- Configuration Assistant のトラブルシューティング
- 非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理
- インストール失敗後のクリーン・アップ

関連項目： 第 6 章「Oracle Database ソフトウェアの削除」

要件の確認

この付録に示すトラブルシューティングの手順を実行する前に、次を実行してください。

- **第2章「Oracle Database インストール前の要件」**をチェックし、システムが要件を満たしていることと、インストール前の作業をすべて完了していることを確認してください。
- 製品をインストールする前に、該当するプラットフォーム用の製品に関するリリース・ノートを参照してください。リリース・ノートは、Oracle Database インストール・メディアで提供されています。リリース・ノートの最新バージョンは、次の Oracle Technology Network Japan の Web サイトにあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

インストール・エラーが発生した場合の操作

インストール中にエラーが発生した場合は、次のように操作してください。

- Oracle Universal Installer を終了しないでください。
- インストール画面の1つに間違った情報を入力して「次へ」をクリックした場合は、「戻る」をクリックして元の画面に戻り、情報を訂正します。
- Oracle Universal Installer によるファイルのコピーまたはリンク中にエラーが発生した場合は、E-3 ページの「インストール・セッションのログの確認」を参照してください。
- Configuration Assistant の実行中にエラーが発生した場合は、E-3 ページの「Configuration Assistant のトラブルシューティング」を参照してください。
- 問題を解決できない場合は、E-5 ページの「インストール失敗後のクリーン・アップ」の手順に従って、失敗したインストールを削除してください。

インストール・セッションのログの確認

インストール中には、Oracle Universal Installer により実行されるすべてのアクションがログ・ファイルに記録されます。インストール中にエラーが発生した場合は、問題の原因と考えられる情報をログ・ファイルで確認してください。

SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle¥Inventory¥logs

この最初のインストールおよびその後のすべてのインストール中、Oracle Universal Installer により実行されるすべてのアクションがこのディレクトリのログ・ファイルに記録されます。インストール中にエラーが発生した場合は、問題の原因と考えられる情報をログ・ファイルで確認してください。

ログ・ファイル名は、次の形式になります。

installActionsdate_time.log

たとえば、インストールを 2004 年 5 月 14 日 9:00:56 A.M. に行った場合、ログ・ファイルは次のような名前になります。

installActions2004-05-14_09-00-56-am.log

注意：Inventory ディレクトリまたはその内容の削除や、手動での変更は行わないでください。これを行うと、Oracle Universal Installer でシステムにインストールする製品を見つけられなくなります。

Configuration Assistant のトラブルシューティング

Configuration Assistant の実行中に発生したインストール・エラーのトラブルシューティング方法は、次のとおりです。

- E-3 ページの「インストール・セッションのログの確認」に示したインストール・ログ・ファイルを確認します。
- %ORACLE_HOME%\cfgtoollogs ディレクトリにある特定の Configuration Assistant のログ・ファイルを確認します。エラーの原因となった問題を修正します。
- 「致命的エラー。再インストール」というメッセージが表示された場合は、ログ・ファイルを確認して問題の原因を調べます。手順の詳細は、E-4 ページの「致命的エラー」を参照してください。

Configuration Assistant の障害

Oracle Configuration Assistant の障害は、インストール画面の最下部に表示されます。追加情報がある場合は、Configuration Assistant インタフェースに表示されます。Configuration Assistant の実行ステータスは、installActionsdate_time.log ファイルに格納されません。

次の表に、実行ステータス・コードを示します。

ステータス	結果コード
Configuration Assistant の正常終了	0
Configuration Assistant の異常終了	1
Configuration Assistant の取消済	-1

致命的エラー

Configuration Assistant の実行中に致命的エラーが発生した場合は、次のようにします。

1. E-5 ページの「インストール失敗後のクリーン・アップ」の説明に従って、失敗したインストールを削除します。
2. 致命的エラーの原因を修正します。
3. Oracle ソフトウェアを再インストールします。

非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理

非対話型インストールが正常に実行されたかどうかを判断するには、`DRIVE_LETTER:¥Program Files¥Oracle¥Inventory¥logs` にある `installActionsdate_time.log` ファイルを調べます。

必要な場合は、前項を参照して Inventory ディレクトリの位置を確認してください。

サイレント・インストールは、次の場合に失敗します。

- レスポンス・ファイルを指定していない場合
- 不正または不完全なレスポンス・ファイルを指定している場合
- Oracle Universal Installer にディスク領域不足などのエラーが発生した場合

Oracle Universal Installer または Configuration Assistant は、実行時にレスポンス・ファイルの妥当性を検査します。妥当性検査が失敗すると、非対話型インストールまたは構成プロセスは終了します。コンテキスト、形式または型が不正な場合、そのパラメータ値は、ファイルに指定されていないとみなされます。

インストール失敗後のクリーン・アップ

インストールが失敗した場合は、インストール中に作成されたファイルを削除し、Oracle ホーム・ディレクトリを削除する必要があります。第 6 章「[Oracle Database ソフトウェアの削除](#)」の手順に従って、Oracle Universal Installer を実行し、Oracle Database の削除、Oracle ディレクトリの手動による削除、およびレジストリ エディタからの Oracle キーの削除を行います。その後、ソフトウェアを再インストールします。

用語集

listener.ora ファイル (listener.ora file)

次の項目を識別するためのリスナー用構成ファイル。

- リスナー名
- リスナーが接続要求を受け付けるプロトコル・アドレス
- リスニング対象のサービス

listener.ora ファイルは、%ORACLE_HOME%\network\admin ディレクトリにある。

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) では、サービス登録により、データベース・サービスを識別する必要がない。ただし、Oracle Enterprise Manager を使用する場合は、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) に静的なサービス構成が必要。

OP\$

オペレーティング・システム固有の頭字語。初期化ファイル・パラメータ OS_AUTHENT_PREFIX により、データベースに接続するユーザーを認証するために Oracle で使用される接頭辞をユーザーが指定できる。Oracle では、このパラメータの値をユーザーのオペレーティング・システム・アカウント名およびパスワードの前に連結する。接続要求が発行されると、Oracle では接頭辞の付いたユーザー名をデータベース内の Oracle ユーザー名と比較する。

このパラメータのデフォルト値は "" (NULL 文字列) で、そのためオペレーティング・システム・アカウント名には接頭辞が追加されない。旧リリースでは、OP\$ がデフォルト設定であった。

Oracle Net Foundation レイヤー (Oracle Net foundation layer)

クライアント・アプリケーションとサーバー間の接続の確立と維持、およびこれらの中でのメッセージ交換を行うネットワーク通信レイヤー。

ORACLE_BASE

ORACLE_BASE は、Oracle Database ディレクトリ・ツリーのルート。Oracle Universal Installer のデフォルト設定を使用して OFA 準拠のデータベースをインストールした場合、ORACLE_BASE は X:¥oracle¥product¥10.1.1.0 (X は任意のハード・ドライブで、C:¥oracle¥product¥10.1.1.0 などとなる)。

ORACLE_HOME

Oracle Database 製品が実行される環境に対応する。この環境には、インストール済製品のファイルの場所、製品のバイナリ・ファイルを指す PATH 変数、**レジストリ**・エントリ、**ネット・サービス名**およびプログラム・グループが含まれる。

OFA 準拠のデータベースをインストールする場合、Oracle Universal Installer のデフォルト設定を使用して、Oracle ホーム (このマニュアルでは ORACLE_HOME) は、X:¥ORACLE_BASE の下に置かれる。デフォルトの Oracle ホームは db_n (n は Oracle ホーム番号)。Oracle ホームには、Oracle Database ソフトウェアの実行可能ファイルやネットワーク・ファイル用のサブディレクトリが置かれる。「**Oracle ホーム**」も参照。

Oracle コンテキスト (Oracle Context)

相対識別名が cn=OracleContext のディレクトリ・サブツリーのルートで、すべての Oracle ソフトウェア情報が保持される。1つのディレクトリ内に1つ以上の Oracle コンテキストが存在する場合がある。Oracle コンテキストは、ディレクトリ・ネーミング・コンテキストと関連付けることができる。

Oracle コンテキストには、次の Oracle エントリを含めることができる。

- Oracle Net Services ディレクトリ・ネーミングとともに使用してデータベース接続を行う接続識別子
- Oracle Advanced Security とともに使用するエンタープライズ・ユーザー・セキュリティ

Oracle スキーマ (Oracle schema)

LDAP 準拠のディレクトリ・サーバーに格納できるものを決定する規則の集合。Oracle には、Oracle Net Services エントリなど、多くの Oracle エントリ・タイプに適用される独自のスキーマがある。Oracle Net Services エントリ用の Oracle スキーマは、エントリに含まれる属性を含む。

Oracle ホーム (Oracle home)

Oracle コンポーネントをインストールするディレクトリ・パス (C:¥oracle¥product¥10.1.1.0¥db_n など)。Oracle Universal Installer の「ファイルの場所の指定」画面の「パス」フィールドで、Oracle ホームの入力が要求される。「**ORACLE_HOME**」および「**Oracle ホーム名**」も参照。

Oracle ホーム名 (Oracle home name)

現行の Oracle ホームの名前 (Db_1 など)。各 Oracle ホームには、コンピュータ上の他のすべての Oracle ホームと区別するために名前が付いている。Oracle Universal Installer の「ファイルの場所の指定」画面の「名前」フィールドで、Oracle ホーム名の入力が必要される。

RAW パーティション (raw partitions)

最低限のディスク (ブロック) ・ レベルでアクセスされる物理ディスクの部分。

REDO ログ・ファイル (redo log file)

データベース・バッファ・キャッシュ内のデータに対する変更がすべて記録されるファイル。インスタンスに障害が発生すると、管理者は REDO ログ・ファイルを使用してメモリー内で変更のあったデータをリカバリできる。

SID

データベースをコンピュータにあるその他すべてのデータベースと区別する Oracle システム識別子。SID は、文字が 8 文字以上かまたはピリオドを入力しないかぎり、グローバル・データベース名のデータベース名部分 (たとえば、sales.us.mycompany.com の sales) に自動的にデフォルト設定される。デフォルト値は、そのまま確定することも、変更することもできる。

sqlnet.ora ファイル (sqlnet.ora file)

クライアントまたはサーバーの構成ファイルで、次のものを指定する。

- 修飾されていないサービス名またはネット・サービス名に追加するクライアント・ドメイン
- 名前を解決するときにクライアントにより使用されるネーミング・メソッドの順序
- 使用するロギング機能およびトレース機能
- 接続の経路
- 外部ネーミング・パラメータ
- Oracle Advanced Security パラメータ

sqlnet.ora ファイルは、%ORACLE_HOME%\network\admin ディレクトリにある。

Terminal Server

Windows NT Server 上の複数の同時クライアント・セッションに対するサポートを追加する Microsoft Windows シン・クライアントのターミナル・サーバー。Windows Terminal Server では、オペレーティング・システムの Graphical User Interface (GUI) を Oracle データベースのユーザーに提供する。

tnsnames.ora ファイル (tnsnames.ora file)

接続記述子にマップされるネット・サービス名を含む構成ファイル。このファイルは、ローカル・ネーミング・メソッド用に使用される。tnsnames.ora ファイルは、`%ORACLE_HOME%\network\admin` ディレクトリにある。

UNC

「[汎用命名規則](#)」を参照。

UNDO 表領域 (undo tablespace)

1つ以上の UNDO セグメントが含まれる表領域。UNDO 表領域には、他のタイプのセグメント（表、索引など）は作成できない。

自動モードの場合、各 Oracle インスタンスには、UNDO 表領域が1つのみ割り当てられる。各 UNDO 表領域は、一連の UNDO ファイルで構成される。UNDO ブロックは、エクステントに分けられる。エクステントはいつでも、トランザクション表に割り当てられている（使用されている）か、未使用かのいずれかである。

UNDO 表領域のブロックは、次のカテゴリに分類される。

- 領域管理に使用されるファイル制御ブロック、ビットマップ・ブロックなど
- トランザクション管理に使用されるトランザクション表ブロック、UNDO ブロックおよびエクステントマップ・ブロックを含む UNDO セグメント
- ファイル制御にも UNDO セグメントにも割り当てられていない空きブロック

インスタンス (instance)

実行中の Oracle Database インスタンスと関連付けられているプロセス。コンピュータのタイプに関係なく、データベース・サーバーでデータベースを起動すると、Oracle Database では**システム・グローバル領域**というメモリー領域を割り当て、1つ以上の Oracle Database プロセスを開始する。システム・グローバル領域と Oracle Database プロセスのこの組合せをインスタンスと呼ぶ。インスタンスのメモリーとプロセスにより、関連付けられたデータベースのデータが効率的に管理され、データベースのユーザーの要求に対応する。

インストール・タイプ (installation type)

インストールするコンポーネントを自動的に選択する事前定義のコンポーネント・セット。各最上位コンポーネントで使用可能なインストール・タイプのリストは、1-8 ページの「[Oracle Database のインストール・タイプ](#)」を参照。

オペレーティング・システム認証による接続 (operating system authenticated connections)

Oracle Database に接続するユーザーの認証に使用できる Windows ログイン接続情報。Windows 固有の認証には、次の利点がある。

- ユーザーはユーザー名やパスワードを入力しなくても、複数の Oracle Database に接続できる。
- Oracle Database のユーザー認証情報を Windows で一元管理することによって、Oracle Database でユーザー・パスワードを保管または管理する必要がない。

外部プロシージャ (external procedures)

C プログラミング言語で記述され、共有ライブラリに保存されているプロシージャまたはファンクション。Oracle サーバーは、PL/SQL ルーチンを使用して、外部プロシージャまたはファンクションをコールできる。Oracle Database が外部プロシージャに接続するには、サーバーをネット・ワーク・サービス名で構成し、**リスナー**をプロトコル・アドレスおよびサービス情報で構成する必要がある。

グローバル・データベース名 (global database name)

データベースをネットワーク・ドメインの他のデータベースから一意に区別する完全データベース名。

たとえば、次のようになる。

```
sales.us.mycompany.com
```

sales はデータベース名、us.mycompany.com はデータベースが置かれているネットワーク・ドメイン。

サービス登録 (service registration)

PMON プロセス (インスタンス・バックグラウンド・プロセス) が**リスナー**に情報を自動的に登録する機能。この情報はリスナーに登録されるため、**listener.ora ファイル**はこの静的情報で構成される必要がない。

サービス登録により、リスナーには次の情報が提供される。

- データベースの実行中の各インスタンスのサービス名
- データベースのインスタンス名
- 各インスタンスで使用可能なサービス・ハンドラ (ディスパッチャおよび専用サーバー)

これにより、リスナーがクライアントの要求を正しく送信できる。

- ディスパッチャ、インスタンスおよびノードのロード情報

これにより、リスナーがクライアントの接続要求を処理できる最良のディスパッチャを決定できる。すべてのディスパッチャがふさがっている場合、リスナーはその接続専用のサーバーを生成することができる。

この情報により、リスナーはクライアントの接続要求を処理するための最良の方法を決定できる。

システム・グローバル領域 (System Global Area)

1 つの Oracle Database **インスタンス** のデータおよび制御情報が含まれる共有メモリー構造のグループ。

システム識別子 (system identifier)

「**SID**」を参照。

自動 UNDO 管理モード (automatic undo management mode)

UNDO データが専用の **UNDO 表領域** に格納される Oracle Database のモード。 **手動 UNDO 管理モード** と異なり、ユーザーは UNDO 表領域の作成のみを管理する。他のすべての UNDO 管理は、自動的に実行される。

自動ストレージ管理 (Automatic Storage Management)

個々のディスク・デバイスの集合から 1 つのディスク・グループを作成できる。ディスク・グループ内の全デバイス間で、ディスクに対する I/O のバランスをとる。ストライプ化とミラー化も実行し、I/O パフォーマンスやデータの信頼性を向上させる。

修飾されていない名前 (unqualified name)

ネットワーク・ドメインを含まないネット・サービス名。

手動 UNDO 管理モード (manual undo management mode)

UNDO ブロックをユーザーが管理するロールバック・セグメントに格納するデータベース・モード。

初期化パラメータ・ファイル (initialization parameter file)

データベースおよび **インスタンス** の初期化に必要な情報を含む ASCII テキスト・ファイル。

制御ファイル (control file)

データベースの物理構造を記録し、データベース名、関連データベースとオンライン **UNDO 表領域** の名前および位置、データベース作成のタイム・スタンプ、現行ログ順序番号、およびチェックポイント情報が含まれるファイル。

接続記述子 (connect descriptor)

特別にフォーマットされた、ネットワーク接続のための宛先の記述。接続記述子は、宛先サービスおよびネットワーク経路情報を含む。

宛先サービスは、Oracle Database の場合はサービス名、リリース 8.0 またはバージョン 7 の Oracle データベースでは、Oracle システム識別子 (**SID**) を使用して表される。ネットワーク・ルートは、少なくとも、ネットワーク・アドレスを使用して **リスナー** の場所を示す。

接続識別子 (connect identifier)

接続記述子を解決する名前、ネット・サービス名またはサービス名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、接続識別子とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。たとえば、次のようにする。

```
SQL> CONNECT username/password@connect_identifier
```

ディレクトリ・サーバー (directory server)

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) 準拠のディレクトリ・サーバー。ディレクトリは集中化された記憶域を提供し、データベース・ネットワーク・コンポーネント、ユーザー・ポリシーおよびコーポレート・ポリシーの設定、ユーザーの認証およびセキュリティ情報を取り出し、クライアント側とサーバー側のローカル・ファイルを置き換える。

ディレクトリ・ネーミング (directory naming)

ネット・サービス名を接続記述子に解決するディレクトリ・サーバーを指定する **ネーミング・メソッド**。ネット・サービス名は、ディレクトリ・サーバーに一元的に保存される。

デフォルト・ドメイン (default domain)

ほとんどのクライアント要求が発生するネットワーク・ドメイン。クライアントが置かれるドメイン、またはクライアントがネットワーク・サービスを要求するドメインとなることがある。デフォルト・ドメインは、修飾されていないネットワーク名要求に追加されるドメインを決定するクライアント構成パラメータにもなる。"." 文字を含まない場合、名前要求は修飾されない。

ネーミング・メソッド (naming method)

クライアント・アプリケーションで、データベース・サービスへの接続の際、接続識別子をネットワーク・アドレスに解決するために使用される解決方法。Oracle Net Services は、次のネーミング・メソッドをサポートする。

- ローカル・ネーミング
- ディレクトリ・ネーミング
- ホスト・ネーミング
- 外部ネーミング

ネット・サービス名 (net service name)

接続記述子に解決されるサービスの単純名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、ネット・サービス名とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。

```
SQL> CONNECT username/password@net_service_name
```

必要に応じて、ネット・サービス名は次のような様々な場所に格納できる。

- 各クライアントのローカル構成ファイル (tnsnames.ora)
- ディレクトリ・サーバー
- 外部ネーミング・サービス (Network Information Service (NIS)、セル・ディレクトリ・サービス (CDS) など)

汎用命名規則 (Universal Naming Convention: UNC)

ネットワーク・ドライブをドライブ文字にマッピングせずに、ネットワーク上のファイルにアクセスする手段を提供する。UNC 名は、次のように構成される。

```
¥¥computer name¥share name¥filename
```

表領域 (tablespace)

データベース内の論理記憶域のユニット。表領域は、セグメントという記憶域の論理ユニットに分割され、セグメントはさらにエクステンツに分割される。

プロセス間通信 (Interprocess Communication: IPC)

クライアント・アプリケーションで使用されるプロトコルで、データベースとの通信のためにリスナーと同じノードに置かれる。IPC は、TCP/IP より高速なローカル接続を提供する。

プロトコル・アドレス (protocol address) ネットワーク・オブジェクトのネットワーク・アドレスを識別するアドレス。

接続が行われるとき、クライアントとその要求の受信者（リスナーまたは Oracle Connection Manager）は同じプロトコル・アドレスを使用して構成される。クライアントはこのアドレスを使用して接続要求を特定のネットワーク・オブジェクトの位置に送信し、受信者はこのアドレスで要求のリスニングを行う。クライアントと接続受信者に対して同じプロトコルをインストールし、同じアドレスを構成することが重要である。

リスナー (listener)

サーバーに常駐するプロセスで、クライアントからの接続要求のリスニング、およびサーバーへの通信量の管理を行う。

クライアントがデータベース・サーバーとのネットワーク・セッションを要求するときに、リスナーは実際の要求を受け取る。クライアント情報がリスナー情報と一致した場合、リスナーはデータベース・サーバーへの接続を許可する。

リポジトリ (repository)

Oracle Management Server からアクセス可能な Oracle データベースにある表の集合。Oracle Management Server では、すべてのシステム・データおよびアプリケーション・データ、環境全体に分散している管理対象ノードの状態についての情報、別にライセンスを受けられる管理パックに関する情報を格納するために、リポジトリが使用される。

レジストリ (registry)

コンピュータの構成情報を格納する Windows リポジトリ。

ローカル・ネーミング (local naming)

ネット・サービス名を接続記述子に解決する **ネーミング・メソッド**。この名前は、各クライアントの **tnsnames.ora ファイル** に構成および保存される。

索引

A

Administrators グループ, Oracle インストールの要件,
3-2
admin ディレクトリ, A-6
AL24UTFSS キャラクタ・セット
アップグレードの考慮事項, 1-25
ANONYMOUS 管理ユーザー名, 5-4
APPC 対応システム, 1-6
ASM, 「自動ストレージ管理」を参照
asmtoolg ユーティリティ, 2-34
ASM 用のディスクの構成, 2-33

B

BI 管理ユーザー名, 5-4

C

CD-ROM
ドライブ, インストール, 3-6
Character Set Scanner, 1-25
Cluster Ready Services (CRS)
Oracle Database より前のインストール, 3-4
インストールする場合, 2-40
Cluster Synchronization Services (CSS)
インストール後, 4-5
削除, 6-2
説明, 1-11
Configuration Assistant
トラブルシューティング, E-3
Configuration Assistant, トラブルシューティング,
E-3
CRS, 「Cluster Ready Services」を参照
CSS, 「Cluster Synchronization Services」を参照

CTXSYS 管理ユーザー名, 5-4
custom.rsp ファイル, B-3

D

DAS (直接接続ストレージ) ディスク, 2-33
Data Pump Export ユーティリティ, xix
Data Pump Import ユーティリティ, xix
Database Configuration Assistant (DBCA)
最小メモリーを搭載したコンピュータ, 3-3
新規データベースの作成, 4-10
トラブルシューティング, E-3
モード, 1-17
Database Control, 「Oracle Enterprise Manager
Database Control」を参照
Database Upgrade Assistant, 最小メモリーを搭載した
コンピュータ, 3-3
DB_DOMAIN パラメータ, 5-9
DB_NAME
ディレクトリ, 説明, A-7
パラメータ, 5-9
DBCA, 「Database Configuration Assistant」を参照
dbca.rsp ファイル, B-3
DBSNMP 管理ユーザー名
説明, 5-4
ユーザー・パスワード, 3-11
DCE Adapter Support, 2-9
DHCP コンピュータ, インストール, 2-10
DIP 管理ユーザー名, 5-4
DMSYS 管理ユーザー名, 5-4
DVD ドライブ, インストール, 3-6
Dynamic Host Configuration Protocol, 「DHCP」を参
照

E

- E-Business 統合ワークフロー, 1-5
- Enterprise Edition インストール・タイプ
説明, 1-8
- Enterprise Manager, 「Oracle Enterprise Manager」を
参照
- enterprise.rsp ファイル
説明, B-3
- Entrust PKI Support, 2-9
- example01.DBF データファイル, 5-11
- EXAMPLE 表領域
 - example01.DBF データファイル, 5-11
 - RAW デバイス, 2-37
 - 説明, 5-11
- EXAMPLE 表領域, インストールの「拡張」インス
トール方法, 1-9
- EXFSYS 管理ユーザー名, 5-4

G

- Generic Connectivity, 2-9
- Grid Control, 「Oracle Enterprise Manager Grid
Control」を参照

H

- hostname コマンド, 2-11
- HR 管理ユーザー名, 5-4

I

- IBM DRDA データベース, 接続, 1-6
- IBM MQSeries, 1-6
- IBM zOS, 接続, 1-7
- IBM メインフレーム・データ, 接続, 1-6
- installActions.log ファイル, E-3
- ipconfig コマンド, 2-11
- IP アドレス, 複数, 2-11
- iSQL*Plus
 - ポート, デフォルト, D-2
 - ポート, 変更, D-4
- iWay, 接続, 1-7
- IX 管理ユーザー名, 5-4

J

- Java Runtime Environment, 「JRE」を参照
- Java ライブラリ, インストール, 4-4
- JRE (Java Runtime Environment)
 - Oracle で使用されるバージョン, 1-12
 - 要件, 2-3

L

- LBACSYS 管理ユーザー名, 5-4
- listener.ora ファイル, 4-6
- LVM, 「論理ボリューム・マネージャ」を参照

M

- MDDATA 管理ユーザー名, 5-4
- MDSYS 管理ユーザー名, 5-4
- MGMT_VIEW 管理ユーザー名, 5-4
- Microsoft Internet Explorer, 2-9
- Microsoft SQL Server, Oracle Transparent Gateway,
2-42
- Microsoft SQL Server, Transparent Gateway, 2-9
- Microsoft SQL Server, 接続, 1-6
- Microsoft 管理コンソール
 - インストール後の作業, 4-7
 - 説明, 2-40
- Microsoft 管理コンソール用 Oracle スナップイン
 - Oracle と統合するためのインストール前の要件,
2-40
- Microsoft レジストリ エディタ, 「レジストリ エディ
タ」を参照
- Mozilla, 2-9
- MS-DOS モード, NLS_LANG パラメータの設定, C-5
- MTS, 「Oracle Services for Microsoft Transaction
Server」を参照

N

- nCipher Accelerator, 2-9
- Net Configuration Assistant, トラブルシューティン
グ, E-3
- Net Services Configuration Assistant, 最小メモリーを
搭載したコンピュータ, 3-3
- Net Services, 削除, 6-7
- netca.rsp ファイル, B-3
- Netscape Navigator, 2-9

NLS_LANG パラメータ
MS-DOS モードおよびパッチ・モードでの設定,
C-5
説明, C-2
地域およびキャラクタ・セットのデフォルト値,
C-3
NTFS のシステム要件, 2-3

O

OCI, 「Oracle Call Interface」を参照
ODM_MTR 管理ユーザー名, 5-5
ODM 管理ユーザー名, 5-5
ODP.NET, 「Oracle Data Provider for .NET」を参照
OEM, 「Oracle Enterprise Manager」を参照
OE 管理ユーザー名, 5-5
OFA, 「Optimal Flexible Architecture」を参照
OLAPSYS 管理ユーザー名, 5-5
OO4O, 「Oracle Objects for OLE」を参照
Optimal Flexible Architecture (OFA)
Oracle Database ディレクトリ・ツリー, 影響, A-4
Oracle ベース・ディレクトリ, A-14
Oracle ホーム・ディレクトリ, A-7
RAW パーティション, A-13
Windows と UNIX の相違, A-14
旧リリースとの相違, A-4
このリリースでの変更, A-4
シンボリック・リンク, A-14
説明, A-2
ディスクのストライプ化, A-12
ディスクのミラー化, A-12
ディレクトリ・ネーミング規則, A-5
デフォルト以外の Optimal Flexible Architecture
データベース 1, A-9
デフォルト以外の Optimal Flexible Architecture
データベース 2, A-10
デフォルトの Optimal Flexible Architecture データ
ベース, A-8
パフォーマンスの向上, A-12
標準, A-1
ORA_NLS10 環境変数, 4-10
Oracle Administration Assistant for Windows, xxii,
4-4
Oracle Administration Assistant for Windows NT,
「Oracle Administration Assistant for Windows」
を参照
Oracle Advanced Security, インストール前の要件,
2-39
Oracle Application Server, 1-4
Oracle Call Interface (OCI)
Instant Client の新機能, xix
Instant Client を使用したインストール, xix
Oracle Connection Manager, インストールのガイドラ
イン, 3-4
Oracle Counters for Windows Performance Monitor,
xxii
インストール後の作業, 4-5
インストールのガイドライン, 3-4
Oracle Data Provider for .NET (ODP.NET)
新機能, xix
リリース 9.2.0.4, xxiii
Oracle Database
Oracle アプリケーションとともにインストール,
1-5
Web アプリケーション開発ツール (HTML DB),
1-5
Web サーバー, 1-5
Windows ターミナル サービスのサポート, 2-8
アップグレード, 1-3
管理および監視, 1-4
自動ストレージ管理, 通信の構成, 4-10
自動ストレージ管理での要件, 2-31
データファイル・ディレクトリの作成, 2-28
データファイルの記憶域オプション, 2-25
必要な最小ディスク領域量, 2-27
他の Oracle コンポーネントとともにインストール,
1-2, 1-7
ワークフロー, 1-5
「インストール」、「インストール後」、「削除」、「要
件」も参照
Oracle Database Client, 1-2
Oracle Database Companion CD, インストール後の作
業, 4-11
Oracle Database Upgrade Assistant, 最小メモリーを搭
載したコンピュータ, 3-3
Oracle Database コンポーネント
Oracle Database Tools とともにインストール, 1-4
Oracle アプリケーションとともにインストール,
1-5
インストールの FAQ, 1-2, 1-2 ~ 1-7
管理および監視, 1-4
接続性の FAQ, 1-6

- Oracle Database コンポーネントのインストールのロードマップ, 1-2, 1-7
- Oracle Database ディレクトリ・ツリー, A-4
- Oracle Database のアドバンスド・キューイング, 4-4
- Oracle Demos, 「Oracle Examples」を参照
- Oracle Enterprise Integration Gateway, 2-9
- Oracle Enterprise Manager Database Control
 - REDO ログ・ファイルの表示, 5-12
 - アカウントのロック解除, 5-8
 - アクセス, 5-2
 - インストール後の作業, 4-10
 - インストール場所, xx
 - 初期化パラメータのリスト, 5-10
 - 制御ファイルの表示, 5-13
 - 説明, 1-22
 - パスワードの変更, 5-8
 - 表領域のリスト, 5-12
 - ポート, デフォルト, D-2
 - ポート, 変更, D-3
 - ログイン権限, 5-2
- Oracle Enterprise Manager Grid Control
 - インストール方法, 1-20
 - 説明, 1-20
- Oracle Enterprise Manager (OEM)
 - インストール前の要件, 2-39
 - オプション, 1-20
 - 事前構成済データベース, 1-21
 - ジョブ・システム, 正しい接続情報の設定, 4-9
 - 説明, 1-20
 - 通知, 「拡張」インストール方法からの構成, 1-9
 - 電子メール通知, 1-24
 - 配置, 1-20
- Oracle Examples, xxii
- Oracle Home Selector, 機能の場所, xx
- Oracle HTML DB, 1-5
- Oracle HTML DB, データベースからの削除, 6-2
- Oracle HTTP Server, 1-5
- Oracle *interMedia*, 4-4
- Oracle Internet Directory, 1-16
 - MS-DOS モードでのコマンドライン・ツールの実行, C-5
 - 削除, 6-7
- Oracle Java Virtual Machine (JVM), 4-4
- Oracle JVM, 4-4
- Oracle Label Security
 - インストール後の作業, 4-5
 - インストールのガイドライン, 3-5
- Oracle Managed Files の機能, 2-40
- Oracle Management Agent
 - HTTP ポート, 変更, D-3
 - インストール場所, 1-20
 - ポート, デフォルト, D-2
- Oracle Messaging Gateway, 2-9
- Oracle Messaging Gateway の機能, 4-4
- Oracle Net Services
 - インストール後の作業, 4-6
 - 既存のリスナーの停止, 2-39
 - 構成, 4-6
- Oracle Net Services Configuration Assistant, 最小メモリを搭載したコンピュータ, 3-3
- Oracle Objects for OLE
 - 新機能, xx
 - リリース 9.2.0.4, xxiv
- Oracle Open System Gateway, 2-9
- Oracle Procedural Gateway for APPC, 1-6
- Oracle Procedural Gateway, インストールのガイドライン, 3-5
- Oracle Provider for OLE DB, リリース 9.2.0.4, xxv
- Oracle Provider for OLE, 新機能, xxi
- Oracle Real Application Clusters
 - Cluster Synchronization Services のインストール, 1-11
 - アップグレードの要件, 1-25
- Oracle Real Application Clusters (RAC)
 - Cluster Ready Services, 2-40
 - Oracle Database より前のインストール, 3-4
 - Oracle Enterprise Manager とともにインストール, 1-4
 - Windows XP での要件, 2-9
 - アップグレードの要件, 1-25
 - インストール・タイプ, 1-8
 - 「拡張」インストール方法, 1-9
 - 要件, 2-40
- Oracle Scheduler, xxi
- Oracle Services for Microsoft Transaction Server
 - 新機能, xxii
 - ポート, デフォルト, D-2
- Oracle Technology Network Japan (OTN-J)
 - アクセス, 3-9
 - ソフトウェアのダウンロード, 3-9
- Oracle Text ナレッジ・ベース, 4-7
- Oracle Transparent Gateway
 - Microsoft SQL Server, 2-42
 - Sybase, 2-42

Teradata, 2-42
インストールのガイドライン, 3-5
要件, 2-41

Oracle Transparent Gateway for iWay, 1-7

Oracle Transparent Gateway for Microsoft SQL Server,
1-6

Oracle Transparent Gateway for Sybase, 1-6

Oracle Transparent Gateway for Teradata, 1-7

Oracle Ultra Search
ポート, デフォルト, D-2
ポート, 変更, D-5

Oracle Universal Installer (OUI)
8.1.5 より前のホームでのインストール制限事項,
1-12
インストールのガイドライン, 3-4
異なる言語でのコンポーネントの実行, B-7
異なる言語での実行, B-6
コンポーネントの削除, 6-3, 6-4
使用時のガイドライン, 3-4
使用に関するドキュメント, 1-12
説明, 1-12
非対話モードでの実行, B-2
ログ・ファイル, E-3

Oracle Utilities, MS-DOS モードでの設定, C-5

Oracle Windows Performance Monitor, 「Oracle
Counters for Windows Performance Monitor」を
参照

Oracle Windows サービス, 停止, 3-3

Oracle Workflow, 1-5

Oracle XML DB のインストール後の作業, 4-8

ORACLE_BASE ディレクトリ, 「Oracle ベース・ディ
レクトリ」を参照

ORACLE_HOME ディレクトリ, 「Oracle ホーム・
ディレクトリ」を参照

Oracle9i 言語および地域サポート, 4-10

Oracle アプリケーション
APPC 対応システム, 接続, 1-6
IBM DRDA データベース, 接続, 1-6
iWay, 接続, 1-7
Microsoft SQL Server, 接続, 1-6
Sybase データ, 接続, 1-6
Teradata, 接続, 1-7
分散, 1-6

Oracle アプリケーション, Oracle Database とともにイ
ンストール, 1-5

Oracle サービス, 停止, 6-4

Oracle ソフトウェアの再インストール, 3-5

Oracle ベース・ディレクトリ
UNIX での場所, A-14
Windows での場所, A-14
インストール, 1-13
説明, A-6

Oracle ホーム・ディレクトリ
Optimal Flexible Architecture, A-7
指定, A-7
説明, 1-13, A-6
単一 Oracle ホームのコンポーネント, 1-13
複数のホーム, 1-13, 2-11
複数のホームのサポート, 1-14

ORADATA ディレクトリ, 説明, A-7

ORDPLUGINS 管理ユーザー名, 5-5

ORDSYS 管理ユーザー名, 5-5

OTN-J, 「Oracle Technology Network Japan」を参照

OUI, 「Oracle Universal Installer」を参照

OUTLN 管理ユーザー名, 5-5

P

Personal Edition インストール・タイプ, 1-8

personal.rsp ファイル, B-3

PL/SQL
外部プロシージャのインストール後の作業, 4-8
モジュール, 妥当性チェック, 4-2

PM 管理ユーザー名, 5-5

portlist.ini ファイル, D-2

Procedural Gateway for APPC, 2-9

R

RAC, 「Oracle Real Application Clusters」を参照

RAID (Redundant Array of Independent Disks)
Oracle データファイルに使用, 2-26
推奨される ASM の冗長性レベル, 2-30
複数のディスク, 1-18

RAW デバイス
EXAMPLE 表領域, 2-37
REDO ログ・ファイル, 2-37
SPFILE, 2-38
SYSAUX 表領域, 2-37
SYSTEM 表領域, 2-37
TEMP 表領域, 2-38
UNDOTBS 表領域, 2-37
USERS 表領域, 2-37
構成, 2-36

- サーバー・パラメータ・ファイル, 2-38
- 制御ファイル, 2-37
- 説明, 1-20
- データファイルの記憶域オプション, 2-25
- パスワード・ファイル, 2-38
- RAW デバイスの構成, 1-9, 2-36
- RAW パーティション
 - 「RAW デバイス」も参照
- 構成, 2-36
- 説明, A-13
- RAW 論理ボリューム, 「RAW デバイス」を参照
- readme.txt ファイル, D-2
- Real Application Clusters, 「Oracle Real Application Clusters」を参照
- REDO ログ・ファイル
 - RAW デバイス, 2-37
 - 初期データベース, 5-12
- Redundant Array of Independent Disks, 「RAID」を参照
- root ユーザー, 3-11

S

- SAN (ストレージ・エリア・ネットワーク) ディスク, 2-33
- SCOTT 管理ユーザー名, 5-5
- Service Pack の要件, 2-5
- SERVICE_NAMES パラメータ, 5-9
- SH 管理ユーザー名, 5-5
- SI_INFORMTN_SCHEMA 管理ユーザー名, 5-5
- SPFILE, RAW デバイス, 2-38
- SQL*Plus
 - MS-DOS モードでの NLS_LANG パラメータの設定, C-5
 - パスワード, 5-7
- sqlnet.ora ファイル, Windows システム固有の認証の有効化, 4-10
- Standard Edition インストール・タイプ, 1-8
- standard.rsp ファイル, B-3
- Sybase, Oracle Transparent Gateway, 2-42
- Sybase, Transparent Gateway, 2-9
- Sybase データ, 接続, 1-6
- SYSAUX 表領域, RAW デバイス, 2-37
- SYSMAN 管理ユーザー名, 5-6
- SYSMAN ユーザー・パスワード, 3-11
- SYSTEM
 - RAW デバイスの表領域, 2-37

- 表領域, 説明, 5-11
- system01.dbf データファイル, 5-11
- SYSTEM 管理ユーザー名, 5-6
- SYSTEM ユーザー・パスワード, 3-11
- SYS 管理ユーザー名, 5-5
- SYS ユーザー・パスワード, 3-11

T

- TEMP
 - RAW デバイスの表領域, 2-38
 - 環境変数, ハードウェア要件, 2-4
 - 表領域 (temp01.dbf), 5-11
- temp01.dbf データファイル, 5-11
- Teradata, Oracle Transparent Gateway, 2-42
- Teradata, Transparent Gateway, 2-9
- Teradata, 接続, 1-7
- TMP 環境変数, ハードウェア要件, 2-4
- tmp ディレクトリ
 - 領域の解放, 2-4
 - 領域のチェック, 2-4
- tnsnames.ora ファイル, 4-6
- Transparent Gateway for IBM DRDA, 2-9
- Transparent Gateway for Microsoft SQL Server, 2-9
- Transparent Gateway for Sybase, 2-9
- Transparent Gateway for Teradata, 2-9

U

- UNDOTBS
 - RAW デバイスの表領域, 2-37
 - 表領域 (undotbs01.dbf), 5-11
- UNIX
 - Windows における Oracle のインストールとの相違点, 1-10
- USERS
 - RAW デバイスの表領域, 2-37
 - 表領域 (users01.dbf), 5-11
- UTF8 キャラクタ・セット, アップグレード, 1-25
- utlrlp.sql ファイル, 4-2

W

- Web アプリケーション, Oracle HTML DB, 1-5
- Web サーバー (Oracle HTTP Server), 1-5
- Web ブラウザ
 - Microsoft Internet Explorer, 2-9

Mozilla, 2-9
Netscape Navigator, 2-9
Web ブラウザのサポート, 2-9
Windows
ジョブ・システムの接続情報, 4-9
Windows Telnet サービスのサポート, 2-7
Windows XP, サポートされないコンポーネント, 2-9
Windows, Oracle インストールでの UNIX との相違点, 1-10
Windows ターミナル サービス
サポート, 2-8
サポートされないコンポーネント, 2-8
Windows と UNIX における Oracle のインストールの相違点, 1-10
WK_TEST 管理ユーザー名, 5-6
WKPROXY 管理ユーザー名, 5-6
WKSYS 管理ユーザー名, 5-6
WMSYS 管理ユーザー名, 5-6

X

XDB 管理ユーザー名, 5-6

あ

アカウント, 5-4
ANONYMOUS, 5-4
BI, 5-4
CTXSYS, 5-4
DBSNMP, 5-4
DIP, 5-4
DMSYS, 5-4
EXFSYS, 5-4
HR, 5-4
IX, 5-4
LBACSYS, 5-4
MDDATA, 5-4
MDSYS, 5-4
MGMT_VIEW, 5-4
ODM, 5-5
ODM_MTR, 5-5
OE, 5-5
OLAPSYS, 5-5
ORDPLUGINS, 5-5
ORDSYS, 5-5
OUTLN, 5-5
PM, 5-5

SCOTT, 5-5
SH, 5-5
SI_INFORMTN_SCHEMA, 5-5
SYS, 5-5
SYSMAN, 5-6
SYSTEM, 5-6
WK_TEST, 5-6
WKPROXY, 5-6
WKSYS, 5-6
WMSYS, 5-6
XDB, 5-6
アップグレード
AL24UTFSS キャラクタ・セット, 1-25
Oracle Real Application Clusters の要件, 1-25
アップグレード前のバックアップ, 3-3
「拡張」インストール方法, 1-9
考慮事項, 1-24
データベースのダウングレード, 1-26
アプリケーションベースのワークフロー, 1-5

い

一時ディスク領域
解放, 2-4
チェック, 2-4
一時ディレクトリ, 2-4
一般ドキュメント参照
Windows 固有の NLS_LANG 値, C-3
Windows 固有の NLS_TERRITORY 値, C-3
Windows 固有の REDO ログ・ファイルのサイズ, 5-12
Windows 固有の REDO ログ・ファイルの場所, 5-12
Windows 固有のパラメータ・ファイル名と場所, 5-10
インストール
8.1.5 より前のホームでのインストール制限事項, 1-12
CD-ROM ドライブ, 3-6
DVD ドライブ, 3-6
EXAMPLE 表領域, 「拡張」, 1-9
Oracle Database 製品の FAQ, 1-2 ~ 1-7
Oracle Technology Network Japan からのソフトウェアのダウンロード, 3-9
Oracle Universal Installer, 説明, 1-12
Oracle ソフトウェアの再インストール, 3-5
RAW デバイスの要件, 2-36

UNIX と Windows における Oracle のインストール
の相違点, 1-10
アップグレード, 1-3
アップグレードの考慮事項, 1-24
インストール後の作業, 4-1 ~ 4-11
インストール・セッションのログの確認, E-3
インストール・ソフトウェアへのアクセス, 3-6 ~
3-10
インストール前の考慮事項, 3-2 ~ 3-4
エラー
 Configuration Assistant 実行時, E-4
 ログ・セッション, E-3
ガイドライン, 3-11
概要, 1-1 ~ 1-26
カスタム, 1-9
完了, 3-12
旧 Oracle Installer 使用の制限事項, 1-12
クラスタ、インストールのガイドライン, 3-4
計画, 1-7
構成オプション, 説明, 1-17
個別のインストールが必要なコンポーネント, 1-14
コンピュータの別名, 複数, 2-12
コンポーネント固有のガイドライン, 3-4
自動ストレージ管理の要件, 2-31
タイプ, 1-8
単一 Oracle ホームのコンポーネント, 1-13
手順, 3-10 ~ 3-14
トラブルシューティング, E-1, E-5
非対話型でのエラー処理, E-4
非対話モード, B-2
別のファイル・システムでのデータベースの作成,
1-9
他のコンポーネント, 1-2, 1-7
ラップトップ, 2-12
リモート・アクセス・ソフトウェアでのリモート・
インストール, 3-8
リモート・インストール, CD-ROM ドライブ, 3-6
リモート・インストール, DVD ドライブ, 3-6
レスポンス・ファイル, E-4
ログ・ファイル, E-3
インストール後の作業, 4-1, 4-11
Cluster Synchronization Services, 4-5
Enterprise Manager のジョブ・システムの接続情報
の設定, 4-9
Microsoft 管理コンソール, 4-7
Oracle Administration Assistant for Windows, 4-4

Oracle Counters for Windows Performance
Monitor, 4-5
Oracle Database Companion CD, 4-11
Oracle Enterprise Manager Database Control, 使用
するためのデータベースの構成, 4-10
Oracle Java Virtual Machine, 4-4
Oracle Label Security, 4-5
Oracle Messaging Gateway の機能, 4-4
Oracle Net Services, 4-6
Oracle Text ナレッジ・ベース, 4-7
Oracle XML DB, 4-8
Oracle9i 言語および地域サポート, 4-10
Oracle コンポーネントの構成, 4-3
PL/SQL 外部プロシージャ, 4-8
共有サーバー・サポート, 4-8
ジョブ・システム, 4-9
データベースから自動ストレージ管理への通信,
4-10
パスワードの変更, 5-7
無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック, 4-2
インストール・ソフトウェア, アクセス, 3-6, 3-10
インストールのガイドライン, 3-11
インストール方法, 「基本」インストール方法、「拡張」
インストール方法を参照
インストール前
 Microsoft 管理コンソール用 Oracle スナップインの
 要件, 2-40
 Oracle Advanced Security の要件, 2-39
 Oracle Enterprise Manager の要件, 2-39
 サービスの停止, 3-3
 データベース・バックアップの実行, 3-3
 「要件」も参照
インストール前の考慮事項, 3-2, 3-4

え

エラー
 Configuration Assistant, E-3
 インストール, E-3, E-4
 非対話型インストール, E-4

か

外部冗長性
 自動ストレージ管理の冗長性レベル, 1-19
「拡張」インストールからのパスワード構成, 1-9
「拡張」インストール方法

最小メモリーを搭載したコンピュータ, 3-3
説明, 1-9
「基本」インストール方法」も参照
カスタム・インストール, 1-9
カスタム・データベース
ASM の障害グループ, 2-31
自動ストレージ管理を使用する場合の要件, 2-31
環境変数
ORA_NLS10, 4-10
TEMP および TMP, ハードウェア要件, 2-4

き

既存のサービスの停止, 2-39
機能
リリース 1 (10.1) の新機能, xvii ~ xxi
リリース 2 (9.2.0.4) の新機能, xxiii ~ xxv
「基本」インストール方法
最小メモリーを搭載したコンピュータ, 3-3
説明, 1-9
非対話型インストール, B-4
「拡張」インストール方法」も参照
キャラクタ・セット
AL24UTFSS, アップグレード, 1-25
UTF8, 1-25
アップグレード, 「拡張」インストール方法, 1-9
共有サーバー・サポート, 4-8

く

クラスタ
インストールのガイドライン, 3-4
「Oracle Real Application Clusters」も参照
クラスタ・ファイル・システム, データファイルの記憶域オプション, 2-25
グローバルゼーション・サポート, C-3
グローバル・データベース名, 定義, 5-9

け

言語
Oracle9i サポートのインストール後の作業, 4-10
異なる言語での Oracle コンポーネントのインストール, B-6
異なる言語での Oracle コンポーネントの使用, B-7
言語, Oracle コンポーネントのインストール, B-6

こ

高冗長性
自動ストレージ管理の冗長性レベル, 1-19
コンピュータ, ネットワーク化されていない, 2-12
コンポーネント
異なる言語での使用, B-7
手動削除, 6-8
単一 Oracle ホームのコンポーネントのインストール, 1-13
単一 Oracle ホーム用, 1-13
データベース, Oracle Internet Directory および Net Services のサービスとレジストリ・エントリの削除, 6-7

さ

サーバー・パラメータ・ファイル, RAW デバイス, 2-38
サービス, 停止, 2-39
サイト・インストール, 「非対話型インストール」を参照
削除
Oracle Universal Installer によるコンポーネントの, 6-3
Oracle コンポーネントの手動, 6-8
Oracle ソフトウェア, 6-1, 6-10
Oracle データベース, 6-1, 6-10
コンポーネントの手動, 6-5
自動ストレージ管理インスタンス, 6-6
データベース, Oracle Internet Directory および Net Services のサービスとレジストリ・エントリ, 6-7
データベースからの Oracle HTML DB, 6-2
レジストリ エディタの Oracle キー, 6-7
レジストリ エディタのキー, 6-7
サポートされないコンポーネント
Windows XP, 2-9
Windows ターミナル サービス, 2-8

し

システム要件
NTFS ファイル・システム, 2-3
事前構成済データベース
自動ストレージ管理のディスク領域要件, 2-31
自動ストレージ管理を使用する場合の要件, 2-31

自動ストレージ管理 (ASM)

- DAS ディスク, 2-33
- SAN ディスク, 2-33
- インスタンスの削除, 6-6
- 「拡張」インストール方法からの構成, 1-9
- 事前構成済データベースに必要な領域, 2-31
- 障害グループ, 2-30
 - 指定, 2-31
 - 特性, 2-31
 - 例, 2-31
- 冗長性レベル, 1-19
- 説明, 1-19
- 通信するための Oracle Database の構成, 4-10
- ディスク・グループ
 - 冗長性レベル, 2-30
 - 推奨事項, 2-30
- ディスクの構成, 2-29, 2-33
- データファイルの記憶域オプション, 2-25
- 障害グループ
 - 自動ストレージ管理, 2-30
 - 自動ストレージ管理での特性, 2-31
 - 自動ストレージ管理での例, 2-31
- 冗長性レベル
 - 事前構成済データベースの領域要件, 2-31
 - 自動ストレージ管理, 1-19
- 初期化パラメータ・ファイル
 - init.ora, 5-10
 - 説明, 5-10
 - データベース内, 5-10
- 初期データベース・アカウント, 5-4 ~ 5-6
- ジョブ・システム, 4-9
- 新機能 (リリース 1 (10.1)), xvii ~ xxi
- 新機能 (リリース 2 (9.2.0.4)), xxiii ~ xxv
- シンボリック・リンク, A-14
- 信頼性, 向上, A-12

す

- 推奨およびサポートされていないコンポーネント (リリース 1 (10.1)), xxiii
- ストレージ・エリア・ネットワーク・ディスク, 2-33

せ

- 制御ファイル
 - RAW デバイス, 2-37
 - 説明, 5-13

セキュリティ, パスワードの暗号化, xviii

そ

- ソフトウェア, 削除, 6-1, 6-10
- ソフトウェアの要件, 2-7

た

単一 Oracle ホームのコンポーネント, 1-13

ち

致命的エラー, E-4

て

- ディスク
 - RAW デバイスの構成, 1-9, 2-36
 - 自動ストレージ管理での構成, 2-33
- ディスク・グループ
 - 自動ストレージ管理, 1-19
 - 自動ストレージ管理, ASM の冗長性レベル, 2-30
 - 自動ストレージ管理ディスク・グループに関する推奨事項, 2-30
- ディスク・デバイス
 - 自動ストレージ管理での管理, 1-19
 - 複数, 1-18
- ディスクのストライプ化, A-12
- ディスクのミラー化, A-12
- ディスク領域
 - ASM における事前構成済データベースの要件, 2-31
 - チェック, 2-4
- ディレクトリ
 - 個別データファイル・ディレクトリの作成, 2-28
 - データベース・ファイル・ディレクトリ, 2-26
- データ・ウェアハウス
 - Enterprise Edition インストール・タイプ, 1-8
 - 事前構成済データベース・タイプ, 1-17
- データ消失
 - 自動ストレージ管理での最小化, 2-31
- データファイル, 5-11
 - 記憶域オプション, 2-25
 - 個別ディレクトリの作成, 2-28
 - 最小ディスク領域, 2-27
 - 自動ストレージ管理での管理, 1-19

- ファイル・システムに関する推奨事項, 2-26
- ファイル・システムの記憶域オプション, 2-26
- データベース
 - Oracle HTML DB の削除, 6-2
 - REDO ログ・ファイル, 5-12
 - アカウント, 5-4
 - アップグレードの要件, 1-24
 - カスタム, 管理オプション, 1-22
 - 記憶域オプション, 1-18
 - 削除, 6-1 ~ 6-10
 - 事前構成済, 管理オプション, 1-21
 - 自動ストレージ管理の要件, 2-31
 - 初期化パラメータ・ファイル, 5-10
 - 制御ファイル, 5-13
 - タイプ, 事前構成済, 1-17
 - データファイル, 5-11
 - バックアップ, 1-9, 1-23
 - 表領域, 5-11
 - リカバリ, 1-9, 1-23
- データベースのカスタム・インストール・タイプ, 定義, 1-8
- データベースのバックアップ
 - アップグレード前の実行, 3-3
 - 自動, 「拡張」インストール方法, 1-9
 - 自動, 有効化, 1-23
- データベースのリカバリ, 1-9, 1-23
- データベース・パスワードの暗号化, xviii
- デバイス名, `asmtoolg` での作成, 2-34
- デフォルトの初期化パラメータ・ファイル, `init.ora`, 5-10
- デフォルトの制御ファイル, 5-13
- デフォルトのデータファイル, 5-11
- デフォルトの表領域, 5-11
- 電子メール通知, 1-24

と

- ドキュメント
 - Oracle Universal Installer の使用, 1-12
- トラブルシューティング, E-1 ~ E-5
 - インベントリ・ログ・ファイル, E-3
 - 致命的エラー, E-4
- トランザクション処理
 - Enterprise Edition インストール・タイプ, 1-8
 - 事前構成済データベース・タイプ, 1-17

に

- 認証サポート
 - インストール前の要件, 2-39

ね

- ネットワーク・アダプタ
 - ネットワーク化されていないコンピュータ, 2-12
 - 複数の別名を持つコンピュータ, 2-12
 - プライマリ, 複数の別名を持つコンピュータ, 2-12
 - プライマリ, マルチホーム・コンピュータ, 2-11
 - プライマリ・アダプタの決定方法, 2-13
 - 「ループバック・アダプタ」、「プライマリ・ネットワーク・アダプタ」も参照
- ネットワーク・カード, 複数, 2-11
- ネットワーク化されていないコンピュータ, 2-12
- ネットワークのトピック, 2-10 ~ 2-25
 - DHCP コンピュータ, 2-10
 - 説明, 2-10
 - ネットワーク化されていないコンピュータ, 2-12
 - 複数のネットワーク・カード, 2-11
 - 複数の別名を持つコンピュータ, 2-12
 - ラップトップ, 2-12
 - ループバック・アダプタ, 2-13 ~ 2-25

は

- パーティション
 - `raw`, A-13
 - 自動ストレージ管理での使用, 2-30
- ハードウェアの要件, 2-7
- パスワード
 - DBSNMP, 3-11
 - SYS, 3-11
 - SYSTEMAN, 3-11
 - SYSTEM, 3-11
 - ガイドライン, 3-11
 - 変更, 5-3, 5-7
 - ロック解除, 5-7
- パスワードの暗号化, xviii
- パスワード・ファイル
 - RAW デバイス, 2-38
- バッチ・モード, `NLS_LANG` パラメータの設定, C-5
- パフォーマンス
 - Optimal Flexible Architecture, A-12
 - 向上, A-12

ひ

非対話型インストーラ

エラー, E-4

「記録」モード, B-4

説明, B-2

手順, B-2 ~ B-5

「非対話型の削除」、「レスポンス・ファイル」も参照

標準冗長性, 自動ストレージ管理の冗長性レベル, 1-19

表領域, 5-11

SYSTEM, 5-11

TEMP, 5-11

UNDOTBS, 5-11

USERS, 5-11

大規模ソートのための拡張, 5-11

データベース内, 5-11

ふ

ファイル

listener.ora, 4-6

Oracle Universal Installer のログ・ファイル, E-3

REDO ログ・ファイル

RAW デバイス, 2-37

SPFILE RAW デバイス, 2-38

tnsnames.ora, 4-6

サーバー・パラメータ・ファイル, RAW デバイス, 2-38

制御ファイル, RAW デバイス, 2-37

転送ユーティリティ, Data Pump Import および Export, xix

パスワード・ファイル

RAW デバイス, 2-38

ファイル・システム

システム要件, 2-3

データファイルとリカバリ・ファイルの記憶域オプション, 2-26

データファイルに使用, 2-26

データファイルの記憶域オプション, 2-25

ファイル・システム, 別のファイル・システムでのデータベースの作成, 1-9

複数の Oracle ホーム, システム識別子, 5-9

複数の別名, コンピュータ, 2-12

複数の別名を持つコンピュータ, 2-12

プライマリ・ネットワーク・アダプタ

決定方法, 2-13

「ループバック・アダプタ」、「ネットワーク・アダプタ」も参照

プロセス, 既存のリスナー・プロセスの停止, 2-39

へ

別名, コンピュータ上の複数の別名, 2-12

ほ

ポート

iSQL*Plus, デフォルト, D-2

iSQL*Plus, 変更, D-4

Oracle Enterprise Manager Database Control, デフォルト, D-2

Oracle Enterprise Manager Database Control, 変更, D-3

Oracle Management Agent, デフォルト, D-2

Oracle Management Agent の HTTP, 変更, D-3

Oracle Services for Microsoft Transaction Server
ポート, デフォルト, D-2

Oracle Ultra Search, デフォルト, D-2

Oracle Ultra Search, 変更, D-5

アクセス URL, D-2

アプリケーション用の構成, D-2

デフォルトの範囲, D-1

ま

マルチホーム・コンピュータ, インストール, 2-11

め

メッセージ・キューイング・システム, 接続, 1-6

メモリーを多く使用するデータベース・インスタンス,
ラージ・ページ・サポート, xix

ゆ

ユーザー名

ANONYMOUS, 5-4

BI, 5-4

CTXSYS, 5-4

DBSNMP, 5-4

DIP, 5-4

DMSYS, 5-4
EXFSYS, 5-4
HR, 5-4
IX, 5-4
LBACSYS, 5-4
MDDATA, 5-4
MDSYS, 5-4
MGMT_VIEW, 5-4
ODM, 5-5
ODM_MTR, 5-5
OE, 5-5
OLAPSYS, 5-5
ORDPLUGINS, 5-5
ORDSYS, 5-5
OUTLN, 5-5
PM, 5-5
SCOTT アカウント, 5-5
SH, 5-5
SI_INFORMTN_SCHEMA, 5-5
SYS, 5-5
SYSMAN, 5-6
SYSTEM, 5-6
WK_TEST, 5-6
WKPROXY, 5-6
WKSYS, 5-6
WMSYS, 5-6
XDB, 5-6
パスワードの変更, 5-7

よ

要件, 2-1 ~ 2-42
JRE, 2-3
Oracle Enterprise Manager, 2-39
Oracle Transparent Gateway, 2-41
Service Pack, 2-5
Web ブラウザのサポート, 2-9
Windows Telnet サービス, 2-7
Windows XP
 サポートされるコンポーネント, 2-9
Windows ターミナル サービス, 2-8
Windows リモート デスクトップ接続のサポート,
 2-8
ソフトウェア, 2-5
ソフトウェアの要件, 2-7
データベースのアップグレード, 1-24
ハードウェア, 2-2

ハードウェア, 確認, 2-4
ハードウェアの要件, 2-7
ハード・ディスク領域, 2-3
要件, ハードウェアおよびソフトウェア, 2-7

ら

ライセンスの問題, 1-10
ラップトップ, Oracle Database のインストール, 2-12

り

リカバリ・ファイル, ファイル・システムの記憶域オ
 プション, 2-26
リスナー, 既存のリスナー・プロセスの停止, 2-39
リモート・アクセス・ソフトウェア, 3-8
リモート・インストール
 CD-ROM または DVD ドライブ, 3-6
 リモート・アクセス・ソフトウェア, 3-8
リリース 1 (10.1) で推奨およびサポートされていない
 コンポーネント, xxiii
リリース 1 (10.1) の新機能, xvii ~ xxi
リリース 2 (9.2.0.4) の新機能, xxiii ~ xxv

る

ループバック・アダプタ
Windows 2000 からの削除, 2-24
Windows 2000 でのインストール, 2-18
Windows 2003 からの削除, 2-24
Windows 2003 でのインストール, 2-22
Windows NT からの削除, 2-24
Windows NT でのインストール, 2-14
Windows XP からの削除, 2-24
Windows XP でのインストール, 2-22
インストール, 2-13, 2-25
インストールされているかどうかのチェック, 2-14
説明, 2-13
ネットワーク化されていないコンピュータ, 2-12
必要な場合, 2-13
複数の別名を持つコンピュータ, 2-12
「ネットワーク・アダプタ」、「プライマリ・ネット
 ワーク・アダプタ」も参照

れ

例

- 自動ストレージ管理障害グループ, 2-31
- レジストリ, 使用時に必要な注意, 6-8
- レスポンス・ファイル
 - custom.rsp, B-3
 - dbca.rsp, B-3
 - enterprise.rsp, B-3
 - netca.rsp, B-3
 - personal.rsp, B-3
 - standard.rsp, B-3
- インストール時の指定, B-5
- カスタマイズ, B-3
 - 作成, B-4
 - サンプル, B-3
 - 使用, B-2
 - メディア, B-2
- 「非対話型インストール」も参照

ろ

- ローカル・デバイス, データファイルに使用, 2-27
- ログ・ファイル, E-3
 - インストール・セッションの確認, E-3
 - トラブルシューティング, E-3
- 論理ボリューム・マネージャ (LVM)
 - RAW デバイスの構成, 2-36
 - 自動ストレージ管理での推奨事項, 2-30
 - 複数のディスク, 1-18

わ

ワークフロー

- E-Business 統合, 1-5
- アプリケーションベース, 1-5